
夢色彩のカーバンクル

倉元裕紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢色彩のカーバンクル

【Nコード】

N6452Y

【作者名】

倉元裕紀

【あらすじ】

前世の記憶。それは夢を通して伝えられる、過去の自分からの贈り物。世代を超えて伝えられる、忠告、運命、そして思い出。世界中の人々が必ず見るその記憶を、レオンはなぜか見られずにいた。そこで彼は冒険者になることを決意する。自分の魂を象る遺産、その場所を示すと言われている導きの妖精、カーバンクルに出会うために。世代を重ねる人間たちと、不死の存在であるカーバンクルが共存する世界。その中で成長していくレオンの物語。

雪解けの道

まだ雪が残っているからなのか、荷馬車越しに伝わってくる振動も控えめだ。まるで今日の日の僕の為に、雪を残しておいてくれたみたいに。春が雪解けを先延ばしにしてくれていたのだろうか。

きつと、明日からは本格的な春。

自然と顔が綻ぶ。

もつとも、村を出る時から、ずっと緩みっぱなしだったけれど。

澄んだ心地いい空気。

何かの果物を干した物だろうか。甘い匂いが漂ってくる。

何より、抑えきれない期待。

レオンは馬車の外に目を向ける。

抜けるような青空。雲一つない、まさに快晴。

本当にいい日だ。

神様と、そしてイブ様に感謝しないと。

「おーい。坊主」

荷馬車の御者の声。まだ若い男性だ。たまに村までやってくる行商の人らしい。今日までほとんど面識はなかったが、レオンの旅立ちの事を聞いて、ついでだからいいよと快く馬車に乗せてくれた、優しい人だ。

レオンは馬車の中から顔だけ出して聞いた。

「何ですか？」

御者の男性は、手綱を握ったまま、ちらりとだけこちらを見る。

口元が少しあがっていた。

「見えるだろ？」

彼の言葉の意味がすぐには飲み込めなかった。だけど、彼と同じように前を向いてみると、すぐに分かった。

山を下りた先。まだ遠いその先には、見渡す限りの平原が広がっている。

そして、その広大な土地にぼつりと、だが確かに町が見えた。
自治都市ユースアイ。

「うわぁ・・・！」

目を輝かせるレオンを見て、御者は少し苦笑したようだ。

「ちっさい町だよなぁ」

「小さいんですか？」

きょとんとした顔で聞くと、今度は声を出して笑われた。それがどうしてなのか分からなかったので、レオンはますます首を捻った。
「小さい小さい。まだ出来て400年くらいだし、それに、交通の要所ってわけでもないから、あんまり大きくならないんだよなぁ」

「へえ・・・」

「でも、住んでるのはいい奴ばかりだから、坊主みたいな田舎者にはちょうどいいな。せいぜい腕を磨いて、名のある冒険者になってくれよ。出来たら、サイレントコールドくらいの」

レオンは照れて頭を掻く。

「いや、そこまでは、ちよつと・・・」

「そうか？じゃあ、俺のお得意様になってくれればいいや」

男はそこでまた笑った。やっぱり理由は分からなかったが、レオンもつられて笑った。

ひとしきり笑ったところで、御者がまた一瞬だけこちらを見た。

「とうるか、坊主。お前、ジーニアス？」

ジーニアスとは魔法が使える冒険者の総称だ。つまり、彼の質問の意味は、貴方は魔法が使えますかという事である。

「いえ、魔法は全然」

「でも、サイレントコールドの故郷だよな？お前の村」

「あ、はい。でも、僕は全く才能がないみたいで。一応調べて貰おうと思っているんですけど、たぶん魔法はダメですね。だから、アスリート志望で頑張ってみようかと」

アスリートとはジーニアスの反対。つまり魔法が使えない冒険者の事。冒険者を大別すると、このどちらかになる。アスリートの方は、剣とか弓とか、体力勝負の冒険者が多い。

「それは苦勞しそうだな。お前はあんまり身体が大きくないし……っていうか、明らかに弱そうだもんなあ。俺の方が強いんじゃないか？」

酷い言われようだが、まったく異論はなかった。レオン自身も、それは自覚している。

実際、レオンは村の中でも、あまり腕っ節が強いとは言えなかった。身長は普通くらい。身体もあまり逞しいとは言えない。幼い頃は、よく女の子と間違えられたほどで、きっと、母親に似たのだろうとよく言われる。黒い髪と濃い瞳はまさに母親ゆずりである。だが、母親には魔法の才能が少しだけあったのに、それはレオンにはさっぱり遺伝しなかった。

多少残念ではあるが、レオンはあまり気にしていない。父親も母親も、レオンの旅立ちを応援してくれた。優しい両親だから、それだけで十分だ。

レオンは苦笑しながら言った。

「そうですね。一応はいろいろ訓練してみたんですけど」

「なんかさ。一年くらいたったたら、あそこの雑貨屋か何かで働いてる気がする」

「そんな事は……ないとは言切れないですね」

もしダンジョンで大怪我でもしたら、そうなっているかもしれない。

その返答に、御者の男は少し口元をあげる。

「謙虚だねえ。まあ、身体が小さいアスリートでも、伝説になった奴はいるんだ。スニークとかはいい例だよな。お前も大方、その辺りを目指してるんだろ？」

その質問はレオンには答えにくいものだった。

普通はそこで、はいとかいいえとか、はっきり答えられるのだ。

冒険者を志す人達は、みんな確固たる目標というか、指針がある。サイレントコールドとかスニークというのは、冒険者として伝説になった人達に与えられた称号で、今を生きる冒険者達の目標でもある。だが、彼らの名前には、それ以上の意味もある。

仕方なく、レオンは正直に答える事にした。

「いえ、その・・・なんていうか、僕は分からないんです」
「へ？」

男が驚いた表情でこちらを見る。予想していた通りの反応だった。そんなに驚かせて申し訳ないという気持ちだが、レオンの心の中で急速に膨らんだ。

若干焦りながらも、慎重に言葉を選んで説明する。

「そのですね・・・実は全く前世の記憶がないんです。イブ様どころか、夢自体も全く見た事がなくて。だから、冒険者になったら分かるんじゃないかと思って、決心したんです。もし一人前の冒険者になれば、アーツを手に入れられたら、前世が分かるんじゃないかって」

これで分かって貰えるだろうかと不安になりながら、レオンは御者の男の顔を見つめる。

その男は目を見開いたまま固まっていた。彼のこんな顔を見るのは初めてだ。村を経ってからまだ一日半ほどの付き合いだが、いつも気さくで余裕のある男。まだ若く見えるが、自分よりは明らかに年上だし、自分が彼の年齢になった時、彼くらい落ち着きある大人になれているとは思えない。そんな男が、思考停止するほどの事実なのだ。頭では分かっているものの、目の当たりにしてみると、自分でも意外なくらいだった。

「・・・やっぱり変ですか？」

おずおずと聞くと、男はやっと我に返ったようだった。

「あ、いや・・・まあ、そうだな。少なくとも、そんな奴は初めて聞いた」

「初めてですか？やっぱり珍しいんですね」

「珍しいっていうか・・・そんな奴がいるとは思わなかった」

レオンはそこで、かねてからの懸念を相談してみる事にした。

「これ・・・ギルドに話しても、受け入れて貰えると思いますか？」

男は難しい顔をしながら前を向いた。

レオンにしてみれば、前世が見えないというのが、冒険者を志す最大の動機でもあり、また、最大の懸念でもあった。自分には見えないその前世というものを、多くの冒険者は自分の指針にする。前世が剣士ならば剣士の道を、魔術師なら魔術師の道を志すものなのだ。それが最も自分に適した道で、何より、前世の記憶がその楽しさを教えてくれる。

その指針がない自分は、いわば真っ暗闇にいる状態。これがどれくらいのハンデなのか、自分では分からないのだが、不安は不安だった。

黙ったまましばらく考えていたが、やがて唐突に口を開いた。

「俺さ。今は見ての通りの商売人だけど、夢の中では料理人なんだよ」

突然の話題に、レオンは反応が出来なかった。

「料理人っていつても、俺に見えるのは見習いの時の記憶だけなんだけどさ。しかも、そんなに大きくないレストランなんだ。だからまあ、そんなに腕がいいわけじゃなかったんだろうな。だけど、料理に魅せられているのは、もの凄く伝わってくるわけ。見習いだから、自分の好きな料理なんか作らせて貰えないだけどさ。でも、それでも楽しかったんだ。食材を前にした時の高揚感だけは変わらない。今だって、料理人じゃないけど、料理は好きなんだ。昨日の煮込み料理も旨かっただろ？」

レオンは頷く。確かに素人の料理ではなかったが、行商だから料理も自然に身についたのだろうと思いこんでいた。

「そんな俺でも、今は料理人じゃなくて行商をやってる。もちろん、食材をみる時には役に立つ事もあるけど、せいぜいそんな程度。だから、まあ、前世なんてその程度だと思えばいいんじゃないか？ギ

ルドの方も、まあ困るかもしれないけど、みんながみんな、前世と同じ道を選ぶってわけじゃないと思うし・・・ユースアイのギルドは小さいところだから、いきなり追い返したりはしないと思うな。もっと大都市だと、大勢いて忙しいから、坊主みたいな初心者には手にされないかもしれないけど」

「そうですか・・・」

レオンは少し考え込む。

そこで男が可笑しそうに言った。

「今から戻れっていうのはお断りだからな」
慌ててレオンは首を振る。

「いえ！全然。あの、話して貰ってありがとうございます」

「あんな話でよければいつでも。しかし・・・前世の記憶がないから冒険者になりたいっていうのも、結構な話だよなあ」

「やっぱり変ですよ」

「だなあ。でも、もしかしたら、お前、凄い奴なんじゃないか？」

突然の言葉に、レオンは戸惑う。

「え・・・何ですか？」

「だって、前世がないなんて奴、相当なレアなわけだ。もしかしたら、お前1人かもしれない。実は、凄い秘密があるとか、そういう事かもしれないだろ？」

「いや、秘密って言われても」

「もしかしたら、歴史に名を残すんじゃないか？サイレントコールドみたいに」

「だから僕、魔法使えませんか」

「じゃあ、スニークみたいに」

「僕の事、弱そうだって言ってたじゃないですか」

「いや、失敗したなあ。そんな大物だとは思わなかったから」

「あの、人の話を・・・」

「俺、伝説の男の旅立ちを案内した男になったわけか。どうせなら、もう少しになる話をしとくんだったなあ。いや、今でも遅くない

か。そうか。そうだよな。よし、じゃあ、とりあえず、俺の女性遍歴をざっと・・・」

全く為にならない予感しかしなかった。

「いや、それはちよっと・・・」

「そうか？確実に為になると思うけど。お前だって、これから何人もの女性を泣かせることになるわけだし」

「勝手に変な予定を立てないで下さい」

「いやいや。絶対泣かせるぞお。冒険者だって、いろんな所をふらふらするわけだし。つまり、それだけ出会いがあるわけだからな。

特にお前は、腕っ節は弱そうだけど、見た目は悪くないっていうか・・・絶対、各所で女の子をひっかけていくタイプだな」

「人聞きが悪いですよ」

そこで急に、男の目が細くなった。

「よく考えたら、そういうタイプの男が一番迷惑なんだよなあ。うろちよろしてないで一カ所に留まってくれればいいんだけど・・・でも、お前は伝説になってしまいうわけだから、そんなわけにもいかないだろうし」

何か言い返そうとしたが、なにやら雲行きが怪しかったので、黙り込む。

男の横目には明らかな敵意が込められていた。

「そうか。そうだよなあ。将来伝説になるとはいえ、今はまだひよっこなわけだ。ここでさくっと処分しておくって手もあるよなあ。いや、それどころか、ここで俺が倒せば、もしかして、俺が伝説の男って事に・・・」

「いえ、ならないです・・・よ、ね？」

最後の方は声にならなかった。男がすっとこちらを向いたからである。

もの凄い目をした男に睨まれる格好になった。

まだ平原の手前の山奥。

逃げたら逃げたで、気温や獣といった敵がいる。食料もほとんど

ない。

どうしよう。

だが、不意に男の表情が緩んだ。
助かった。

レオンの正直な感想はそれだった。

男がまた前を向きながら言う。

「まあ、そういう事だから」

急な言葉に、レオンは戸惑う。

「何がですか？」

「不用意に女に手を出すのはまずいつて事。変なところで恨みをか
ったりするからさ。だから、気をつけた方がいい。為になった？」

「・・・はい」

気をつけるものにも、そんなつもりはさらさらないわけだがら、
はつきり言つて余計なお世話だったが、口にすることは出来なかつ
た。

少なくとも、さっきの眼差しを忘れるまでは。

何事もなかったかのような口調で、御者の男は口を開く。

「しかし、天気いいなあ。これだと、明日の朝には着けそうだ。
お前もそのつもりで準備しとけよ」

「あ、はい。分かりました」

男は機嫌良さそうに口笛を吹き始める。全く聞いた事のない、テ
ンポの速い曲だった。

レオンはなんとなく、眼下に広がる平原を見つめる。

下っていく山道も、徐々に雪が減りつつある。標高が下がってき
た証拠かもしれない。ずっと山奥で育ってきたレオンにとって、初
めての下山。不安もあるが、やはり期待の方が大きい。御者の彼が
言うように、多くの人との出会いがあるだろう。最初に会った彼か
ら得た、記念すべき最初の教訓は、多少残念な内容だったけれど。
でも、面白い。

レオンは微笑む。きっとこれからそうだ。きっと楽しい事がた

くさんあるはず。

この先の平原。春の草原の中にある小さな町。ユースアイには。その姿も徐々に近づいてくる。

風も次第に暖かくなる。

春。

旅立ち。

雪の下から新芽が顔を出す。そんな季節だった。

導きの妖精

毛の長いマフラーを引きずったヒヨコが、頭の上を右往左往して
いる。

簡単に表現するなら、そんな感じだった。

レオンは自治都市ユースアイのギルド事務所にいた。正確には、冒険者ギルド・アンリミテッドのユースアイ支部事務局。だけど、この町まで連れてきて御者の人も、ここに来る途中で道を尋ねた人も、皆がここを、単にギルド事務所と呼んでいた。それどころか、目の前に座っている受付のお姉さんでさえ、正式名称では呼ばなかった。レオンが正式名称を知ったのは、この入り口に書いてあるのを読んだからだ、それも掠れてしまっていて、かなり読みにくかった。

入った途端にいかつい男達に睨まれる。そんなシチュエーションを予想していたのだが、聞いていた通り、人は少なかった。それでも、ぴりぴりした雰囲気の方が数人ベンチに腰掛けていたので、レオンは少し緊張した。

それでも、何事もなく窓口まで行き、冒険者見習いとして登録したい旨を説明すると、あっけなく手続きが始まった。田舎者のレオンにとって、こういう手続きは初めてなので、何か失敗しないか心配だったが、とりあえず、最初は上手くいったようだった。

その矢先に、頭に飛び乗ってきたのが、この生物だった。

「・・・あの、すみません」

おずおずと聞くと、受付の女性がこちらを見上げる。自分より年上のお姉さんで、理知的で落ち着いた雰囲気の人である。彼女はレオンの書類を作ってくれているらしく、椅子に腰掛けたままだった。

「はい。何か？」

ブラウンの瞳には、こちらをからかっている色は見えない。だが、

レオンの今の状態に気付いていないわけがない。

やや躊躇したものの、聞かないわけにはいかなかった。

「この、頭の上をうろちよろしてるのは・・・」

当然の質問だと思ったのだが、受付の人はきよとした顔で聞き返してきた。

「カーバンクルですけど・・・」

「いえ、それは僕にも分かります」

それくらいはレオンも知っていた。色違いだが、村に一匹だけいたからである。

「そうじゃなくてですね・・・なんで、僕の頭の上をうろちよろしてるんですか？」

受付のお姉さんは、ようやく理解したという顔になる。

「あ、すみません。最近だと、みなさん既にご存じの場合が多いので、説明を省略させて頂いていたんです」

はあそうなんですかと、レオンは生返事を返す。つまり、知らなかった自分の方が珍しいという事のようにだ。

「そのカーバンクルは、そうやって貴方の前世を見ているんです。もちろん全部は見られませんが、一部を読みとる事が出来ます。それを私に伝えて貰って、今度は私がギルドのレコードを調べます。そうすれば、貴方のおおよその適性が分かるんですよ」

そんな事が出来るとは初耳だった。村にいたカーバンクルは、ただのペット同然で、ほとんど役には立っていなかったからである。

「カーバンクルって、そんな事が出来るんですか？」

「あ、でも、それはギルドに住み着いている子だけです。他の場所にいる子には出来ないみたいです。特技とか芸みたいなものじゃないかとか、そういう役目として居着いているんじゃないかとか、諸説あるみたいですけど・・・」

「へえ・・・」

そこで、レオンの頭の上にいたカーバンクルが、受付の女性の方に飛び移った。反動のようなものはほとんど感じない。感じたのは、

ふさふさの毛の感覚だけだった。

藍色の瞳が一瞬だけこちらを向くと、そのまま受付の女性の頭に上って、そこでまたくるくると堂々巡りを始めた。

それを全く気にかける様子もなく、受付の女性は微笑んで、右手を部屋の奥に向けた。

「もうしばらくかかりますので、そちらにおかけになってお待ち下さい」

レオンは軽く頭を下げてから、示されたベンチに腰掛けた。入った時にそこにいた男達は、もういなかった。

他に見るものもないので、レオンは、女性の頭の上をくるくる回っているライトイエローの生物をなんとなく眺めていた。女性は気にする素振りもなく、書類作りに精を出しているようだ。

カーバンクル。別名、導きの妖精。

見た目で一番近いのは、キツネやイタチかもしれない。同じ4足歩行の生物。それを子供サイズに縮小して、体毛を長くふさふさにした生物というのが、だいたいの外見である。

だが、その実態の多くは謎に包まれている。

例えば、体重が非常に軽い事。体毛や瞳の色が様々な事。群を作らない事などが挙げられる。

だが、最大の不思議は、この生物には死というものがないという事実である。

カーバンクルには寿命がない。少なくとも、自然死した個体は知られていない。さらに、カーバンクルは食事出来るが、しなくても生きていける。食べても排泄はしない。眠る事もするのだが、それが必要なのかは不明。呼吸が必要なのかすらもはっきりしない。水中を普通に歩く個体もいるという噂だった。もっと言えば、どうやって数を増やしているのかも、まるで分からない。オスとメスがあるのかすらも分かっていないのだ。

今までにいろいろな学者が調べたが、まるで何も分かっていない。捕らえようにも、いつの間にか逃げてしまう。だから、大昔にもう

諦めてしまったというのが、レオンの村の長老の話だった。

まさに不思議生物なのだが、大昔の人達の間でも、そもそも生物となのかという話にはなかったらしい。

そこで、とりあえずのカテゴリとして、カーバンクルは妖精という事になっている。他に妖精と分類されているものはないから、専用枠である。それだけ特殊な種なのだ。

そういうはっきりしない存在なのだが、人を襲うわけでもないし、作物を荒らす事もない。気ままだが、大人しいし、鳴いたり暴れたりするわけでもない。特別な世話も必要ないし、懐いた人間なら言うことも聞く。そして何より、見た目が愛らしい。

そういうわけで、レオンの村ではペット以外の何者でもなかった。何か特殊能力があったわけではないが、見た目で少し癒される。見かけたら撫でてやって、何か食べ物でも与えてみる。それを食べる姿にまた癒される。はつきり言って、かなり良いご身分である。だけど、まあそれくらいはいいかなど思わせるくらいの愛らしさがあった。

だけど、ここのカーバンクルは立派に仕事をこなしているようだ。能力の理屈は不明だし、見た目には、人の頭の上をくるくる回っているだけなのだが、このギルドの一翼を担っているらしい。思ったより多才だった事に、レオンは驚きだった。

やがて、仕事が済んだのか、ぐるぐるしていたカーバンクルは不意に足を止めて、そのまま女性の頭の上で丸くなった。色合いもあって、金の王冠みたいに見える。

妖精は目を閉じていた。まさか、そこで休憩するつもりだろうか。その数秒後、女性は書類を持って立ち上がった。まったく頭上を気にする様子はないが、カーバンクルの方もバランス感覚がいいのか、張り付いたように動かなかった。

そのまま、女性はカウンターの奥の扉の向こうに消えた。見るものがなくなってしまったので、仕方なく、事務所の中を見回してみる。

木で出来た建物。このベンチも、カウンターも椅子も、全部同じ木材を使っているようだ。照明はあまり多くないが、それでも十分なのだろう。あまり広くはない部屋に、事務員らしき女性が1人。レオンの母親くらいの年齢だろうか。その女性も、さっきの受付の人も、全く同じ服を着ている。ギルドの制服なのだろうか。黒が基調で、なんだが格好いい。そういう服を着ている人は、もちろんレオンの村にはいない。御者の人は小さい町だと言っていたが、レオンにしてみたら、十分都会である。

ここから始まる。

不意に頭を過ぎったその言葉に、レオンは急に気分が高揚してきた。緊張していたためだろうか、今まで忘れてしまっていたワクワク感が戻ってきたのである。

新しい世界。その始まりの場所。思ったより、劇的な事はなかったが、田舎者の自分にはこれくらいがちょうどいい。あまり刺激が強すぎても困る。

ここから頑張って、何とか一人前の冒険者になる。とりあえずはそれが目標だが、そこまでの道のりを想像するだけでも、レオンは楽しみで仕方なかった。

新しい出会いがあって、新しい事を知って、新しい自分を見つける。

そこでレオンは、ふと気付いた事があった。

自分の前世を見たい。それがこの旅立ちの目的のひとつでもある。だが、さっきの受付の女性は、あのカーバンクルが自分の前世を読みとってくれると言っていた。そして、詳しく調べるとも言っていた。

もしかして、それではっきりするのだろうか。

はっきりしてしまうのだろうか。

もしここで分かってしまったらと思うと、レオンの胸中は複雑だった。目的が達成されるのだから、もちろん悪いわけではない。だからといって、こんなにあっさり分かってしまうと、自分の悩みはな

んだったのかと思えてしまう。

どちらがいいんだろう。

聞きたいような、聞きたくないような。

レオンの予定では、自分の前世が分かるのは、見習い冒険者卒業の時だった。

一人前の冒険者として認められるには、魂の試練場というダンジョンを攻略しなければならない。その最奥で、その冒険者はカーバンクルと出会うと言われている。そのカーバンクルが、自分の魂の場所まで案内してくれると言われているのだ。

その魂の名前がアーツ。

前世の自分が、来世の自分の為に残した遺産。それを手に入れる事が、冒険者の証。

それを手に入れたら、自分の前世の事が分かる。

そんな予定を立てていたのだけれど。

「レオンさん」

不意に名前を呼ばれて我に返ると、いつの間にか、受付の女性が戻ってきていた。頭の上の妖精もそのままである。本当に装飾品みたいだった。

レオンは慌てて立ち上がって、窓口に向かう。

ここで分かっても、まあ、それはそれでいいじゃないか。懸念がひとつ解消されたと思えばいい。どちらにしたって、冒険者を目指すのは一緒なんだから。

だが、どうやらそんな話ではなかったようだ。受付の女性の表情は、傍目にも分かるくらい困惑顔だったのである。

「あの・・・申し訳ないんですけど、該当するレコードが見つからなかったんです」

レコードというのはよく知らないが、要は、自分の前世がよく分からなかったという意味だろう。

嬉しいような、残念なような、入り交じったような表情で、レオンは頷いた。

「そうですか・・・あの、やっぱり、珍しい事なんですか？」

女性は控えめに頷く。少し揺れたはずだが、頭上のカーバンクルに起きる気配はない。

「ええ、まあ・・・それで、出来たら、レオンさん自身が見た前世の記憶を覚えていただけませんか？そこからまた探してみますので」「記憶ですか」

レオンは苦笑した。ないものは教えようがない。

「あの・・・？」

「あ、いえ、実はですね・・・あの、驚かないで下さいね」

「驚くような前世なんですか!？」

何か期待するような響きが含まれていた気がしたが、それは必死に無視した。

「実は、僕、前世の記憶がないんです。今まで全く、夢を見た事がなくて・・・」

レオンはなるべく驚かせないようにゆっくりと言ったのだが、無駄だったようだ。

思いつきり気まずい静寂。

受付の女性は完全に固まっているし、奥で事務をしている人も、手が止まっていた。

他に誰もいなかったのが、救いといえば救いだった。

カーバンクルだけが呑気に眠っている。

どうしようかと困り果てたところで、受付の女性が絞り出すように言った。

「・・・あの、冗談ではないですよね？」

レオンは慌てて手を振る。そう思われるのが一番困る。

「いえいえ!そんな、冗談なんて・・・」

それを見て、受付の女性は額に手を当てた。何やら難しい顔をしていた。

「・・・もしかして、何か問題があったりしますか？」

もしかしたら追い返されるかもしれないという懸念が、再び顔を

見せ始める。

しばらく間があつてから、女性はこちらを向いた。

「えつとですね。ギルドに加盟する事は可能です。それ自体には、特に資格というものは必要ありませんので。ただ、前世が分からないというのは、レオンさんにとって不利になります。適性が分からないという事になりますから、何でも手探りという事になります。ですが、あの、もちろん、ご存じだと思いますが・・・」

そこで女性は間を取った。レオンもなんとなく姿勢を正した。ここからが、特に重要な話なのだ。

「冒険者は戦闘に重きを置きます。最初はある程度の安全を確保してありますが、基本的には命がけです。ですから、手探りと口で言うのは簡単ですが、その手探りにも命の危険が付きまといまます。人より苦勞するのはもちろんですが、冒険者の場合は、苦勞だけで済まない事もあるんです。あと・・・これは申し上げにくいんですが、レオンさんが仲間を探されるときに、恐らく障害になると思います。他の皆さんも命がけです。冷たいようですが、適性を十分に生かせていないレオンさんを受け入れる人は少ないと思うんです」

正直、ショックな話だった。

こんなに自分にハンデがあるとは思っていなかった。自分だけで済むならともかく、仲間が見つからない可能性であるのだ。

そうだったら、ずっと1人で戦うのだろうか。

それは無理だろう。何より、辛いだろう。

だけど。

レオンは微笑んだ。

「大丈夫です」

女性の瞳が少し大きくなる。

「心配してくれてありがとうございます。でも、とりあえず、やってみようと思うんです。あまり強くなれないかもしれないし、仲間も出来ないかもしれないけれど・・・でも、やってみないと分からないですから。とにかくやってみます。それでもダメだったら、村

に帰るなり、他の仕事を見つけるなりします。それくらいの決断は出来るつもりです。だから、挑戦だけはさせてくれませんか？」

「しばらく1人のままかもしれません。1人はつらいと思います。無理して冒険者にならなくてもいいんですよ？」

「1人じゃないですよ。ここまで乗せてきてくれた行商の人が言っていました。この町は良い人ばかりだって。だから、なんとかあります。ギルドの受付のお姉さんも、すごく優しい人ですし」

女性の真摯な瞳としばらく見つめ合った。

だが、やがてふっと微笑んでくれた。

「分かりました。では、ギルドとして正式にサポートさせて頂きます。何か分からない事がありましたら、何でも聞いて下さい」

「はい。これからよろしくお願いします」

レオンが頭を下げると、女性も少し笑って頭を下げる。

「よろしく願います」

その揺れには耐えられなかったのか、黄色のカーバンクルが頭からカウンターに滑り落ちてきた。

だが、目覚める気配はなかった。

気持ちよさそうに眠っている。

レオンと女性は、それを見て笑った。

「お疲れみたいです」

「そうですね。レオンさんの前世がなかなか見えなくて、大変だったみたいです」

「・・・すみません。起きたら代わりに謝っておいて下さい」

「それでしたら、どうぞ。撫でてやると喜びますから」

レオンは少し意表を突かれたが、すぐに撫でてみた。

村のカーバンクルとは色が違って、手触りはほとんど同じだった。ふかふかでふわふわ。いつまでも触っていたくなる。

「・・・あの、名前はなんて言うんですか？」

「私ですか？」

その言葉に、レオンは気付いた。

「あ・・・そういえば、聞いてませんでしたね」

「聞きたかったんですか？」

女性は悪戯っぽく笑う。なんというか、年上の余裕みたいなものを感じた。

少しどきどきしたが、そこで蘇ってきたのは御者の言葉だった。
妙なトラブルは遠慮したい。

「あ、いえ、すみません、その・・・聞かなくても、大丈夫ですよ
ね」

戸惑ったように言うと、それが可笑しかったのか、女性は吹き出した。

「すみません。そんなに困るとは思わなかったので・・・」

「そ、そうですよね。こちらこそ・・・」

「ケイトと呼んで下さい」

そう名乗ってケイトは微笑んだ。理知的で落ち着いた、ブラウンの髪と瞳の女性。恐らく20歳前後だろう。格好いい制服と、まとまったヘアスタイルのせいで大人っぽく見えるだけかもしれないけれど、少なくともレオンより年下という事はない。

「あと、この子はシニアです。もちろん、私が名付けたわけじゃないですけどね。だけど、このギルドで一番の年上なのは間違いないです」

「ということは、もしかして、町が出来てからずっといるんですか？」

「はい。少なくとも、もう400歳以上」

「へえ・・・」

どういうわけか、カーバンクルは一カ所に居着く事が多いらしい。人から聞いた話だったが、ここの妖精も、その例に漏れないようだ。その最長老の大御所も、今は愛らしい姿で寝息をたてていた。

マスター・ガレット

ユースアイはのどかな町だった。

きつと住みやすく豊かなのだろう。少なくとも、レオンのいた村とは比べものにならないほど過ごしやすい。この時期、村はまだ雪解けしている頃だが、ここは完全に春の装いである。町の周囲は綺麗な緑一色だったし、空気もまったく冷たくない。山を下つてきたとはいえ、ここもそこそこの標高があるはずだが、それでもこんなに違いがあるのかとレオンには驚きだった。

町の中は思ったほどうるさくはないが、もちろん、村よりも圧倒的に人が多い。そもそも、町の大きさが違うのだ。村何個分だろうかと思えるくらいの広さがある。大通りには石畳が敷いてあって、石造りの建物もある。どちらも、村にはなかった物だった。そもそも、道なんて概念がない場所だったのだ。

そんなわけで、田舎者のレオンだと、道に迷う可能性が十分にある。闇雲に歩いたら、確実に迷子になる自信があった。ギルド窓口のケイトさんに、大通り沿いにありますと説明されていたので、とりあえず石畳の上から出ないようにしているが、それでも不安なので、度々道を尋ねた。結局、歩いて10分くらいですと言われた場所にたどり着くまでに、30分はかかっただろう。もつとも、あまりの物珍しさに、思わず商店などを眺めたりしていたので、それで余計に時間をとられたのもあっただろうけれど。

それでもなんとか、目的の場所にたどり着いた。まだ日は高い。もしかしたら、日が暮れるまで迷う羽目になるかもしれないと覚悟していたが、なんとかなったようだ。

レオンが立っているのは、木製の巨大な両開きのドアの前。

看板には、ガレットの酒場の文字。

見上げると、本当に巨大な建物だった。レオンにしてみれば、こ

の町の建物はどれも十分に立派な物ばかりだったけれど、この建物は立派を通り越して、否応なく威圧感が感じられる。恐らく、木造3階建て。もしかしたら、4階があるのかもしれないが、レオンにとっては大差ない違いだった。幅も奥行きも、もの凄く広い。凄い物だという感想はもちろんあったが、どちらかというと、倒れてきそうで怖いなという思いが強かった。いったいどうやって、こんな巨大な物を支えているのだろうか。

何はともあれ、自分はここでお世話になるんだ。

レオンは深呼吸した。

やっぱり、少し緊張する。

そう思った時だった。

「じゃあ、ちよっくら行ってきまーす」

扉越しに、女の子の声が聞こえた。活発そうな、明るい口調だった。

それに答えたのは、対照的に、低くて、野太い声だった。

「しっかりと息の根を止めてこい！」

もの凄く物騒な発言だったが、声に似合い過ぎていた。

「分かっているって。というか、今日も来るわけ？」

「俺の勘がそう言ってる。新米はこの時期になると、懲りもせず次から次へとやってくる、相場は決まっている」

「そっかー。まあ、そうかもね」

「だから、ここできっちり処分しておかねえと面倒な事になる」

「でもさー、ケイトさんからの依頼を待った方がよくない？」

「あんなもん待ってられるか！とっとと行って、さくっと仕留めて来い！それがてめえの仕事だろうが！」

「はいはい。じゃあ、まあ、出会い頭にぶすつとやってくるよー」
そこで扉が開かれようとしていた。

レオンはどうしようか迷った。

新米って、自分みたいな冒険者見習いの事だろうか。

その息の根を止める。処分する。さくっと仕留める。

何でだろうか。

ケイトさんからの依頼とか言っていたけど。

その理由は分からない。分からないけれど、もしかして大ピンチだろうか。

逃げようかとも思ったが、扉が開かれるまで一瞬だったため、そんな暇はなかった。

扉の正面にレオンは立っていたため、必然的に、出てきた人物と目があった。

彼女もまた、ブラウンの瞳をしていた。年の頃は、たぶんレオンと同じ10代半ばくらい。利発そうな顔立ちに、栗色の髪を高い位置で縛ったヘアスタイルが相まって、より活発そうな印象が際だっている。

扉越しに聞こえた声は彼女のものだろう。だけど、顔立ちはともかく、あまり荒事が出来るようには見えなかった。一般的な少女のどちらかという華奢な体つき。しかも、厚手の淡いピンクの服の上に、白いエプロンを着けている。すごく平和的な格好だ。

それでも、出会い頭にぶすつとされないか、一応警戒してしまっただ。

「あ、もしかして、見習い冒険者の人？」

少女がさばさばとした感じで聞く。

ここではないと言ったら、今度こそ刺されるのだろうか。

だが、レオンが返事をする前に、少女がすたすたとこちらに歩み寄って来て、あつという間に腕を掴んできた。

「え？ あ、いや、その・・・」

慌てるレオンに、少女は笑いかける。屈託のない笑みだった。

「まあ、いいからいいから。お父さんに挨拶するんでしょ？」

「お父さんって？」

「いいからいいから。とにかく、入った入った」

楽しそうにそう言いながら、少女はレオンを店内に引っ張り込んだ。

店内は想像通り、もの凄く広かった。

中央の奥にカウンターがあり、その両脇には上り階段がある。そして、それ以外の場所には、丸いテーブルとイスが山ほど置いてあった。こんな大規模な建物の中に入るのは、もちろん初めてである。床も壁も木製で、特に光沢があるわけではないのだが、不思議と輝いて見えた。照明がたくさんあるせいだろうか。その照明も、見上げるくらい高い位置にある。

物珍しさに店内をキョロキョロ観察しているレオンを、少女はぐいぐいとカウンターまで引っ張っていく。屋内には食欲をそそるいい匂いが漂っていた。

店内のテーブルには空席が多いが、それはまだ昼間だからだろうか。それでも、こんな時間から酒を飲んでいるお客が10人ほどいた。そして、その全員が強面で、体つきがいい。間違いなく荒事をしている人達だろう。

つまり、冒険者達。

彼らと同じ場所にいる。その事実嬉しくなったが、目が合うと睨み返されたような気がしたので、じろじろ見るのは控えた。

10秒余りの道のりで、カウンターまでたどり着く。その辺りは、つんとした匂いが漂っていた。お酒の匂いだろうか。

そこにいる人物を見て、レオンは驚く。

なんというか、本当に想像通りの人物だったのだ。ギルドでは肩すかしだったが、時間差でついに巡り会ってしまった。特に会いたかったわけではないけれど、意味もなく感動した。

カウンターにいた男は、少女と言葉を交わす事なく、いきなりレオンに質問した。

「見習いか？」

「あ、はい・・・あの、ガレットさんですよね？」

男は値踏みするようにレオンを見てから、少女の方を向いた。

「おい。お前はとっとと仕事してこい」

「なんでー？こっちの方が面白そう」

「見せ物じゃねえんだ。いいから、さっさと終わらせてこい」

「しつかなないなあ。まあ、また後で会えるからいっかなー」

少女は諦めたようにそう言うと、不意にレオンの肩を叩く。

レオンがそちらを向くと、少女は不敵な笑みを浮かべた。

「頑張ってね。うちのお父さん、この町で最強だから」

「最強？」

「じゃあね。また後で」

そう言ってウインクすると、軽やかな足取りで店から出ていった。何を頑張るんだろうとレオンは首を捻ったが、よく分からなかった。とりあえず、刺されなくて済んだ事が、よかったといえればよかった。

「名前は？」

唐突に問われて、レオンはまたカウンターの男に視線を戻す。

「あ、すみませんでした。レオンです」

男は腕を組んだ。それだけで、剥き出しになった二の腕に相当な大ききの力瘤が出来た。

まさに想像通りである。

カウンター内に立っている目の前のこの男こそ、レオンがおぼろげに想像していた人物そのものだった。冒険者に志願した自分を出迎えるのは、きっとこういう人物だろうと思っていたのである。

浅黒い肌に逞しい体つき。厳めしくて、彫りの深い面構え。頼りになる人物というのはもちろんだが、見習い冒険者を指導する立場の人物としても、申し分ない容姿だった。具体的には、それだけの威厳と威圧感が間違いなく備わっている。そして、腕っ節もあるに違いない。少なくとも、腕相撲では絶対に勝てないし、腕を折られたとしても不思議はなかった。

まだ名乗って貰っていないが、彼が恐らく、この酒場の主人のガレットだろう。

「レオン。お前、ギルドに行ったか？」

「はい。それで、ここに挨拶してくるように言われて・・・」

「そうか」

男はレオンの言葉を遮ってそう言った。

こちらをじっと見つめてくる。見つめるというのは穏やかな表現で、レオンにしてみれば、睨まれている感じだった。

「1年だ」

突然、男はそう言った。

「はい？」

「1年だけは面倒みてやる。だが、それで駄目なら諦めろ。これが約束出来るか？」

レオンは自分に問いかけてみた。

周囲からは静かな話し声が聞こえてくる。誰もこちらを気にしている様子はない。それも当然だと言えるだろう。自分はまだ見習い以下の、とるに足らない存在。

レオンの答えは一つだった。

「あの・・・1年もお世話になっていいんですか？」

こんな自分を1年も面倒をみてくれるなんて、こんなに有り難い話はない。

男の太い眉がぴくりと動く。

だが、次の瞬間、にやりと笑った。男臭い、だけど、さっぱりして印象のいい笑みだ。

「ガレットだ。寝床と飯は俺に任せろ。特に、お前の身体はまだまだ成長の余地がある。もっと食わせてやるから覚悟しろ」

「食わせてって・・・そこまでして貰っていいんですか？」

そう聞くと、ガレットは笑った。

「謙虚な奴だな！いいから食え！とにかく食え！ちゃんとギルドから金を貰ってるから、そんな事は心配いらねえ。お前が立派な冒険者になって、そこで儲けて金を返せばいいんだよ」

「あ、なるほど・・・」

レオンは頷いた。そういう仕組みだとは知らなかった。

「お前、何も知らないんだな。最近は、妙な知識ばかりつけた連中

が多いから、それが当然ってふんぞり返ってる奴がいるんだ。そういう奴を見極めて、腐った奴を半殺しにするのが俺の仕事だ」

「半殺しって・・・」

店に入る前の、物騒な会話が頭を過ぎる。

「そういうわけだったんだが、俺はもう決めた。お前は面倒みてやる！1年間、せいぜい頑張ってみろ！」

そう言って、愉快そうに笑いながら肩を叩いてきた。床が抜けるんじゃないかと思うくらいの衝撃で、きっと骨が少し歪んだだろう。だが、半殺しに遭うよりは何倍もいい。

「これからよろしく願います」

頭を下げるレオンを見て、ガレットはまた笑った。そして、自分がイスに腰掛けると、レオンにも座るように言った。

レオンも近くのイスに座った。

「俺も昔は冒険者だったんだ」

ガレットはそう切り出した。

「お前のような見習いの時期も当然あった。だから、多少はアドバイス出来る。ただ、専門的な事は難しいが・・・レオン、お前はジーンニアスか？」

「いえ、一応アスリートの方を」

前世云々の話は、出来たら避けたいところだった。

ガレットはレオンの身体を一瞬だけ眺める。

「そうか・・・しかし、お前だと重い鎧は無理かもしれないねえな。武器屋には行ってみたか？」

「いえ、まだ全然」

「そうか。なら、まだ日が高いうちに行ってこい。鎧の仕立てには時間がかかるから、一日でも早い方がいい」

「分かりました」

「時間があったら、道具屋と、あと伝承者にも会ってこい」

「伝承者？」

「それも知らねえのか・・・くそ、肝心な時に、あの馬鹿娘はいね

えしな」

馬鹿娘というのは、恐らくさっきまでいたエプロン姿の少女だろう。今はどこかに行っているが、それは目の前の父親が追い払ったからである。だが、それを堂々と指摘する度胸はない。

「まあ、あの馬鹿に期待しても仕方ねえな。とりあえず、今日するべき事は分かったな？」

「はい。場所が分からないですけど」

「それは教えてやる。だが、その前に・・・」

急にガレットはイスから立ち上がって、そのままカウンター奥のドアを開けて、その中に入ってしまった。

調理場だろうか。開けた瞬間に、いい匂いが漂ってきたので、なんとなくそう思った。

そういえば、まだ昼食を食べていなかった。

お腹が減った。そう思った瞬間だった。

ガレットがドアの向こうから姿を現す。だが、レオンの目が釘付けになったのは、彼が持っている物だった。

羊肉だろうか。その巨大なステーキ。

こんな肉の塊を見るのは、お祭り以外では初めてだった。

ガレットはその肉が盛られた器を、レオンの前に置いた。

「とりあえず、今日はこれくらいで勘弁してやる」

レオンはそれをまじまじと見つめてから、急に居ても立ってもいられなくなってきた。

「いえ、あの・・・こ、こんなに!？」

ガレットは可笑しそうに言う。

「食えねえってのか？これくらい食わねえと、体力つかねえぞ」

「いえ、そうじゃなくて・・・」

「何だ？男だったら、はつきり言ってみろ」

「こ・・・これ、凄く高価なものなんじゃ？」

レオンにしてみれば、当然の疑問だった。

こんな豪華な食事を食べる事なんて、村では滅多にない事なのだ。

それこそ、一年に一度の祭りくらい。量もそうだが、この金銭感覚のギャップに、戸惑わざるを得ない。

だが、しばらくの沈黙の後、ガレットは大笑いした。

「気にするな！とにかく食え！食って食って食いまくれ！そうしねえと、ここ一番って時に力が出ねえぞ！」

そう言われても、なかなか踏ん切りがつけられるものではない。

「さっきも言っただろ？ギルドから金が出てるんだ。つまり、お前の先輩達が出した金だ。その先輩達も、見習いの頃はギルドの金で飯を食ったんだ。俺だってそうだ。お前は俺が出した飯を食って、それを血と肉にして、次の奴らの為に金を稼げばいいんだよ」

正直、まだ迷っていた。レオンの村はあまり裕福とは言えないからである。

だけど、これが通るべき道なんだ。

レオンは肉を切って、口に入れた。

歯ごたえがあって、肉汁が口の中に広がる。

「美味しい・・・美味しいですね！」

控えめに口にしたが、実際には想像以上の味に感動して泣きそうだった。

次々と口の中に放り込む。その勢いは全く衰えない。

ガレットはイスに座って、そんなレオンを眺めていた。相変わらずの厳めしい顔の中にも、どこか優しいものが含まれていた。

「そうだな・・・夏までに体重を、今の半分増やせ」

その言葉に、レオンは吹き出しそうになった。

「半分！？半分って・・・ぶくぶくになりますよ」

「誰が肥えろって言ったんだ？食って、鍛えて、筋肉にするんだよ。いいか？夏までだ！そうしねえと、一年で魂の試練場を攻略するなんて絶対出来ねえ。とにかく、必要なのは身体だ！鍛えて鍛えて鍛えまくれ！」

そこで、店のドアが開いた。

聞こえてきたのは、先ほどの少女の声だった。

「あつれー？まだ生きてたの？」

いきなりの発言に、レオンはむせた。

「お前、仕事は？」

ガレットの声が少し低い。その目の前にいるレオンは、ステーキを頬張りながらも若干不安になった。

レオンは振り返ってみた。

少女は父親の威圧感をものともせず、すたすたとこちらに歩いてくる。

「途中でホレスに会ったから、任せてきちゃった。別にいいでしょ？」

「あいつか？なんで町にいるんだ？」

「知らないけど、別にいいじゃん、どこにいたって。それよりも・
・彼、ご飯食べてるって事は、合格なの？」

「何か悪いか？」

「悪くないけど・・・へえー」

少女がこちらの顔をまじまじと見つめてくる。やや切れ目だが、大きな瞳。あまりに遠慮のない視線に、レオンは少したじろいだ。

「おつかしいなあ・・・ちようどぼっこぼこにされてる頃だと思つて、楽しみにしてたのに」

「楽しみて・・・」

そんな事楽しまないで欲しいと、レオンは心底思った。

少女はガレットに視線を戻す。

「何がよかったの？なんか、私の方が強そうだけど」

ずばずば言うなあと思ったが、どちらが強いかはともかく、自分が弱そうに見えるのは確かである。それに、実際に喧嘩する事になったら、自分は女の子を殴れないだろうから、そういう意味では間違いないと言えない。

「ギルドが許可したんだったら、そもそも俺がどうこう言える立場じゃねえんだよ。合格も不合格もねえ」

そうなのかと思ったが、案の定、少女はすぐに反論した。

「うっそだー。今まで何人も追いついたくせに。ギルドが断った人よりも、お父さんが追いついた人の方が、絶対多い」

「俺が追いつくような奴は、どうにもならねえ奴らばかりなんだよ。そういう奴をギルドで追いついたりしたら、変に逆恨みする馬鹿もいるから、一旦許可してこっちまで連れてこいって言うてあるだけだ。そこで俺が綺麗さっぱり諦めさせてやる。断りの代理をしてるだけなんだよ」

「お父さんだって、逆恨みされたら困るでしょ？」

「俺に逆恨みする度胸があるなら、いいじゃねえか。その時は面倒みてやる」

「私とかお母さんとかを狙ってきたらどうしてくれるの？」

「いい度胸だ。そんな奴はどうしようもねえから、きっちり止めを刺してやれ」

「私の身は可愛くないのかー？」

「可愛いだあ？普通の娘だったらまだ分かるけどな」

「私、普通の娘！」

「誰が普通なんだよ。普通の娘は、親父の殴り合いを見て喜んだりしねえだろうが」

「むう。でも、血を分けた娘なんだから、普通は少し心配になるものでしょ？」

「心配したなあ。昔は」

「普通は今も心配でしょ！私、年頃の娘なんだけど！」

「年頃は年頃でも、お前は棘があり過ぎるんだよ！お前に手を出そうなんて命知らずな男がいるわけねえだろうが！」

「それはお父さんのせいだって！俺を倒せる男じゃないと嫁にやらかとか、そんな恥ずかしい事を堂々と言われたら、誰だってちよつと引くに決まってるでしょ！」

「それだけじゃねえだろうが！お前が今まで何人の男を返り討ちにしたと思っやがる！そんな女に誰が近寄ろうとすんだよ！」

「下心丸出しの奴だったら、身を守って当然でしょ！」

「それらしい守り方があるだろうが！普通の娘は実力行使に出たりしねえんだよ！」

「実力があるんだからいいでしょ！」

「まずそこが普通じゃねえんだよ！」

いい加減、レオンは口を挟む事にした。

「あの！」

凄い形相の2人に睨まれて、レオンは思わず両手を挙げた。その両手にはナイフとフォークが握られたままである。

圧倒的な視線に負けそうになりながらも、レオンはなんとか進言した。

「・・・喧嘩はやめませんか？他のお客さんもいるし」

そう言って周囲に視線を走らせてみるが、どういうわけか、誰も気にした様子はなかった。

もしかして、いつもの事なのだろうか。

ガレットとその娘は、2人同時に大きく息を吐いて、そして、一瞬で口元に笑みを見せた。

「・・・そうね。今日はまあまあよかったかも」

「そうだな。悪くない」

レオンには、その言葉の意味が分からなかった。

「え？・・・あの、どういう意味ですか？」

2人は何食わぬ顔で言った。

「親子のコミュニケーションなの。たまにやるんだけど、今日は結構いい戦いだったわ」

「ストレス発散でもある。なかなかスッキリするんでな」

レオンの身体に、どっと疲れが押し寄せた。

どこからか、その戦いだったのだろうか。気を揉んだ自分が馬鹿みたいである。

そこで、ガレットが思い出したように言った。

「ベティ。そいつが飯を食い終わったら、伝承者の所まで案内してやれ」

「デイジーのどこ？」

「そうだな・・・それと、ニコルの所も」

「ニコルもー？大丈夫なの？」

「真面目な奴だから、大丈夫だろ」

「染まっちゃったら困るでしょ」

「いざとなったら、俺がどうにかする。とにかく、会わせてみろ」

「はーい。まあ、面白そうだからいいけどね」

なんて素直な返事なのだろうか。さっきの口喧嘩は本当に嘘みた
いである。そういえば、店に入る前の会話も結構スムーズなものだ
った。

そこでレオンは気付いた。

「あ・・・ベティさんっていうんですか？」

そちらを向いて聞くと、ベティは微笑んだ。栗色のポニーテール
と瞳が印象的な、活発そうな少女。腕が立つようだが、それももし
かしたら冗談なのかもしれない。

「そう。ベティ。その親父の娘で、ここでも働いてるからよろし
くねー」

「あ、はい。僕はレオンです。よろしく」

「レオンはさあ・・・」

すぐに会話を始めようとするベティをガレットが止めた。

「先に飯を食わせてやれ。冷めちまうぞ」

「あ、そうだねー。さあ、とっとと食えー」

ベティが笑いながらレオンの背中を叩く。

その衝撃で食べ物に変な場所まで入ってしまい、レオンはしばらく
咳が止まらなかった。

名店の看板娘

自称、ガレット酒場の看板娘のベティは、気さくというよりは、かなりの話好きな人だった。

なんとか豪華ランチを攻略したレオンを待っていたのは、彼女との苛烈なトーク。質問責めのフルコースだった。レオンを武器屋まで案内してくれる道すがら、彼女の口が休む事はない。全く遠慮のない視線と物言いに圧倒されて、レオンは個人情報ほとんど吐露する羽目になっていた。

他にも、村の事、家族の事、友達の事、さらには、気になった女の子の事まで。

そして、レオンがなるべく言うまいと思っていた事も、あつという間に暴露させられた。

「へえー。それって、記憶喪失みたいなものじゃない？」

石畳の道から、脇道に入った所だった。

ベティがそう評価したのは、前世を見た事がないというレオンについてである。

「記憶喪失ですか？」

「そうそう。こう・・・なんていうの？強いショックとか受けたら人って記憶を忘れちゃう事があるみたいなんだ。私が懲らしめてやった奴らが、よく言うのよねー。あの日の事が思い出せないって」

それは思い出せないのか、それとも思い出したくないのか。いずれにしても、聞いてて楽しい話ではなさそうだ。

「前世がない人っていうのは、ちよつと聞いた事ないし。だから、忘れてると思うのが普通なんじゃないかなー。案外、お父さんに1発貰ったら、ショックで思い出すかも。やってみたら？」

「え、いや・・・1年経ってもダメだったら、その時はお願いしま

す」

ベティは可笑しそうに笑う。屈託のない笑い方だった。

「分かったー。その時は私も加勢してあげる」

「やめて下さい。そもそも、一発だけなのに、どうやって加勢するんですか」

「特別製の重いやつを貸してあげる。それで、ドカンと・・・ね？」
何か、ハンマーみたいな物を振り下ろす仕草。

「ねって言われても・・・逆に現世の記憶も忘れてしまいそうなので、出来たら素手の方でお願いします」

「あ、ここだよー」

レオンの言葉を華麗にスルーして、ベティは足を止めた。

彼女のすぐ脇に建っているのは、普通の民家をさらに縮小したような、はっきり言って小屋みたいな所だった。レオンも立ち止まって、そこをまじまじと見るが、見れば見るほどこじんまりとした建物である。看板のような物もどこにもない。小屋自体は石を積んで造ってあるようだ。

「・・・ここ、何ですか？」

ベティはその言葉も無視して、その小屋のドアを無造作に開けた。

「たのもー」

そう言って、レオンの腕を掴んで小屋の中に引きずりこんでいく。引きずられるまま中に入ったレオンだったが、中を見ても、そこが何なのか分からなかった。狭い室内には大きい台と椅子が2つあるだけ。商品らしきものもない。レオンたちが入ってきたドアとは反対側、台を挟んだ向こう側に同じ大きさのドアがあるが、他には窓すらない。

だが、人間なら1人だけいた。

台にもたれ掛かるようにして、奥の方を向いていた少女が、こちらを振り返る。

一瞬少年だろうかと思うほどの中性的な顔立ち。服装も、白いシ

ヤツの上にポケットの多い黒のベストという、どちらかというと男性的なファッションである。それでも彼女を女性だと思ったのは、整った小さな顔と線の細い身体、そして、ベティと同じポニーテールからだった。ただし、髪色はやや赤みがあったライトブラウンで、瞳の色も明るい。凛々しい顔立ちとギャップがあつて、どこか不思議な印象がした。

少女は一瞬だけこちらを見たが、すぐベティに視線を戻した。

「何？あれならまだ出来てないよ」

容姿は少年っぽいが、声は確かに女性のものだ。

「そうじゃなくて、彼、今日見習いで来たんだ。だから、鎧の注文」
「何？」

少女がこちらを見る。レオンはとりあえず、挨拶した。

「どうも初めまして。レオンと言います」

こちらをまじまじと見る少女。なんとなく気まずかったが、とりあえず黙っている事にする。

「・・・なんか弱そうだけど、大丈夫なの？」

やっぱりそう見えるんだなあと、レオンはちよつと落ち込んだ。

「さあ？一応お父さんがオツケー出したから、たぶん大丈夫なんじゃない？」

「ガレットさんが？へえ・・・」

信じられないといった表情だった。そんなに弱そうに見えるのだろうか。

「まあ、そんなわけだから、鎧作ってあげて。出来るだけ軽くて丈夫なやつ」

「そんなの当たり前。みんなそう言うよ。もっと詳しい注文はないの？」

「そうだねー。とりあえず、あんまり重い鎧は無理なんじゃないかって・・・後は、初心者だから、安くて適当なやつでいいんじゃないかなー。どうせすぐ壊すだろうし」

酷い言われようだったが、もしかしたら、最初はすぐ壊れるのも

のなのかもしれない。

だがやっぱり、その注文ではダメだったようだ。少し呆れたような顔をして、少女は奥のドアに手をかけた。

「父さんに聞いてくるから、ちょっと待ってて」

そう言い残し、少女は扉の向こうに消えた。

小屋の中は静かになる。

レオンはベティに聞いた。

「あの・・・父さんっていうのは？」

ベティは不思議そうな顔で聞き返す。

「父さんって、父親の事だけど？」

「それくらい知ってます。さっきの人のお父さんは何をしてる人なんでしょうか？」

「武器屋っていうか、鍛冶職人なんだ。向こうに工房があるの。ここは、一応店なんだけど、商品は陳列しないんだって。注文貰ってから作りたいんだってさー。その人に合った物しか作りたくないからって」

「へえ・・・」

「すごいんだよー。ジェフさんは、王様から賞を貰った事もあるんだから」

「本当ですか!？」

ベティはあっさりと言ったが、それはもの凄い事なんじゃないだろうか。王様直々に賞を授与される事なんて、滅多にない事のはずである。

「だから、たまに遠くからお客さんが来る事もあるんだ。よかったね。そんな人に武器とか鎧の面倒をみて貰えて」

「あ、はい。僕にはもったいないような気がしますけど」

「そんな事ないと思うなー。あの一家は、みんなマニアなんだよ」

「マニア？」

「そうそう。あの家は・・・」

そこで、奥のドアが開いた。顔を出したのは、先ほどの少女であ

る。

「こっちに来て」

何の前置きもなしにそう言われたので、レオンはすぐに反応出来なかったが、ベティの方は慣れた様子で少女の方に歩き出す。

それを見て、少女の方が止めた。

「ベティ。その格好で入るの？」

言われた本人は立ち止まって、自分の服装を確認する。淡いピンクの厚手のワンピースに、白いエプロン。春らしい装いだと言える。「まあ、いいんじゃない？余所行きってほどじゃないし」

「汚れたら大変だよ。着られなくなってから後悔しても遅いんだからね」

「怖いこと言うなあ」

ベティが迷っているところを、レオンは始めて見た。服の事は気になるのだろう。やっぱり女の子なんだと、失礼な感想を抱いてしまった。

「分かった。私、留守番してるね。ジェフさんによろしく」

「はいはい。誰か来たら、適当に接客しといて」

「適当でいいのー？」

「適当がいいの。変な注文だけはとらないで」

「変な注文って、どんな注文？」

そこで少女は口ごもった。若干だが頬が朱い事に、レオンは気付いた。

「・・・とにかく、よろしく。レオンさんは、こっちにどうぞ」

そう言って、少女は扉の向こうへ消えてしまった。

いったい何があったのだろうかと思って、レオンはベティの顔を見たが、彼女はいつもの微笑みを返すだけだった。少し悪魔的な笑みだったかもしれないが。

とりあえず、それは見なかった事にして、レオンも奥の扉を開ける。

そこは屋外だった。すぐ前に下り階段があって、その終点の先に

金属製の扉がある。その扉の前に少女が立っていた。

レオンはそこまで歩いていく。

どうやらそこは、地面をくり抜いて作った地下室のようだ。石の壁面に鉄の扉。レオンの村にはない、立派な物だ。

扉の前まで来ると、熱気のような物を感じた。それと同時に、金属を叩くような音もはつきりと聞こえてくる。

「服が汚れるかもしれないけど、それくらいは大目に見て」

少女はにこりともしなかったが、冷たいというよりも、むしろ格好いいと思った。不思議な感覚だ。

「あ、はい。それは平気です」

「あと、なるべく静かにしてて」

「静かにつて？」

「父さんは仕事なので」

「あ、なるほど」

レオンは頷いた。鍛冶仕事の邪魔をしないでくれという意味だろう。

それを見て、少女は扉を開けた。重そうな扉に見えたが、少女はそれを軽々と開ける。

中はまさに鍛冶場そのものだった。それも、レオンの村の物とは比べものにならないほどの広さである。一番奥に炉があって、鍛冶台が3カ所。他の場所には、注文された物なのか、金属製品が所狭しと並べられている。鎧や剣といった物はもちろん、鎌や鍬といった農具もある。

その鍛冶台の一カ所では、男性がまさに鍛冶作業中といった様子だった。剣か何かだろうが、細長い金属を炉に入れて軟らかくしてから、鍛冶台に移して叩く。しばらくして、それをまた炉に戻すといった作業をしている。

レオンはその流れるような作業にしばらく見入っていたが、少女がいつの間にか室内に入っているのを見て、慌てて自分も中に入った。

服が汚れると忠告されていたが、恐らくそれは避けようがないだろうと思われた。目に見えるくらいの煤が宙を舞っているのが見える。

レオンが室内に入ったのを確認してから、少女は作業中の父親に声をかけた。

「父さん」

すると、男は手を止めてこちらを見る。

レオンが想像していたよりも、ずっと小柄な男性だった。少なくとも、ガレットさんに比べたら子供のようなものだろう。だが、身体は引き締まっているし、腕も十分逞しい。鍛冶職人としての風格は十分にあった。

男はしばらくレオンをじっと見つめる。見えているのかいないのか、分らないくらい細い目である。ついでに言うと、髪が全くない。ベティと少女が同じ年くらいだろうから、この男性とガレットさんも、そう年代は変わらないはずだが、まだ毛がふさふさのガレットさんに比べると、この男性はだいぶ老けて見えた。

しばらくレオンの身体を観察した男性は、ふっと視線を少女に移し、そして再び作業に戻ってしまった。

何だったんだろうとと思っていると、少女が突然こう言った。

「もう終わり」

「・・・はい？」

「出ましょう」

少女はスタスタと歩いて、扉から出て行ってしまった。

仕方なく、レオンもそれについて行く。

そのまま階段を上ろうとする少女を追いかけながら、レオンは聞いた。

「あの・・・今のは何だったんですか？」

少女は振り返りもせずに答える。

「父さんはあれで大抵の事が分かるの。武器は5日くらい。鎧は2週間くらいで出来ると思う。だから心配しないで」

「心配っていうか・・・例えば何が分かるんですか？」

見ただけで、何が分かるというのか。

「身体とか靴のサイズとか、手の大きさとか、あと、使いこなせる武器とかも」

「・・・どうしてそんな事が分かるんですか？」

「プロだから」

そんなにプロって凄いのか。

「でも、使いこなせる武器なんて、自分でもよく分かりませんけど」
レオンは村にいた時に、剣や弓に一通り慣れるくらいの訓練はしたが、専門家がいたわけではないので、まだ初心者くらいの腕しかない。

「体つきでだいたい分かるんじゃない？ 私も詳しくは知らないけど」
もしかしたら、適当なのかもしれない。

レオンはちよつと心配になったが、よく考えたら、武器や鎧を仕立ててくれるだけでも十分恵まれた話である。ここであれこれ注文するのも、おこがましいだろう。

そう納得した頃に、少女が階段を上りきって扉を開ける。

そこでレオンは初めて気づいた。

小屋の中から男性の声がする。もしかして、お客さんだろうか。

レオンも階段を上りきって室内を覗いてみると、やはり男性がいた。

彼はすぐにこちらに気づいたようだ。

「あれ？ 見ない顔だね。お客さん？」

彼が聞いているのは、ベティではない少女の方である。だが、答えたのはベティだった。

「そう。今日来た冒険者見習いなんだ。だから、そのうちラッセルのところにも行くと思うよ」

「ああ、そうなんだ」

そこで、ラッセルと呼ばれた青年は納得したように微笑んだ。背が高いが、濃い瞳と髪をしていて、真面目で誠実そうな青年である。

彼は黄土色のエプロンをしていて、両手でやっとな持てるくらいの大
きさの木箱を抱えていた。

「それ、注文してたやつ？」

聞いたのは明るい髪の少女である。

青年は嬉しそうな表情で答える。

「そうなんだよ。やっとな届いたから、すぐに持ってきたんだ。ずつ
と待たせてたから、申し訳がなくて・・・とにかく、中身を確認し
てくれる？」

そう言って、ラッセルは木箱を少女の前の床に置いた。少女はす
ぐに蓋を開けて中身を調べ始める。中に入っていたのは鉱石の様だ
った。だが、鉄とか銅というわけではなさそうだし、明らかに精錬
前である。そのままでは使えないはずだから、自分達で精錬するの
だろうか。

ラッセルはそんな少女をしばらく見てから、レオンの方を向いた。
「僕はラッセル。冒険者向けの道具屋をしてるんだ。ダンジョンに
挑戦する頃になったら、いろいろ道具が必要になると思うから、そ
の時にはよろしく」

すぐく話しやすそうな人だった。

「僕はレオンです。その時はよろしくお願いします」

「ラッセルは店長なんだよー。それも、結構やり手な」

ベティの言葉に、レオンは驚いた。レオンとそう変わらない歳に
見える。少なくとも、20歳は越えていないはずだ。

ラッセルは照れたように頭の後ろに手をやる。

「やり手ってほどでもないけど・・・前の店長だったお爺さんが引
退したから、成り行きで僕が店長なだけで、そんなに腕があるわけ
じゃないんだ。僕が作った店じゃないからね」

「でもさー、仕入れ代行みたいな事まで始めてるし。それって、な
かなか才能がないと出来ないと思うなー」

「それだって、お爺さんのコネがあったからだしね。道具屋という
よりは、便利屋みたいなものだと思って貰えればいいよ。レオン君

も何か特定の素材が欲しくなったら、僕に言ってくれれば都合出来るかもしれないから、その時はよろしく。もっとも、そこまでギルドは面倒みてくれないから、取り寄せた素材はタダではないけどね」
そこで、鉱石を調べていた少女が木箱の蓋を閉めた。

「うん。これならたぶんいける」

ラッセルがすぐにそちらを向いた。

「よかった。じゃあ、下まで運んでおくよ」

「それくらい、私がやるから・・・」

「いいよ。こんな重い物持って階段で転んだら、怪我じゃ済まないかもしれない。そんな事をお得意様にさせられないよ」

ラッセルはそう言って、木箱を持ち上げた。そのまま奥のドアに向かい、それを足で開けて、ドアの向こうに消えていった。それを後ろから少女が追っていく。

どういうわけか、それを見届けたベティがクスクスと笑い出した。

「・・・どうかしたんですか？」

レオンが聞くと、ベティは意味ありげに微笑む。

「ラッセルも、なかなか頑張るよねー」

「え？まあ、仕事頑張ってますけど」

「そうじゃなくてさー・・・レオンは、リディアの事どう思う？」

リディアという名前に心当たりがなかった。

「誰ですか？」

「あ、まだ言ってなかった？さっきまでいたのが、ジェフさんの娘のリディア。ここの受付と、あと、細かい装飾品とか作ってるんだー」

明るい髪と瞳をした、中性的な顔立ちの少女。彼女の名前がリディアという事らしい。物言いがつっけんどんな感じだが、それが格好いいと思わせる不思議な印象の少女だった。細かい装飾品とは、アクセサリーとかの事だろうか。

「へえ・・・そのリディアさんがどうかしたんですか？」

「だから、レオンはリディアの事、どう思った？」

「どうって言われても・・・なんとなく格好いい人ですね」
レオンがそう言うと、ベティが何度か頷いた。

「そうそう。まあ、そういう事なんだ」

「・・・どういう事ですか？」

「だいたい分かるでしょー？」

「全然分かりませんが」

その言葉に、ベティが苦笑する。珍しい表情だった。

「レオンはさあ・・・」

「はい？」

「人生の楽しみを、半分くらい損してると思うな」

レオンはその言葉に首を捻るばかりだった。

伝える者達

通されたのは、立派な調度品でいっぱいの子屋だった。

ベティの案内で次にやってきたのは、とある民家だった。民家と言っても、お屋敷と言ってもいいほど立派な建物である。綺麗に整えられた庭の周りを、高い柵が囲っている。入り口にも、家紋らしきものが彫られた門が設えてある。広さはそれほどでもないという事だが、それを補って余りあるほどの風格がその家にはあった。

その応接間らしき一室。初めて座るソファという物の感触に多少戸惑いながらも、レオンにはもつと気になる事があった。

自分の隣に座っているベティが、口元とお腹を押さえて身悶えているからである。しかし、彼女は別に、体調が悪いわけではない。ただ、笑いを堪えているだけなのだ。

その原因は、レオンの正面に座っている老人にあった。

立派な白髭を蓄えたお爺さんである。ただ、顔にはしわが深く刻まれているし、目蓋もほとんど上がっていないように見える。さきほど見てきた鍛冶師のジェフさんよりも明らかに年上の、真正正銘の老人である。この部屋に入ってくる時も杖をついてたし、非常にゆっくりとした足取りだった。座っている今も、かなり腰の曲がった前傾姿勢だ。

だが、ベティの笑いのツボにはまったのは、そのお爺さんの頭である。

きつと既に髪がないのだろう。そんな曖昧な表現になってしまうのは、その頭を占拠している生物、いや、妖精がいるからだだった。

歳経た木の幹のような焦げ茶色の毛。その中から、木の葉のような深緑の瞳がふたつ、ぱっちりとかかれてこちらを見ている。老人の頭の上で腹這いになっているが、眠っているわけではないようだ。

なんとなくだが、レオンにも、ベティが言わんとする事は分かった。つまり、お爺さんの頭上のカーバンクルが、ちょうどお爺さんの髪の毛みたいに見えるという状況。偶然なのか、故意なのかは分からないが、この奇跡的なフィット感。それでいて、その奇跡を全く意に介した様子のない、老人と妖精の堂々たる役者振り。レオンはそれほどではないが、確かにユニークな絵だとは言える。

それでも、本人を目の前にして、中々そこまで笑えるものではない。幸い、お爺さんは気にする様子はないが、もしかしたら見えていないだけかもしれない。その事が、さらにベティの笑いを誘っているのかもしれないが。

まだ笑いを堪えているうちはいいが、そのうち大声で笑い出すのではないかと、レオンはひやひやしていた。

そこで、部屋に少女が入ってくる。お盆の上に、ティーカップが4つ。紅茶のようだった。

「面白いでしょう？」

レオンの前にカップを置きながら、少女が言った。一点の曇りもない笑顔だった。

「え？あ、いや・・・」

何の事ですかとも、そうですねとも答えにくい質問だった。かといって、そんな事ないですよと答えるのも、隣で身悶えている少女のせいで説得力がない。

レオンが答えあぐねていると、少女が老人の隣に腰掛ける。すごく洗練された座り方だった。育ちがいいとはこの事かと思ひ知る。レオンは自然と背筋を伸ばした。

「お楽にして下さい。いいんですよ。ベティくらい横になって貰っても」

実際、ベティはソファの背にもたれ掛かるようにして横を向いている。寝転がっていると言っても過言ではない。だが、さすがにそこまでリラックス出来なかった。というか、リラックスとはまた別の問題だ。単に笑い顔を隠しているだけである。

「いえ、それはちよつと・・・」

「冒険者さんともなると、普段から気を抜かないものなのですか？」

「まだ見習いなので分かりませんが・・・とりあえず、僕は大丈夫です」

「そうですか・・・でもご遠慮はなさらないで下さいね」

少女は微笑む。その微笑みも、ベティの屈託のない笑みとは少し違う。どこか抑制された、品格を感じさせる表情だ。

とりあえず、笑いから抜け出せないベティは放っておく事にして、レオンは話を切り出す事にした。

「あの、僕はレオンと言います。今日、見習い冒険者になったばかりです。よろしくお願いします」

「私はデイジーです。こちらが祖父のフレデリック。よろしく願います」

デイジーが少しだけ頭を下げる。もの凄く優雅な動きだった。田舎者のレオンは、こういった所作に全く免疫がない。否応なくそわそわしたし、そして、ドキドキした。

これが本物のお嬢様なんだ。

所作もさる事ながら、彼女は見た目でも、落ち着きと洗練さを兼ね備えていた。ほぼ黒髪と言えるほどの濃いダークブラウンの髪は、艶やかに真っ直ぐ腰まで伸びていて、前髪も綺麗に切り揃えられている。派手さはないものの、小さく整った顔立ちをしていて、華奢な肢体を象牙色のワンピースが包んでいる。一輪の花という表現がぴったりの、慎ましい可憐な少女だった。

レオンもちろん綺麗な人だと思ったが、それよりも、自分が場違いみたいで気が引けた。彼女自体は綺麗な花でも、それを育てあげた環境を連想してしまう。彼女の洗練された所作が、彼女の後ろ盾を否応なく思い出させるのだ。

彼女に見入ってしまいそうになっていたレオンは、なんとかそれを振り払った。今日の目的はとりあえず顔を見せておくというもの

だったが、もちろんお見合いではない。冒険者見習いとしての訪問である。そして、レオンには聞いておきたい事があった。

「あの、デイジーさん。こんな事聞くのもおかしい話かもしれないんですけど・・・」

レオンはその質問をデイジーにする事にした。本当はお爺さんの方がいいのかもしれないが、彼女の方が話しやすそうだったからである。

「何でしょうか」

デイジーの黒い瞳が瞬く。何か引き込まれてしまいそうで、レオンは直視出来なかった。

「伝承者っていうのは何なんですか？僕、そういった事を全然知らないで・・・」

「あ、いえ。知らない方も、たまにいらっしゃいますよ」

そう言ってデイジーは微笑む。レオンは少し気が楽になった。

「簡単に言うと、伝承者というのは、伝説の冒険者の記憶を伝える人達の事です。偉大な事を成し得た方々が培った知識や経験を、今を生きる冒険者達に授ける事。それが伝承者の仕事です」

「記憶という事は・・・つまり、伝説になった人達が前世だったという事ですか？」

「そうです」

あまりにあっさりとした答えに、レオンはいまいち驚けなかった。
「・・・それって、凄い事ですよね？」

「凄いと言いますか、珍しい事だとは思いますが」

「いえ、だって・・・という事は、デイジーさんも、前世は伝説だったという事ですか？」

その言葉に、デイジーは笑って首を振った。

「私ではありません。祖父です」

レオンはそちらを見た。

なんというか、どう見ても普通のお爺さんだった。だけど、伝説の冒険者が前世という事は、もしかして、若い頃は名のある冒険者

だったのだろうか。

表情から読みとれたのか、デイジーが説明する。

「祖父が冒険者だった事は一度もありません。武器の訓練所等で冒険者に関わってはいましたけれど、どちらかというと、ずっと裏方の仕事をしていたそうです」

「そうなんですか？ちよつと、もったいないような・・・」

冒険者になっていれば、それこそ偉大な功績が残せていたのではないだろうか。そう思っただけの発言だったのだが、フレデリックさんは全く微動だにしない。

そんなレオンを見て、デイジーはまた小さく首を振った。

「祖父は、これが自分のなすべき仕事だと思っていたそうです。そして、今思い返してみても、自分の選択は正しかったと思っているそうです。自分が冒険者になっていても、きっと大成出来なかった。それでは自分の役目を果たせなかったと・・・これは、祖父の口癖です」

「役目ですか？」

「つまり、自分の経験を伝えたい、後輩を指導したいという思いが強かったという事ではないでしょうか。レオンさんは、ソードマスターの話聞いた事はありませんか？」

ソードマスターも伝説となった冒険者の1人だ。レオンもその称号はもちろん知っていたが、具体的な事はほとんど知らない。詳しい逸話を知っているのは、レオンの故郷の村が出身であると言われる、サイレントコールドこと、イブという名前の女性についてのみである。

「いえ、全然・・・称号を聞いた事はもちろんありますけど」

「ソードマスターは、その称号の通り、比類無き剣技を誇ったとされる冒険者です。しかも、それが大剣でも細剣でも、例え初めて握った剣であっても、自由自在に扱う事が出来たとか」

「へえ・・・」

凄い事だとは分かったが、あまり実感がわかなかった。まだ剣の

技術でそれほど苦勞した経験がないからだろうか。

「そんな彼ですが、非常に子供好きだった事でも知られています。彼が冒険者になったのも、身よりのない子供達に孤児院を作る為だったそうです。そこで自分が剣を教えて、冒険者として独り立ちさせる。そんな計画だったのですが、資金が集まって、孤児院を建てる話がまとまった矢先、彼は姿を消してしまったのです」

「え・・・どうしてですか？」

「そこで彼は最後の戦いに向かったのだらうと、そして彼は帰ってこられなかったのだらうと言われています。事実、その時期には天災が多発していたのですが、彼がいなくなった翌年から、ぱったりとやんでいるのです。つまり、天災に匹敵するような強大なモンスターと戦って、相打ちになったのではないかと・・・そして、自分がいなくなってもいいように、孤児院の話だけはまとめておいたのではないかと、そう言われています」

応接間に沈黙が満ちた。

まるで知らないその伝説の人物について、レオンは想像でしか触れる事が出来ない。彼は最後の戦いに向かう時、どんな心境だったのか。もう戻って来られないと分かっていたのだろうか。そんな強い敵を倒せた事ももちろんだが、自分がいなくなった後の事まで考えていた。今の自分には遠すぎて見えないような強さだ。

デイジーは微笑んだ。この静かな空気にも全く水を差さない、淑やかな笑みだ。

「祖父の記憶のほとんどは、子供達との思い出なんだそうです。ですから、戦うのは自分の役目じゃない。自分の役目は教える事だった・・・」

「・・・そうですね。すみませんでした。もったいないなんて言うて」

十分立派な役目なのだ。その価値を昔の自分が教えてくれたのだから、なおさら無視は出来ない。

レオンはフレデリックさんに頭を下げる。お爺さんは愉快そうに

少しだけ笑った。弱々しい笑い方だが、十分優しさも感じられる。頭上のカーバンクルは、その深緑の双眸で、じっとこちらを見つめていた。

「それに、ソードマスターの記憶を受け継いでいる人は祖父だけではありません。ですから、どなたか他の記憶をお持ちの方が、立派な冒険者になっておられるのではないのでしょうか」

それは確かにそうなのだ。偉大な人物の記憶ほど、多くの人に分化して伝えられる。何を隠そう、レオンの母親も、サイレントワールドの記憶を持っていると言っていた。

そこでレオンは気付いた。

もしかして、自分の母親も伝承者だったのだろうか。仕事としては、ただの主婦というか、農家だったわけだが、その資格があったという事なのだろうか。

「すみません。伝承者っていうのは、伝説の冒険者の記憶を持っている人って事ですか？」

デイジーは少し首を傾げる。

「どうでしょうか・・・そういう方ばかりとは限らないと思いますけれど」

「えっと・・・もう少し詳しく説明していただけませんか？」

「もしかして、どなたか記憶をお持ちの方に心当たりがあるのですか？」

思ったより勘がいい。レオンはその洞察力に驚く。

それだけで、ばれてしまったようだ。デイジーは口元に手を当てて、少し笑った。特にやましい事があったわけではないが、レオンは気まづくなる。

「一応ですが、ギルドから伝承者として認められるには条件があるんです」

「あ、ギルドに認めて貰わないといけないんですね」

「そうですよ。だって、お仕事ですから」

全くの正論だった。自分で名乗るだけでお金が貰えるわけがない。

「すみません。僕、田舎者なので・・・」

デイジーはクスツと笑う。上品さの為か、嫌らしさが全くない。

「ギルドの条件は3つです。1つ目は、16歳以上である事。2つ目は、ギルドで面接試験を受けて、それに合格する事。つまり、そこで冒険者の助力になり得る人がどうか、見極めるのだと思います。そして、3つ目は・・・」

そこで祖父の頭に目をやる。

「カーバンクルと共にある事です」

レオンは驚いた。カーバンクルが何かの役に立つのだろうか。

そこでふと、ギルドでの会話を思い出す。

「もしかして、何かの記憶を伝えてくれるとか、そういう事ですか？」

ギルドにおけるカーバンクルは、志願者の前世を読みとって、それを受付の女性に伝える役目を果たしていた。だったら、逆の使い方も出来るのだろうか。

デイジーは頷いて肯定する。

「必要だと判断すれば、この子はソードマスターの記憶を直接レオンさんに見せてくれます。それがレオンさんの悩みを解消するきっかけになったり、場合によっては、突然剣の腕が上達する事もあります。伝説となった人の記憶を伝える。それが伝承者の仕事です」

「へえ・・・」

ようやくレオンにも伝承者の役割が分かった。要は、先人に話を聞きにいくという感じだろうか。その道で伝説となった人にアドバイスを貰いにいく。それがただの言葉ではなくて、直接見る事が出来るものならば、確かな価値があるのではないだろうか。

「それに、すぐ隣に武器の訓練所もあります。今はギルドのものですから、レオンさんも使っていただけます。遠慮なく使って下さい」

「あ、はい・・・お世話になります」

そういえば、フレデリックさんは、若い頃に武器の訓練所に関わっていたという事だった。このお屋敷の隣にある建物がきつとそう

なのだろう。

レオンは閃いた。

「もしかして・・・例の孤児院っていうのが、それですか？」

何の根拠もない思いつきである。口にした途端に、自分でも、どうしてそんな事を思い付いたのか不思議になった。

デイジーは驚いた表情を見せたが、すぐに微笑んで、首を横に振った。

「違います。ソードマスターが生きていたのは、この町が出来るより、ずっと前ですから」

「そうですか・・・そうですよね」

「でも、同じかもしれませんね」

「え？」

祖父を見ながら、デイジーは優しく微笑んだ。

「ソードマスターの記憶があったから、祖父が携わったのです。彼が建てた孤児院も、祖父が大きくした訓練場も、同じ思いで出来たものです。だから、同じかもしれません」

少し前とは違う静寂。

暖かくて、ずっと居たくなるような、心地よさが満ちる。

レオンも、大昔の伝説の男性に思いを馳せる。

皆が持っている前世というものの重みが、ほんの少し分かったような気がした。どういうわけか、自分にはそれが無いわけだが、特に困った事はなかった。だけど、今、ほんの少しだけ、羨ましいと思っただ。

この町の歴史よりも長い時間を経ても、伝わってきた物。

「・・・そろそろ帰ります。大事なお話をありがとうございました」
レオンが腰を上げようとする。いい加減帰らないと、日が暮れてしまう。まだ行くところが他にもあるのだ。

それをデイジーが止めた。

「もうちょっと、待ってあげたらいかがですか？」

「はい？待って・・・」

レオンは自分の隣を見た。

そして、呆れた。

妙に静かだとは思っていたのだ。

ベティはいつの間にか、ソファの上で寝息を立てていた。

正体不明

「いやー。ごめんごめん」

「いえ、まあ・・・起きて貰えてなによりです」

あまり悪びれた様子のないベティに、レオンはその言葉を返すのがやっとだった。

ソファの上で眠りこけていたベティを起こすのに、レオンは予想外の苦労をさせられた。最初は普通に声をかけてみたのだが、全く反応がない。仕方ないので、肩を揺すってみたのだが、それでもダメだった。そこで、最終手段として、頬を叩いてみる事にした。叩くと言っても、そんなに強く叩いたわけではない。顔に少し違和感がある程度でも、気になって起きるだろうという目論見だった。

だが、ベティの反応は過剰防衛以外の何者でもなかった。

「私も油断してたなー。まさか、会った初日に、しかも他人の家で、レオンに襲われるとは思わなかった」

さらっととんでもない事を言うので、レオンは周囲を気にしたが、幸い誰もいなかった。裏路地と言ってもいいようなところだから、人通りは少ない。

日も少し陰り始めている。

「襲ってません。人間きが悪い事を言わないで下さい」

どちらかというと、襲われたのはレオンの方だったが、もう指摘する気力もない。

そんなレオンの主張を聞いているのかいないのか、ベティは両の拳を打ち合わせながら、何度か頷いて言った。

「でも、バッチリ迎撃したし。うんうん。さすがにお父さん仕込みなだけはあるなー。スカートじゃなかったら、もう一発蹴りが増えて、6連コンボだったのに」

「・・・是非毎日スカートにして下さい」

「レオンはスカートが好きなのー？」

「何でそんな話になるんですか。被害縮小の為です」

「でも、もし本気で襲われてたら、私、スカートでも蹴りは出すよ？
というか、それでもし中を見られたら、見た物を忘れるまで徹底的にやるから、うーん・・・どっちがいいんだろうね？」

どっちにしろ、蹴りが出る事は避けられないらしい。

レオンは溜息を吐く。

「・・・というか、僕が襲ってないと分かっているながら、5回も攻撃してきたんですか？」

その指摘に、ベティは真顔で頷いた。

「見習い冒険者なんですよー？あれくらい普通に避けられないと」
出だしの裏拳を貰った時点で、見習い冒険者としては残念な感じだが、その後の、眉間を狙いにきた右手の突きと、それを必死に避けたあとに、胸ぐらを掴んできたのはすぐに弾いた。だけど、その後の牽制のビンタにお膳立てされた、左のアップパーは避けられなかった。この後に、ズボンだったら蹴りがお見舞いされていたようだが、もし出ていけば、恐らく綺麗に入っていただろう。

つまり、レオンから見て、2勝3敗。蹴りがあったなら、2勝4敗。

しかも女の子相手に。

情けないと言われても、全く反論出来なかった。

落ち込んだ様子のレオンを一応心配してくれたのか、あっけらかんとした様子で、ベティが肩を叩いてくる。

「まあまあ。冒険者もいろいろあるし、多少弱くてもなんとかなるって。これから強くなればいいんだから」

「・・・そうですね」

「そうだ。レオンはスニークの事知ってる？」

スニークも伝説の冒険者の称号である。この町に来る荷馬車の中でも、名前が出た人だ。

「えっと、称号くらいは」

「あの人も最初は弱かったんだって。というか、女の子だったって噂だし」

「確か、本当の名前を誰も知らなかったって人ですよね？」

「そうそう。名前どころか、性別とか年齢も分からなかったって。変装の達人だったっていうしねー。ずっと正体を隠してたから、どんな事してたのかとか、いつ死んだのかとかも分からないんだって」

「・・・そんな人が伝説に残るような事をしたって、どうして分かったんですか？」

「あ、ここだよー」

ベティがまたもやレオンの質問を無視して立ち止まった。本日2回目だ。このマイペースぶりに、既に慣れ始めている自分に驚きだった。

今度も立派な民家だが、フレデリックさんの家ほどではない。木造平屋だが、そこそこの広さがある。ユースアイでは、これが平均的な民家のようなだ。今日だけでも結構町の中をうろうろしたが、だいたいこれくらいの民家が多い。それか、もう少し狭い代わりに二階建てか。ガレットさんの酒場や、フレデリックさんのお屋敷は別格である。この家も、広い庭があって、ガレージのような物が建っているから、もしかしたら裕福な方なのかもしれない。

ベティは躊躇う様子もなく、勝手に敷地内に入っていく。仕方ないので、レオンもその後続いた。

ところが、彼女が向かったのは家の方ではなく、ガレージの方だった。

その扉の前に来たところで、レオンは尋ねた。

「こんな所に、伝承者がいるんですか？」

もう1人伝承者に会いに行くのは知っていた。だけど、それ以外の事は何も聞いていなかったのだ。

「うん。大抵こっちにいるんだー。ここがニコルの部屋みたいなも

のかな」

「へえ・・・」

広さはともかく、あまり住み心地がよさそうな建物ではなかった。特に、冬は凍えそうだ。隙間風が吹きそうなくらいだから、この時期でも、きつと朝晩は寒いだろう。同じ伝承者であるフレデリックさんと比べると、生活にかなりの差があるように思えた。

ガレージからは、何か、カチャカチャという小さい物音がする。

「レオン」

「はい？」

「ちよつと、ノックしてみて」

ガレージのドアをノックしろという意味らしい。入り口には、窓のついたドアがあるのだが、その窓には張り紙でもしてあるのか、室内を窺う事は出来ない。

「・・・僕がですか？」

今まで、止める間もなく、何でも自分でやってきたベティだけに、急にそんな簡単な事を頼むのは違和感があった。

ベティは微笑みながら言った。

「いいからいいから。とにかくやってみて」

「別にいいですけど、何で急に・・・」

「今度からはレオン1人で来るわけでしょ？ だったら、慣れておいた方がいいと思うなー」

「慣れないといけないような事があるって事ですか・・・」

多少うんざりしながらも、レオンはドアの前まで進み出る。ドアをノックしたくらいで、何か起こると思えない。だけど、妙な緊張感が、レオンの身体を包んだ。

呼吸を整える。

そして、軽くドアを叩いた。

その直後だった。

子供の悲鳴。何かの金属製品が崩落したような物音。どちらもガレージ内からだった。

自分のノックなど、軽く音が出る程度である。思いもよらぬ過剰反応に、レオン自身が一番戸惑った。

すぐにドアが開く。

その向こうにいたのは、まさしく子供だった。性別ははっきりしないが、身体つきから言っても、レオンより年上という事はある。レオンは16歳ながら小柄な方である。そのレオンよりさらに小柄だから、恐らく12歳くらいだろうか。その小柄な身体を、グレイのシャツとモスグリーンの膝丈のズボンで包んでいる。子供らしいファッションだった。

だが、一番の注目点は、その子供が、両手を目元に当ててしゃくりあげている事だった。

どう見ても泣いている。

「泣かしたー」

背後から、これ以上ないくらい無責任な声が飛んてくる。振り返ると、ベティの悪魔的な微笑みが目に飛び込んできた。

「え？ いや、その・・・」

泣かせるつもりはなかったし、泣かせるような事をした覚えもない。だけど、もしかしたら、本当に自分のせいなのだろうか。

レオンはもう一度子供の方を見た。

よく分からないけれど、とにかく可哀想だった。見ていて、気の毒な気分になる。

とりあえず、謝ろう。

「えっと・・・その、ごめんね」

なるべく優しく言ったが、効果はない。子供はやや俯いたまま、すすり泣くだけである。

まさに途方に暮れた。

泣いている原因も分からないし、どうやったら泣き止むかも分からない。

レオンはまた振り向いた。ベティに助けを求めたのだ。

困り果てたレオンの表情を見て満足したのか、ベティが意味あり

げに頷く。そして、子供の方を向いて、やや大きな声で言った。

「ニコルー。仕事だよー」

その言葉に、レオンは意表を突かれた。確か、ニコルというのは、ここに住む伝承者の名前のはずだ。だけど、フレデリックさんの孫のデイジーが言うには、伝承者になるには16歳以上でないといけないはずである。だから、きつとこの子はニコルという人物とは別人だと思っていたのだが。

レオンは子供の方に視線を戻す。

びっくりした。

ニコルと呼ばれた子供が、レオンの目の前で目を輝かせていたからだ。

「近!？」

いつの間に寄ってきたのか。というか、さっきまで泣いていたのはなんだったのか。

ニコルの目は、全く赤くなっていない。髪は濃い色だが、瞳は明るいうらんだ。子供らしい、大きな瞳だ。

「本当に!？仕事って事は冒険者見習いだよね?うわあ!凄い!ねえ、どこから来たの?ジーニアス?それともアスリート?なんかあんまり強くなさそうだけど、うん、でも、これくらいの方がいいなあ。ちよつと弱いくらいの方が工夫しがいがあるし。僕、ニコルって言うんだ。僕のところに来たって事は、伝承者の仕事だよね?うわあ……。やった!嬉しい!もう何でも聞いてね!特に、鍵開けとか、そういう細かい作業なら、もうなんでも!あと、ちよつとした仕掛けだね。そういうの、ガジェットって言うんだけど知ってる?ここにもいっぱいあるんだ。君も絶対気に入ると思うよ!どうどう?見ていかない?見ていかない?」

いつの間にか、右手を両手で包み込まれていた。

レオンはゆっくりとベティの方を振り返る。

「……。だいたい分かりました」

おおよその事は、ニコル本人の口から暴露されていた。

ベティは少し笑いを堪えながら言った。

「良かったねー、ニコル。これからはレオンが実験に付き合ってくれるから」

「そうだよね・・・うわあ！ダンジョンで試せるなんて、楽しみ！」

「いや、試すって、僕はまだ・・・」

レオンの言葉をニコルが遮る。

「あ、そうか。もしかして、まだ成り立て？」

「え？あ、うん」

「そっか・・・うんうん。でも大丈夫。楽しみは後にとっておかないとね！」

それはいったい何が大丈夫なのだろう。とりあえず、レオンの安全を保証しているわけではなさそうだ。

「じゃあとりあえず、僕の作った物を見ていてよ。なんなら、実際に・・・」

「あー、ゴメン。ニコル」

そこで割り込んだのは、意外にもベティだった。

「レオンは他にも行くとこあるから、また今度でいいかなー？出来たら今日中に回っておきたいんだよね」

そんな話は聞いていなかったレオンだったが、何も言わない事にした。ベティの表情が、いつもとさほど変わらないながらも、目元が真剣に見えたからだった。

ニコルは残念そうな表情を顔いっぱいに浮かべたが、すぐに頷いた。

「仕方ないね。じゃあ、えっと・・・レオンだったっけ？また今度おいでよ。いろいろ用意しておくから」

「あ、うん・・・また今度、よろしくお願いします」

レオンが軽く頭を下げると、ニコルは笑顔に戻って、ガレージの中に戻っていった。

ドアが閉められ、辺りは静かになる。

それを見届けてから、レオンは息を吐いた。何もしていないが、

何か終わったという達成感があった。

振り返ってみると、ベティは既に帰り道を歩き出していた。慌ててレオンもそれを追いかける。敷地から出た辺りで彼女に追いついた。

「他に行く場所なんてあるんですか？」

開口一番にそれを聞くと、ベティは口だけで微笑んだ。珍しい表情だった。

「ないよー」

「じゃあ、どうして嘘を言ったんです？」

「レオンはまだ心の準備が出来てないから」

「僕ですか？」

ベティは前を向いた。その横顔は、いつもの彼女よりも大人びて見える。そのギャップにレオンは驚き、そして、一度大きい鼓動が聞こえた。

「ニコルは悪い子じゃないんだけど・・・うーん、いや、違うな。ニコルは悪い子なんだよ」

あまりにもあっさりと言い切ったので、レオンは一瞬思考停止した。

「・・・えっと、ニコルさんって、さっきの子の事ですよ？普通の子供に見えましたけど」

「そうなんだけどねー。なんていうのかな、ニコルは悪戯っ子なんだ」

「悪戯っ子ですか？それって、そんなに珍しい事じゃないような・・・」

ある程度の悪ふざけは、子供なら誰だってするだろう。

「あの子はちょっと違うんだ。なんていうのかな・・・ニコルは自分が出した事が悪い事だって分からない子なんだよね。私はニコルじゃないから、本当はどう思ってるのかは分からないけど」

「僕はもっと分かりませんが・・・それが僕とどう関係するんですか？」

ベティはこちらを向いた。優しい微笑み。これもまた珍しい表情だ。

「私はね・・・ううん、私達は、つまり、今日レオンが会った人みんなだけど、ニコルの事が嫌いなわけじゃないんだ」

レオンは黙って頷く。

「だからね、レオンにも嫌いになって欲しくないなーって、思っただけなんだ。ちゃんと準備してからじゃないと、初対面の人に一瞬で嫌われるような、そんな子だから」

その理屈は分からないでもない。

でも、理由としては弱い。

「・・・それだけじゃないと思いますけど、違いますか？」

ベティはまた前を向いた。横顔だけでは、表情は読みとれないが、少し寂しそうに見える。

「私はニコルが嫌いなわけじゃないけど、でも、やっぱりちょっと怖いな」

言葉の最後が少し小さかった。口にするのが嫌だったのかもしれない。あるいは、口にするのを躊躇うくらい怖いのだろうか。

それ以上に、ベティの口から怖いという言葉が出てきた事が、驚き以外の何者でもなかった。怖じ気付く事のない、怖いもの知らずの女の子だと思っていたのだ。

その彼女が恐れているのが、何の変哲もない子供。

「昔はね、ニコルと一緒に遊んだりもしたんだよ。だけどね、だんだん遊ばなくなったんだ。本当に、ニコルの事は嫌いじゃないんだよ。だけど、なんとなく一緒にいなくなった。これは、私だけじゃなくて、みんなそうなんだ。そして、最近、やっと理由が分かったんだ。ニコルといるとね、影響されるんだよ」

「影響ですか？」

「私も悪い事が分からなくなってた。ニコルみたいに、社会のルールが見えなくなるんだ。それが怖くなって、ニコルから離れていったんだよ」

「えっと、つまり・・・僕も影響されるかもしれないという事ですか？」

ベティは頷かなかった。

「レオンはニコルにとって初めての仕事なんだ。あの子が伝承者になったのは、つい最近の事だから。初めてだから、何が起きるか分からないんだよ。レオンがどうなるかも分からないし、ニコルがどうなるのかも分からない。だけど、ニコルにしてみたら、今が大きな節目なんじゃないかなって思うんだ。だから、なるべく上手いって欲しいって、そう思ってるだけなんだよ」

そこでベティはようやくこちらを向いた。いつもの屈託のない笑みだった。

「もちろん、一応レオンも心配してるんだけどね。でも、多少レオンの根性が曲がった程度の事なら、お父さんがどうにかしてくれるから平気だよ。命の保証は出来ないけどねー」

どこか、言葉に迫力がない。

今の説明を聞いただけでは、レオンには、この町の人達とニコルの関係が分からなかった。嫌われているわけではないが、皆から距離を置かれている。口で言うのは簡単だが、上手く想像できそうもない。

だけど、なんとなく、レオンはベティの様子を見ただけで、どういう感じの話なのかは分かった。もちろん、楽しい話ではない。だが、辛い話かというのと、少し違う気がした。

寂しい話というのが、一番しっくり来る。

「・・・分かりました」

「何が？」

「要は、ニコルさんと町の人達が馴染む事が出来ればいいんですよね？」

その言葉に、ベティは少し戸惑ったようだ。

「いや・・・別に、そこまではしなくていいと思うけど。レオンはとりあえず、冒険者になればいいんじゃない？そうすれば、ニコル

の仕事も成功って事になるわけだし」

「いえいえ。町の人達に恩返し出来るかもしれないですし」

「でもなー。1年しかないんだよ？」

「1年でだめなら、もう1年頑張ります」

「そこまではお父さんも面倒見てくれないと思うけど」

「その時は、どこかのお店で働きます」

「・・・なんていうか、本当にそうなってそうで嫌だなー」

ベティは呆れ顔をしてから、それでも、すぐにいつもの微笑みに戻った。

「まあいい。せいぜい頑張れー」

声が低い。どうやら、ガレットさんの物真似らしい。

レオンは笑った。

「さすが親子ですねえ」

「そう？　こういうの、ニコルは上手なんだよー。なんといっても、スニークの伝承者だから」

変装の達人のノウハウを生かしているのだろうか。

「へえ・・・というか、スニークの伝承者だったんですか」

「そうだよー。昔から、家の鍵とか普通に針金みたいなので開けてたし。たぶん町中の家の鍵は開けたことあるんじゃないかなー」

当たり前みたいに言ったが、もちろん一般的な趣味とは言えない。

「いや・・・それ、泥棒ですか？」

「練習してたんだってさ。だから、ニコルの家は鍵穴がないんだよー。なんか、ネジみたいなのを差してドアを固定するんだ。それだったら、ニコルも開けられないから」

自分の子供基準の防犯対策をしているらしい。

「・・・それ、ドアの内側で使うんですよね？　じゃあ、出かける時どうするんですか？」

「それは気にしないんじゃない？　だって、ニコルは閉まってる鍵にしか興味ないから」

もはや、防犯対策ではなかった。

「・・・出かける時に閉められない鍵って、意味ないですよね？」
「そもそも、泥棒なんて滅多にいないし。それに、ニコルに開けられるって事は、普通の泥棒なら開けられるって事だから」

正論みたいな口調で言ったが、きつと何か間違っているだろう。だけど、これ以上聞くと深みにはまりそうなので、レオンは話題を変える事にした。

「・・・えっと、ニコルさんって、16歳ですか？」

伝承者なら最低16歳。だが、全然そうは見えなかった。何かの特例だろうかと思つての質問である。

だが、ベティはあっさり認めた。

「そうそう」

「本当ですか？なんていうか・・・失礼ですけど、幼く見えますよね」

「見えるねー。全然胸もないし」

全然寝癖がないと言っているのと同じくらいの軽い発言だった。

レオンはそこにも深入りしない事にする。

「・・・というか、あの、もっと失礼なんですけど、ニコルさんは女性ですか？」

子供っぽいのもあるだろうが、鍛冶屋で会ったりディアどころではないくらい、見た目では性別が分からなかった。

「私はそう思うけど」

「・・・私は？」

「本人は秘密だつて言ってるからねー。というか、男女どちらの服でも似合うし、変装も上手だし」

「・・・ご両親に聞いてみたりはしないんですか？」

「何か、口止めされてるんだって」

どうしてそこまでして隠すのだろうか。

「一緒にお風呂に入ったりとか、ないんですか？」

「だって・・・もし男だったら恥ずかしいし」

それは確かにその通りだ。

「レオンが入ってみればー？女だったら儲け物でしょー？」

「儲け物って・・・」

「でも、胸がないからダメかー」

ベティは平然と言ったが、さすがにレオンは恥ずかしくなった。

「そういう事を言うのはさすがに・・・」

「あれー。レオンはない方がいいの？」

「違います。変な話をしないで下さい」

当然というべきか、やっぱりベティは止まらなかった。

「やっぱり大きい方がいいでしょ？私よりもデイジーの方が実はあるんだよー」

一瞬デイジーの胸元を思い出そうとした自分に気付いて、慌ててそれを打ち消した。目の前のベティに至っては、首から下を見られそうにない。

レオンはしどろもどろになる。

「いや、そういう事じゃなくて・・・」

「じゃあ、形の問題？それとも触った時の・・・」

「わー！わー！」

耳を押さえながら必死で叫ぶと、ようやくベティも止まってくれた。悪魔的な表情だった。弄ばれていたのは、間違いなさそうだ。

「レオンはさあ・・・」

次は何を言い出すのかと思って、レオンは心の準備をする。

だが、ベティの言葉は、今度こそ正論だった。

「いくら強くなっても、たぶん女の子には勝てないよねー」

思いつきり上半身から力が抜けた。

反論の余地は欠片もない。

「・・・せめてモンスターには勝てるように頑張ります」

不思議なもので、今ならばどんなモンスターにでも立ち向かえる気がしたレオンだった。

プロフェッショナル・アイ

「よし！休憩！」

その一言で、レオンの身体は看板が倒れるみたいに後ろに傾く。地面の衝撃。

固いけど痛くはない。土の匂いが鼻を掠める。

剣と盾を離して大の字になった。

空は青い。

小さな雲。

子供達の歓声。

レオンは深呼吸した。体内の熱い空気を吐き出すと、代わりに外の冷たい空気が入ってくる。

心地良い疲労感。

だが、それとは逆のもやもやしたものが、小さいながらも心の中にはあった。

やっぱり上手くいかない。なんとなく、分かってはいたのだけだ。

小さく息を吐く。先ほどの深呼吸とは違い、心の中のわだかまりを追い出そうとしたが、今度は上手くいかなかった。

レオンがいるのは、この町で一番大きい訓練所である。伝承者をしているフレリックさんが大きくしたという施設だ。場所はそのフレリックさんのお屋敷のすぐ隣。今はギルド所有の建物という事だが、どうやらフレリックさんが、今でも管理人の立場なようだ。

訓練所といっても、レオンのような冒険者見習いは全くいない。むしろ、子供達が剣を習いに来る場所になっているらしい。子供達が20人くらい走り回っても十分過ぎるほどの屋外スペースに、着

替えや休憩の為の小屋が併設されている。小屋といっても、家具さえ揃えれば、1家族が十分暮らせる規模の物だ。その中に、刃を潰した訓練用の武器や、簡易防具が大量に保管されている。

自分の武器と防具が出来上がるまで、レオンはここで戦闘訓練をする事にした。どんな武器が用意されているか分からないというのがなんとも言えないところだが、とりあえず、鍛えておくに越した事はない。

「レオン」

まるで刃のように硬質な男性の声に、レオンは身体を起こす。

その彼が、ちょうどこちらに向かって水筒を差し出したところだった。お世話になっている酒場のガレットさんが用意してくれた水筒である。小屋の前に置いていたはずだが、わざわざ持ってきてくれたようだ。

「アレンさん。どうもありがとうございます」

水筒を受け取りながら、御礼を言う。そのまま彼は、レオンの正面に座り込んだ。

少し長めの黒い髪。黒い瞳に、鋭い顔の輪郭。だが、彼の一番の特徴は、間違いなくその長身だった。かなり大柄なガレットさんよりもさらに上。彼より背が高い人間を、レオンは見た事がない。体つきは筋骨隆々というほどではないが、それでも鍛え上げられているのが分かる。正確としては、無口というほどではないが、どちらかというと寡黙な人物。頼りになるお兄さんという印象が強い。

それがアレン。彼はこの町の警備の他に、この訓練所の教師をしている。レオンがここを初めて訪ねた時に出迎えてくれたのが彼だった。そもそも教師は数人しかいないようだが、そんな縁もあって、レオンの訓練に付き合ってくれているのだ。

「やっぱり上手いきませんか。村を出る前に、少しは訓練したんですけど」

レオンから話を切り出す。アレンから話しかけてくる事はあまりないから、こちらから話さないと、ずっと沈黙が続くのだ。

アレンは表情を変えずに答える。

「そうでもない。レオンは筋がいい方だと思う」

その評価が、レオンには意外だった。

「・・・でも、僕、未だにアレンさんから一本も取れませんが」
誇張も何もなく、まさしくその通りだった。

この訓練所を訪ねて、今日は3日目である。初日にまず、アレンはレオンの腕がどの程度なのかを見てくれた。レオンが自己評価するなら、やっと剣の振り方を覚えたくらいの腕である。だが、それだけ出来れば十分だという事で、すぐに剣と盾と防具をつけて、アレンさん自ら訓練してくれる事になった。

実践形式というか、決闘形式である。剣の腕もさることながら、体格に結構な差がある。もう何十回と打ち合ったが、未だにレオンの剣が届いた事は一度もなかった。

「そんな簡単に一本取られても困る。それに、一本取って欲しいわけじゃない」

「え？　そうなんですか？」

アレンは頷く。

「剣を通して、レオンの事を見させて貰っていただけだ」

「僕の・・・」

「剣は俺の専門分野だ。剣を通してなら、相手の事がほとんど分かる。だから、それに付き合って貰っていただけだ」

「つまり・・・まだ訓練じゃなかったんですか？」

「強いて言うなら、剣を握る前に筋力トレーニングをさせていた。あっちが訓練だ」

確かに、妙に念の入ったトレーニングだとは思っていた。ちょっと騙されていたような感じもするが、自分は初心者なわけだから、それが普通なのかもしれない。

「ただ、あれだけ必死になって一本取ろうとしていた自分は何だったのか。」

空しくなったような、ほっとしたような、複雑な気分で溜息を吐

くと、アレンが唐突に質問してくる。

「レオン。もしかして、狩猟経験が相当あるんじゃないか？」

その指摘にレオンは戸惑いながらも頷く。

「あ、はい。父さんが狩人なので、よくついて行ってたんです。えっと、6歳からだから・・・そういえば10年間になりますね。もちろん、最初は見てるだけでしたから、実際に狩りをしてたのは、7、8年くらいだと思いますけど」

レオンのいた村では、狩りはとても重要なものだった。食肉を確保する上でももちろんだが、どちらかというと、山の動物達にこちらの縄張りを認識させるための仕事だった。

自然との共生。それがレオンの村の出身である、サイレントワールドことイブ様が大切にしていた教えである。

その答えに、アレンは大きく頷く。

「やはりか。お前の剣はそういう剣だった」

そういう剣と言われても、レオンにはさっぱりだった。

「えっと・・・どういう剣ですか？」

「まず、レオンは実践慣れしていた。普通は、いきなり人間相手に武器を振るうのは躊躇するものだ。相手が傷つくのを想像してしまうから、それを振り払うのには、相当な精神力がいる」

「いや、僕だって、結構躊躇してましたけど」

「確かにそうだが、普通はその程度じゃない。最初に人に相對する時は、誰もがどこかで負けたいと思っているくらいだ。相手よりも自分の剣を恐れる。自分の剣がとれくらい危険な物なのかが分からないからだ。どんなに腕がある人間でも、最初は震えて力が出せない。だが、レオンは最初から俺を倒す気でいた。相對した俺なら分かる。レオンの剣は震えていなかった。それはある程度、他の生命を傷つけた事があるからだ」

そう言われると、確かにそうかもしれない。最初は確かに緊張したが、どちらかというと、上手く戦えるか心配していた為だった気がする。

土の上に座ったまま、アレンはこちらをじっと見つめている。

「そして、もうひとつ。レオンは戦士としての戦い方が、全く板に付いていない」

はつきり言われるとやはり残念だが、頷かざるを得ないところだった。

「それはそうですよ。まだほとんど訓練してませんから」

「いや、そうじゃない。レオンの戦い方は柔軟過ぎる」

「え？ 柔軟ですか？」

そう言われても、自覚はなかった。

「俺が教えている子供達は、ここに初めて来る時は皆真っ白な状態だ。他の戦い方を全く知らない。だから、ある程度教えていると、皆同じ様な戦い方になる。変な言い方だが、教師である俺の戦い方に染まっていくと言ってもいい」

「それはまあ・・・そうかもしれないね」

「だが、レオンの戦い方は、戦士の模範からまるで外れている。剣や盾の使い方は教わったようだが、はつきり言って全く様になっていない。俺には剣と盾が浮いて見えるくらいだ。それは、既にレオンの身体に他の戦い方が染み込んでしまっているからだ。その戦い方に、今日やっと確信が持てた。レオンはまさに狩人の戦い方をしている。大自然の、決して平坦ではない地形で生き抜くための、柔軟で軽快な身のこなし。そんなレオンに重い剣や盾を持たせても、上手くいくわけがない」

真っ直ぐな眼差しで、そう断言されてしまった。

たっぷり数秒間を空けて、レオンは尋ねる。

「えっと・・・それはつまり、僕には戦士が向いてないって事ですか？」

「そうだ」

「・・・あの、僕、一応アスリート志望なんですけど」

剣や盾が使えなければ、それを扱う事が専門であるアスリートにはなれない。

「レオン」

「はい？」

「ついてこい」

アレンが立ち上がりながらそう言うので、レオンも立ち上がる。彼が向かったのは、併設されている小屋の方だった。レオンもその後をついていく。ふと横を向くと、少し離れた場所で、男の子4人が小さなサイズの剣を一生懸命に振っている。なんとなく微笑ましい。デイジーからソードマスターの話を聞いていたからかもしれない。

アレンは小屋の前でレオンを待たせると、自分だけ中に入っていた。

待つこと数分。なんとなく空を見上げる。今日もいい天気だ。しばらくして、アレンが小屋から出てくる。

出てきた彼は、盾を持っていた。だが、さっきレオンが持っていた物よりかなり小さい。ガレット酒場で使われているお盆みたいだと思った。

「これをつけろ」

その盾を差し出しながら、アレンは言った。

「え・・・これ、つける物なんですか？」

レオンの中で、盾と言えば、手に持つ物である。

その発言を聞いたアレンは、黙ってレオンの左腕を掴んで、盾の裏側中央から伸びているベルトの様な物を巻き付ける。

取り付けられてみると、さっきまで持っていた盾ほどではないが、それでも少し重い。

「バックラーだ」

アレンはそれだけ言った。この盾の名前らしい。

「へえ・・・」

腕を動かしてみるが、思ったよりもしっかり取り付けられているようだ。だが、盾としては、面積が寂しいので心許ない。

「レオン、ひとつ宿題を出しておく」

「え・・・何ですか？」

「両利きになれ」

もの凄く端的な命題だった。

「・・・えっと、両利きっていうのは、つまり、両手が利くようになれって事ですか？」

「そうだ」

「それって・・・そんな簡単に変わるものですか？」

右利きの生活を既に16年も送ってきたのに、今更直せるものなのだろうか。

「簡単には直らない。だが、その盾を生かす為には必要な事だ。それは両手を空けながら、盾を利用する為の物だ。その方が、両手が使える分、より柔軟に戦える。だが逆に、分かんとは思うが、防御が手薄になる。防御を代償として、機動力と柔軟性を手に入れる。難しい戦い方になるが、レオンの狩人としての経験を生かすためには、これが最善だと思う」

「なるほど・・・」

理論としては分からないでもない。

「でも、両手が使えるとはいっても、具体的にどうしたら・・・」
アレンは頷いた。当然の疑問だったようだ。

「将来的には、二刀流出来るのが望ましい。つまり、左手でも武器を扱えるようになるのが理想だ。だが、とりあえず左手を空けておいても、武器や盾を捨てなくても道具が使えるし、あるいは、盾を捨てなくても弓の補助が出来るようになる。ただ剣を振るうだけではなく、場合によっては、弓や道具を使う。そういう幅広い戦術を意識するといい」

「なんていうか・・・頭を使わないといけませんね」

「そうだ。だが、それが出来ないレオンは生き残れない。レオンはガレットさんの娘のベティと面識はあるか？」

突然その名前が出てきた事に驚いたが、すぐに苦笑して頷いた。

「はい、もちろん。面識があり過ぎて困ってますけど」

面識だけならいいが、過剰なボディランゲージが伴っているのが気が抜けない。気を抜いたら大怪我をさせられそうな、ある意味で元氣過ぎる女の子である。

アレンはくすりともしせずに、真顔で頷く。

「彼女も狩人だ」

「え？ そうなんですか？」

初めて聞く話だった。よく考えたら、自分の事は大方白状させられたが、彼女の事は何も知らない。

「まだ数年ほどだから、レオンよりは経験が浅い。だが、彼女には同僚というか、師匠がいる。元々は彼1人で狩人をしていたんだが、事情があってベティが手伝うようになった。彼の名前はホレス。聞いた事はないか？」

「あ・・・名前は一度だけ」

この町に来了た初日、ベティが口にしてるのを聞いた気がする。

「一度彼に会ってみるといい。彼は冒険者ではないが、かなりの腕利きだ。戦い方の参考になるかもしれない」

「あ、なるほど・・・分かりました」

「彼は日によって居場所が違うが、ベティに言えば案内してくれるだろう」

「・・・そうですか。頑張ってみます」

「どうかしたか？」

「いえ、別に・・・」

何か災難が起こる気がするとは言えなかった。

そこで、2人に近づいてくる人物がいた。

レオンはすぐに気付く。

「リディアさん」

鍛冶師のジェフさんの娘、リディアである。赤みがかった茶髪を前と同じ高い位置で束ねている。どこか中性的な顔立ちの中に、明るい瞳が不思議な印象を放っているのは相変わらずだが、珍しく今日はスカート姿だった。珍しいとレオンが評価出来るのは、ベティ

から、リディアはスカートをほとんど穿かないと聞いていたからである。そのためか、以前は格好いい印象が強かったが、今日は一段と女性らしく見えた。

彼女は、布に包まれた大きな箱のような物を小脇に抱えている。

「アレンさん、レオン、こんにちは」

リディアは軽く頭を下げる。レオンだけ呼び捨てなのは、年齢を意識しての事だろう。彼女は17歳。レオンよりも年上なのだ。これも、聞いてもないのにベティが教えてくれた情報である。

「こんにちは。こんな所までお仕事ですか？」

「そう。ベティがここだって、言ってたから」

「もしかして、僕に用事ですか？」

「アレンさんもいるなら、ちょうどよかった。とにかく、はい、これ」

持っていた箱を、両手でレオンに差し出す。

「・・・はいって、何ですか？これ」

リディアは即答した。

「武器」

「・・・僕の武器、箱ですか？」

「中身に決まってるでしょ。開けてみて」

「え？あ、はい・・・」

剣とか槍にしては箱の大きさが小さかったので、中身が想像出来なかった。そもそも、武器をわざわざ箱に入れてこなくてもいい気がする。

布を取ってみると、中身は木箱だった。

その蓋を慎重に開ける。

中に入っていたのは、革の帯。

そして、黒い柄と鉄の刃。

レオンは取り出してみた。

「・・・ナイフですか？」

言葉通りの、それは短剣だった。正式にはダガーと呼ばれる物だ。

長さは30センチもない。箱の中身は、それが3本と、それを腰に下げる為のベルトのようだ。食事用のナイフよりは大きいものの、武器としては小型の物で、しかも軽い。扱いやすいのは間違いないが、威力は心許ない気がする。

だが、手に馴染むのは確かだった。子供の頃から狩りの度に握っていた物とよく似ているのである。思わず懐かしさを覚えたほどだった。鍛冶師のジェフさんが、自分を一目見て勝手に作った物だが、とりあえず、慣れている武器という点では間違いない。さすがの職人の目である。

「これは、投擲用か」

アレンが呟くように言った。

リディアが軽く頷いて答える。

「はい。だから、アレンさんに投げ方を教えて貰った方がいいと思うって」

「いや、投擲は専門じゃない。ホレスが知っていればいいが・・・」

「ホレスさんは接射が上手いですから」

「そうだな。知らない可能性が高い。そうすると・・・」

2人はそこで黙った。

レオンは、そんな2人をキョロキョロと眺める。

「えっと・・・もしかして、教えてくれる人がいないって事ですか？」

アレンとリディアは顔を見合わせた。

「いや、いるにはいる。もの凄い名手が」

「そう。だけど、ちょっと事情があって・・・」

そこで突然、声が割り込んできた。

「事情って何の事ですか？」

レオンも驚いたが、それ以上に驚いたのは、アレンとリディアの方だった。いつもクールな2人だけに、驚いた顔は珍しい。

声の主の方に3人は注目する。

日傘の影の中にいたのは、長い髪が目を引く、落ち着いた容姿の

少女。3人のリアクションに戸惑っているようだが、それもどこか抑制されていて、育ちの良さを感じさせる。

この訓練所の隣にあるフレデリックさんのお屋敷。そこに住んでいる彼の孫娘。

「あ・・・デイジーさんですか。急に声がしたので驚きました」

レオンが笑いながら言うと、デイジーも微笑みを返す。

「それは失礼をいたしました。何か深刻な話かもしれないと心配になったものですから。この訓練所で、何か足りない物がありますか？」

「いえ、全然。ちょっと、この・・・」

そこでリディアに口を塞がれた。

だが、レオンが両手で持っているのだから、当然気になっただろう。デイジーは自然と箱の中身を見て、そして嬉しそうな声を上げた。

「まあ・・・素晴らしい一品ですね。これはジェフさんの作品ですか？」

聞かれたリディアは、諦めたように息を吐いてから、レオンを解放する。

「そう。お父さんの。バランスは私が調整したけど」

「ジェフさんもしリディアもさすがですね。とても綺麗に出来ています」

綺麗かと言われると、確かに綺麗かもしれない。だが、刀身はともかく、柄はただ真っ黒なだけの味気ないデザインだから、女の子の趣味としては微妙なところではある。

だが、デイジーの発言はここで終わらなかった。

「レオンさん。ちょっと、使ってみてもよろしいですか？」

さすがに耳を疑った。

「・・・使えますか？」

その言葉に答える事なく、デイジーは勝手に箱からスローイングダガーを一本抜き取る。それを見て数秒間うっとりしてから、彼女

は重さを確かめるように、短剣を握った右手首をスナップさせる。妙に手慣れてると思った、次の瞬間だった。

デイジーの右手が一閃した。

放たれた短剣は直線を描くように真っ直ぐ飛び、20メートルほど先にあった木の幹の真ん中に突き刺さる。

完全に玄人の投擲だった。

誰も声が出ない。

デイジーは満足げに微笑むと、リディアの方に向き直る。

「綺麗ですね。本当に美しいバランスです。あれだけ重心がしっかりしていれば、かなり長い間使えるでしょうね」

専門家みたいな感想だった。

今度は、レオンの方を向いた。

「レオンさん。また今度、よかったら触らせて下さいね。他にも、剣の事なら、何でも聞きにいらして下さい。それでは、私、ここで失礼いたします」

デイジーは優雅に一礼すると、機嫌良さそうに、門の方へと歩いていった。

しばらく、誰も喋らなかった。

最初に口を開いたのは、アレンである。

「・・・そういえば、そろそろ差し入れを持ってくる時間だった。

失念していた」

フレデリックさんが高齢の為か、代わりにデイジーがここまで差し入れを持ってやってくる事が多い。レオンも何度か顔をあわせている。

だが、今更後悔しても遅すぎた。

一応気になったので、レオンは聞いてみる事にした。

「デイジーさんはどうして・・・あんな事が出来るんですか？」

投擲と云えばいいのだが、なんとなく口にするのが憚られた。お嬢様の趣味としては、間違いなく一般的ではないはずだし、趣味程度の腕ではないのがレオンにも分かった。

アレンはすぐ隣に建つお屋敷の方を向きながら言った。

「彼女の祖父がソードマスターの伝承者なのは知っているだろう？」

「あ、はい」

「彼女は幼い頃から、お祖父さんに可愛がられていた」

「・・・えっと、それで？」

「それだけだ」

「・・・そうですか」

女の子にはそれらしい可愛がり方がある気がする。

「なんていうか・・・この町の女の子は、皆さん逞しいですね」

デイジーもそうだし、狩人をしているベティもそうだ。

だが、反論する人が1人いた。

「みんなじゃないけど」

リディアのどこか冷めた声に、レオンは慌てる。

「そ、そうですよね！リディアさんは違いますよ・・・ね？」

言い切る自信がなかったレオンだった。

「一緒だと思う？」

「いえ！そんな・・・」

じっと見つめてくるリディアの視線に、レオンは耐えきれなくなつた。

「そ、そういえば、今日は、リディアさん、スカートですね。素敵だと思います」

「デイジーは大抵スカートだけど」

「で、でも、リディアさんは、珍しいじゃないですか！その、いつもは格好いい感じですけど、今日は一段と可愛らしいっていうか・・・」

自分で言つてて恥ずかしいくらいだった。

言われた本人はもっと恥ずかしかったのだろう。視線を逸らしながら、頬を赤らめているのが分かる。

レオンの左腕を一瞥してから、ぶっきらぼうな口調で言う。

「・・・鎧と盾はもうちょっとかかるから」

その言葉を残し、リディアは足早に去っていった。

残ったのは男2人と短剣3本。

よく分からないけれど、とりあえず、解放されてよかったという
思いでいっぱいだった。

そこで、いつの間にか木に刺さった短剣を回収してきてくれたアレ
ンがぽつりと言う。

「レオンは友人に恵まれているな」

どこか、認めにくい言葉だった。

「・・・そうですね。とりあえず、武器も手に入っただし、使い方を
教えてくれる人も見つかったし」

だけど、後で何かとんでもないしっぺがえしが来そうな気がする
のは何故だろう。

レオンの背後では、無邪気な子供達の歓声が響いていた。

必要不十分

細長い金属棒が穴の中を這いずり回る。

金属が擦れ合う音。

針金から手に伝わってくる振動。

その両者を感じ取りながら、構造を想像する。

傍らに置いてある本に載っている図と比較しながら。

これだろうか。

100年ちょっと前に作られた型。

別のツールを取り出す。

針金を曲げて、形を微調整する。

上を押さえて、下の本体の方へ差し込む。

カチツという、確かな手応え。

「・・・やった」

レオンの口から、達成感と共にその言葉が零れ出たその時だった。
「ちよっ・・・うわっ！」

その声の後に小さな炸裂音がしたかと思うと、レオンの背後で、
積んであった酒瓶が崩れ落ちたかのような、盛大な音が鳴り響いた。
思わず両手で耳を塞いだレオンだが、数秒後、恐る恐る振り返る。
元々散らかっていたガレージ内だったが、今はさらに多くの、よ
りどりみどりの物が床に散らばっている。

その中心にいるのは、黒っぽいショートヘアの、子供にしか見え
ない人物の後ろ姿。レオンと同じ16歳という事だが、どうも臍目
に見ても、12歳くらいにしか見えない。ついでに性別不詳という
謎の人物。今は床に座り込んでいるから、腰に巻いた上着がスカ
ートみたいに見える。だから、なんとなく女の子っぽく見えるが、立
ち上がってこちらを向いたら、ハーフパンツを履いているのがはっ

きりするので、その時点で性別に自信が持てなくなる。見る方向によって印象が変わる、万華鏡みたいな人物である。

そんな人物だが、今はここからでも分かるくらい肩が震えていた。怒っているのか、泣いているのか分からないけれど、いずれにしても不機嫌なのは間違いない。

「その・・・ごめん、ニコル」

レオンが控えめに謝ると、ニコルは大きく溜息をついて、床に寝ころんだ。

逆さまの顔も、目が大きくて子供っぽい。明るい瞳が自然と目を引くが、それほど怒っている様子ではなかったので、レオンはほっとした。

「まあ、いっかぁ・・・元々見込み薄だったんだよね」

息を吐き出すようにそう言った。ニコルは声が少し高い。だけど、男の子だとしても、声変わりしていない場合もあるから、それほど不自然ではない。

邪魔をしてしまった手前、レオンは一応聞いてみる事にする。何か作っている時のニコルは、ちょっとした物音にも敏感なのだ。自分の呟きが邪魔をしたのは明らかである。

「何を作ってたの？」

「うーん・・・一言で言うなら、魔法妨害装置かなあ。ちょっとアイデアがあって、もしかしたら、魔力に干渉して、魔法を妨害出来るんじゃないかと思ってたんだけど」

「え・・・それって、もしかして凄い事なんじゃ？」

魔法の才能はからっきしなレオンだが、そんな発明品は聞いた事がない。もしかしたら、偉大な発明ではないのか。

「でも、そもそも、魔法を妨害したかったら、術者の前に、閃光弾とか火薬とかシンバルとか、とにかく大きな音とか光を出す物を投げればいいだけだし」

「なかなかシンバルは持って行かないと思うけど・・・それだって、確実に妨害出来るわけじゃないよね？」

「確実なのは、まあ、攻撃する事だよね。出来たら息の根を止める事」

「でも、それだって、相手に護衛がいたらダメなわけだし」

「まあね。というか、音とか光が効かないモンスターもいるだろうから、結局、確実なのは人間相手の時だけかなあ」

「・・・今気付いたけど、ニコルが想定してるのは、人間同士の戦いなの？」

「人間はいいんだよ。さっき言ったように、閃光弾とか投げればいいんだから。だけど、モンスター相手には何が効くか分からないから、もし魔力妨害が出来るなら、一番確実でしょ？」

「ああ・・・なるほど」

「それでアイデアを思い付いたから、ちょっと作ってみてたんだ。だけど、やっぱりちょっと難しいな。そもそも、僕には魔力が見えないから、確かめようにも確かめられないし」

レオンは不意に思い付いた提案を試してみる。なるべく悟られないように、自然な感じを心がけた。

「だったら、誰か町の人に頼んでみたら？魔法が使える人がいるはずだし」

その提案にも、ニコルは浮かない顔のままだった。

「あんまり頼みたくないなあ。もしかしたら、魔法が暴発するかもしれないし」

「でも、もし成功したら、凄い事だね？」

「そうでもないよ。魔力を利用した装置なら、同じ様な物が結構あるから」

「そうなの？そっか・・・」

それ以上の言葉を思い付かなくて、レオンは口を閉ざした。勧誘失敗。

そこで、鈴が転がるような音がする。

音の方を見ると、長い黒毛のカーバンクルが床に散らばった金属の球のような物を転がして遊んでいる。遊んでいるというより

も、その物体の丈夫さを確かめているような、慎重な手つきだった。その妖精が不意にこちらを向く。闇そのものの様な漆黒の中に、アメジストの様な瞳が輝く。

「クロ。おいで」

ニコルが身体を起こしながら呼ぶと、クロはそちらに悠然と歩いて行って、膝に飛び乗った。

頭を撫でているニコルも、撫でられているクロも、同じように目を細める。

その微笑ましい光景にレオンも口元が綻ぶが、心はすっきりとしない。

ここに訪問するのは6度目だが、このガレージに、ニコルとクロ以外がいた事は一度もない。それとなく聞いてみると、ニコルはあっさりと、他には誰も来ていない事を認めた。寝食をする時はさすがに家に帰るらしいが、それ以外はずっとこのガレージで、1人と1匹。たまに、酒場のベティや道具屋のラッセルが訪ねて来る事もあるらしいが、その頻度もかなり少ないらしい。その理由は簡単で、ニコル自身が、研究の邪魔だからと言って追いつ返すかららしい。

ニコルは自分で周りから距離を取っている。

これはベティの評価である。最初に訪問した時の嘘泣きは、人を追いつ返す時の常套手段であるらしい。他にもいろいろな手があるらしいが、結局は、わざと相手に嫌われようとしている。その結果が今の環境らしい。ベティは昔のよしみがあるから、ラッセルはたまに資材を運びに行くから、そして、レオンは仕事相手だから話して貰えるらしいが、他の人ではこうはいかないという事だった。

自分でこしらえた孤独。その中にいるニコルは、傍目には寂しうには見えない。

もしかしたら、本当に寂しくないのかもしれないとベティは言っていた。そういう一般的な感性の持ち主ではないらしい。だけど、付き合っただけの日が浅いレオンには、そう簡単に受け入れられる話ではなかった。

きっと寂しいに違いない。だから、何かのきっかけで外に出て欲しい。

そう思って、それとなくいろいろ誘ってみているのだが、今のところ、上手くいく気配は全くない。元々レオンは口が上手くない。もつと口が上手いはずのベティだって試したはずなのだ。それでも上手いかなかったわけだから、難敵なのは間違いない。

そんなこんなで、訓練が終わった後に毎日のように訪ねている。その結果、ニコルには変化はないが、レオンの鍵開けの技術はメキメキと上達していた。もちろん、悪いわけではないが、素直に喜べないところである。

「それで、その鍵開けられたんだよね？」

いつの間にか目の前にいたニコルに、レオンは仰け反るほど驚いた。

「近っ!!」

その驚きのように、ニコルは頬を掻きながら苦笑する。頭の上にはクロが乗っていて、薄紫の双眸がなければ、完全に髪の毛と一体化していた。

「レオンも、僕の気配くらいは感じられるようになって欲しいなあ。その調子だと、不意打ちとかで大怪我しそうで心配なんだけど」

確かに、今不意打ちされていたら、大怪我どころではなかったかもしれない。

「そうだよね・・・ごめん」

「まあ、僕で慣れてくれたらいいよ。それで、その鍵は分かった？」
「あ、うん」

ニコルは腕を組んで、関心したように何度か頷く。だけど、見た目は子供なので、威厳は全くなかった。

「レオンは勉強熱心だよね。あと、手先もそこそこ器用だし」

「そ、そうかな？」

「冒険者よりも、怪盗とかになってみたら？」

あまりにさりげない口調だったため、一瞬頷きそうになった。

「・・・いや、そもそも、そんな職業あるのかな」

「スニークは元々泥棒だったんだよ。悪い奴からしか盗まなかったとかじゃなくて、大金持ちから手当たり次第に盗んでた大泥棒」

レオンは知らなかった。そして、聞いた瞬間に、出来れば知りたくなかったと思った。伝説の冒険者の功績が、少し霞んだような気がした。

「・・・だけど、結局偉大な事をしたから、伝説になったんですよ？」

「さあ・・・僕はその頃の記憶は知らないから」

ニコルは少し首を捻ってそう言った。らしくない、不自然な動作だった。何か前世の記憶で気になる事があるのだろうか。

「それよりも、その鍵が済んだって事は・・・そっか。基本はそんなところだね。あとは応用すれば、大抵の鍵はなんとかなるよ。普通の鍵は、だけどね」

「普通じゃない鍵って？」

「ダミーの鍵とか、特別な加工がしてある高級な鍵とか、魔法の鍵。あとは、錆び付いて開かなくなった鍵とか」

「なるほど」

凄く具体的だった。経験が相当あるのだろう。

「とにかく、あとは経験あるのみ。というわけで、これから毎日、夜な夜な・・・」

レオンはそこで言葉を遮った。

「・・・泥棒の真似事は遠慮します」

ベティ情報によれば、ニコルは練習と称して、町中の家の鍵を開けて回った事があるらしい。

そんなレオンの反応が可笑しかったのか、ニコルは軽く笑いながら言った。

「冗談だよ。僕が集めた鍵があるから、それを持って帰って練習したらいいと思う。あとは、まあ、ダンジョンで余裕があったら、必要な鍵でも開けてみたらいいよ。もちろん、罠がなかったらだけ

ど」

そこでレオンはかねてからの疑問を尋ねてみる事にした。

「あの、前から気になってたんだけど」

「何？」

「こういう鍵開けの技術って、ダンジョンで必要なの？」

冒険者といえば、戦闘のイメージしかなかったレオンである。

ニコルの回答は無関心そのものだった。

「さあ」

「さあって・・・」

「だって、僕、ダンジョンに行った事がないし」

「それはそうだけど」

「とりあえず、ラッセルの店で解錠用のツールが売ってるから、鍵があることはあるんだよね。だけど、例えばドアとか檻とかだったら、壊して通る事も出来るし、魔法で開ける事だって出来るから、まあ、他のメンバー次第なんじゃないかな」

「他のメンバー・・・」

今のレオンにとって、それは最大の懸念だった。

「もしかして、まだ仲間がいないの？」

ズバリ尋ねられて、レオンは答えに窮した。だが、それで十分答えになっていた。

ニコルは特に表情を変えずに、あっさりと言った。

「だったら、覚えておいた方がいいよね」

「え？」

「だって、レオンは魔法が使えないし、壊して通るほどの力もないし。火薬とか使って吹き飛ばす手もあるけど、水が多いと使えないし、数に限りがあるわけだから、出来るなら取っておきたいしね」とても論理的だった。きっと正論である。

だけど、1人でいる事をあまりにあっさりと想定しているから、それが気になった。

クールとかドライとか、そういう風にもとれる。もしかしたら、

これがニコルの強さだと言う人だっているかもしれない。身体は小さいけれど、頭も技術もある。強い敵がいたら隠れる事が出来る。不意をつく事だって出来る。

まるで、1人でいるために培ってきたような能力。

レオンはやっぱり、少し寂しいと思った。ニコルが寂しそうじゃないから、そして、ベティが寂しそうだったから、その両者を知っているレオンは、その対比が余計に寂しい。

でも、これは結局、レオンの印象でしかない。

ニコルの心の中は分からないのだ。ここ数日通い詰めた程度では、分かる方がおかしい。

だが、もし分かったら、何か変えられるかもしれない。

相手を理解する方法がないだろうか。

そこで、レオンは思い出す。つい先日、訓練所でのアレんさんの言葉。

良い手かもしれない。

「ニコル」

突然レオンが表情を明るくしたので、ニコルは訝しんだのかもしれない。少し顔を傾けて聞いた。

「何？」

「僕に何かガジェットを作ってくれない？」

ガジェットというのは、ニコルが作っている怪しげな装置の事だ。それが一般名詞として広く定着している物なのか、それともニコルが勝手にそう呼んでいるのかは知らないが、今はそんな事はどうでもいい。

レオンの言葉を聞いたニコルは、文字通り目を輝かせていた。

「本当！？いいの！？」

言い出したのはレオンの方だが、その喜びように、思わずたじろいだ。

「う、うん・・・」

「うわぁ！嬉しい！本当は、いつ言い出そうかって思ってたくらい

なんだ！だけど、やっぱりこちらからは頼みにくいでしょ？頼みにくいんだ。頼みにくいんだよ、これが」

何故か繰り返されたので、レオンは気圧されて頷く。

「そ、そっか」

「そうなんだよ！だけど、もう、レオンから頼んできたからには、断るのは筋違いってものだよね！もう、任せて！使いやすくて、威力がばっちりな奴を用意してみせるから！どうせ、レオン以外は全て敵なわけだしね！木っ端微塵にしてみせるよ！」

自分は木っ端微塵にならないだろうか。それが果てしなく心配だった。

「出来たら、もう少し大人しいのでも・・・」

「そう？あ、そうか。レオンの戦闘スタイルがあるよね。分かっている分かってる。レオンはどうせ、重い鎧は無理でしょ？武器はどうするの？あ、投げナイフだっけ？」

「そ、そうだね。あと、軽めの剣も作ってくれてるみたいで」

これはアレンさんと、それからデイジーの提案だった。スローイングダガーだけだと臨機応変さに欠けるというのである。武器訓練の専門家であるアレンさんの意見はもちろん、何故か剣に関して尋常ではない知識があるデイジーのお墨付きまである。それを鍛冶屋のリディアに相談してみたら、あっさり承諾してくれたのだ。

ニコルはレオンの左腕を見る。そこには、バックラーが取り付けられている。重さに慣れる

為に、普段からつけて歩いている。最初は恥ずかしかったが、すぐに慣れてしまった。

「要は、軽い剣と飛び道具だね。なるほどなるほど。うん。任せて！特に、左手が使えるわけだから、どうにでもなる。うわあ！・・・楽しみ！絶対凄い奴を用意しておくから、任せてよ。本当に、威力だけは保証するから！」

少し前のレオンの言葉は、綺麗さっぱり忘れられていた。だけど、本当に嬉しそうなニコルの表情を見ていると、何か言う

気が失せてしまった。

ただ、ニコルが作った物を通してなら、作った本人の事が分かるのではないかと思ったのだ。アレンさんが、剣を通して自分の事を知ろうとしてくれたように、話す以外の事で、知ろうとする方法があるような気がした。その為のアプローチのつもりだったのだ。まさかこんなに喜ぶとは思わなかったけれど。

でも、もちろん、悪い気はしない。

ニコルの表情につられるように、レオンの表情も笑顔になる。

ただ、漆黒のカーバンクルだけが、ニコルの頭上で眠そうに大欠伸をしていた。

雨音の帳

酒場の喧噪。

20以上あるテーブル席は、相当な場数を踏んでいると思われる熟練の冒険者達でほとんど埋まっている。彼らには昼夜の境といったものは曖昧なようだ。まだ昼間と言えるこの時間でも、既に何本もの酒瓶を転がしているテーブルが多い。それぞれが、次の行き先、戦術の見直し、あるいは単に世間話等、思い思いの事を話している。硬い岩を削っているような荒くれ者達の声が屋内を支配していた。

だが、そんな喧噪も、今のレオンの耳には入らない。いつものカウンター席。

レオンの全神経は、目の前の小さな金物に注がれていた。

細長い針金越しに伝わってくる内部の構造。外面の滑らかな金属盤からは想像も出来ないが、中身は精巧かつ緻密そのものだ。かれこれ数十分程こうしているが、あまりに複雑過ぎて、頭の中で上手く構造を想像出来ない。恐らく、そう意図された構造なのだろう。何かに書き留めながらならもっと効率があがるかもしれないが、まだ練習の段階だから、出来るだけ楽をしたくはない。

そうして完全に没頭していたレオンの後頭部を、突然硬質な円盤が襲った。軽く音が鳴る程度だったが、頭の中で少しずつ積み上げていた内部の想像図がどこかに雲隠れしてしまった。

「あー・・・」

一度忘れたものは、思い出そうにも容易には思い出せない。情けない声を出すレオンに、明るい少女の声が飛ぶ。

「レオンー。あんまり熱中すると、今に飢え死にするよー」

聞き慣れた声に体を捻って振り返ってみると、案の定、そこには見慣れた栗色のポニーテールと瞳の少女が笑っていた。

ここ、ガレット酒場の看板娘のベティである。多少元氣過ぎる女の子だと思っていたが、この酒場でお世話になっているからなのか、怖いことに、レオンは既に幾分慣れ始めている。

彼女はレオンの前に左手に載せていたお盆を置く。レオンの昼食である。今日は鳥のようだ。皿いっぱい肉の片隅に、熱を通した野菜が数種類だけ、申し訳程度に顔を覗かせている。

「あ、ごめん・・・ありがとう」

ベティはまだ右手にお盆を載せている。さすがに手慣れた様子で、そうしていると、れっきとしたウェイトレスなんだと思い知る。

レオンはふと店内を見回した。テーブルの一角では、店長のガレットが、顔馴染みらしき大男と悪態をつき合っている。顔が笑っているから、そういうコミュニケーションなのだろう。彼の両手にも料理を載せたお盆があるから、ちゃんとした仕事である。

「なんだか忙しそうですね」

「まあねー。雨が降ってると多いんだよ。やっぱり、どうせ行くなら晴れの日がいいんじゃないかな」

雨だと移動が困難になるし、火に関連した道具が使いにくくなる。日が選べるのなら、雨の日は避けたいものなのだ。

意識を屋外の方へ向けてみる。喧噪の陰にうっすらと、雨が地面を叩いているのが分かる。

レオンはイスから立ち上がった。

「僕も手伝います。忙しそうだし」

ベティは少しだけ瞳を大きくしたが、すぐに可笑しそうに笑った。「あんまり手伝ってばかりいると、本当にうちの店員になるよー」

冒険者を目指している身としては笑えない冗談だったが、お世話になっている身分でもあるから、何もしないわけにはいかない。それに、レオンには別の目的もある。

「大丈夫です。それに、やっぱり聞いておきたいので」

その言葉に、ベティは少しだけ笑みを引っ込めた。

「聞いても無駄だと思うよ。みんなベテランだと思うし」

「ダメもとですから。どちらにしても、手伝いますよ」

そういうわけで、レオンは酒場の仕事を手伝った。

手伝うと言っても、出来た料理を運んだだけである。これまでも、特に忙しそうな時は手伝う事があった。元々、接客するのは店長とその娘の2人だけ。たまにベティがいらない事もあるくらい、要は、あまり忙しくない酒場なのだ。

それでも、今日のような雨の日は、普段より忙しい傾向があるようだ。もっとも、店員はそれを気にする様子はない。注文が遅れるのはおろか、たまに注文を忘れている事もあるくらい、良く言えばおおらかな、悪く言えば仕事がぞんざいな店なのだ。どこで忙しくするかを自分達で選んでいるとも言える。

だから、別にレオンが手伝わなくても、ガレットとベティが困る事はない。だが、お客の方から無言の圧力がかかっているような気がして、どうにも落ち着かない。じっとしているよりも、働いている方が、ずっと気が楽なのだ。

それに、レオンにとって、他の冒険者と接触する事には大きな意味がある。特に、今日は雨の為かお客さんが多い。いつもよりわずかながら期待が大きかった。

その期待も、見事に砕け散ったわけだが。

数十分後には、落胆した表情でカウンターに突っ伏しているレオンの姿があった。

「だから、無駄だって言ったのにー」

隣に座るベティがこちらを見もせずと言う。彼女の手には、レオンが挑戦中だった錠前と解錠ツールがあった。錠穴に針金を突っ込んでカチャカチャと動かしているが、恐らく適当にいじっているだけだろう。

「いいんです。僕が諦めきれないだけなので・・・」

力なくそう言うと、そこでカウンター奥の扉からガレットさんが出てくる。昼食後の片づけが一段落したのだろう。相変わらずの山男の様な肉体の上に厳めしい顔が乗っているが、その表情もどこか

困っているように見える。

カウンター内のイスに腰掛けるなり、彼はレオンに言葉をかける。

「無駄だと言ってるだろうが」

数秒前に聞いた台詞だった。

「・・・ガレットさん、ベティさんと同じ事言ってます」

気まずそうな父親に対して、娘の方はくすくすと笑っている。

咳払いしてから、ガレットは諭すように言った。

「だがな。無駄なのは確かなんだよ。今この店にいる連中は、とうの昔に見習い冒険者を卒業して、魂の試練場どころか、この町の外れにある、20階層は下らねえって噂のダンジョンに挑戦しようって奴らばかりだ。そんな奴らにお前みたいなひよっこか混じったところで、最初のモンスターの餌になるのがオチだ。間違っても何かの役に立つわけがねえし、いたら邪魔なだけなんだよ。一時的にでもパーティを組んでやるなんて奴がいたら、そいつはよっぽどの大馬鹿か、妙な下心があるかのどちらかだ。この酒場内にそんな奴がいたら、今頃俺が直々に、そいつが正気かどうか確かめてるだろうよ」

「それは分かってはいるんですけど・・・」

ベティがそこで割り込んだ。声色を変えて、尊大な口調で言う。

「分かっているなら、つべこべ言わずに、とにかく実力をつける事だな。そうすりゃあ、仲間なんざ自然とついてくる。とにかく食べ！そして鍛えろ！身体が弱い奴は冒険者とは言えねえぞ！」

最近の彼女のマイブームなのか、父親の物真似である。気のせいか、前よりも完成度が高い。

そこで本人が低い声で娘をたしなめる。

「ベティ。今、真面目な話をしてんだよ」

だが、素直に引き下がるベティではなかった。錠前をいじりながらではあるが。

「真面目に言わせて貰うなら、お父さんにも責任あると思うなー。レオンの前に来た見習いを残らず追い返したのはお父さんでしょー

？」

ガレットは片眉を上げた。

「何でそれが関係あるんだ？」

「もし追いついてなかったら、レオンの仲間だったかもしれないじゃない？」

「そりゃそうだが、あれはもう去年の秋だろうが。もう半年になる。仮にまともな奴だったとしても、レオンとはもう実力差が出来ちまってるだろうよ」

そこでレオンは顔を上げた。

「という事は・・・もしかして、今年来たのは、僕が初めてなんですか？」

自分の前に来た見習いが去年の秋ということは、冬になって、年を越してから来た人間はいないという事になる。

ガレットはどこか遠い目をして言った。

「そうだな・・・よく考えりゃ、早いとは思ってたんだよな」

「え？何がですか？」

答えたのは、隣のベティだった。

「レオンが来たのって、山奥の方からでしょ？」

「え・・・あ、はい。そうですね？」

「だからまあ分かるんだよね。冬が終わったっていうのが。だけど、低地から来る人達は、いつ冬が終わったかなんて知らないから、もうちょっと暖かくならないと来ないんだよね。まだこの辺りは雪が積もってると思うてる人もいるんだってさー。特に、遠い所から来ようって人は尚更分からないから、この時期に来る人はあんまりいないんだよ」

移動するにしろ訓練するにしろ、選べるのなら雪がない方がいい。この店にいる人達が、雨が降っていない方がいいと考えるのと同じである。ずっと山奥で過ごしてきたレオンにとって、低地との季節のギャップに驚くばかりだが、その考え自体はもちろん理解出来るものだった。レオンだって、山を降りる為に春になるのを待ってい

たくりなのだ。若干フライング気味ではあったけれど、それは、たまたま行商の人が村に来ていて、親切にも乗せてくれたからである。

「ということは、見習い冒険者が来るのは、これからが本番って事ですか？」

それならば、これから仲間が見つかる可能性だってある。

酒場の父娘は、2人ともこちらを見ないままに、同時に答えた。

「俺の目に適う奴だったらな」

「お父さんに追いつかれなかったらね」
全く同じ意見。

父娘は一瞬だけ視線を交わしたが、すぐに目を逸らした。仲がいいのか悪いのか、よく分からない。

それは置いておく事にして、レオンはこれからこの町にやってくる見習い冒険者の事を考えてみる。自分と同じようにまずギルドに行き、そしてこの酒場まで来て面接される。だが、レオンにしてみれば、それは何の障害でもない。なにせ、自分だって大丈夫だったのである。これ以上低いハードルはないとすら思える。

「それなら、焦る事はないですね」

その言葉が、まさにレオンの結論だった。

いつの間にか笑顔になっている見習い冒険者を見て、酒場の父娘は顔を見合わせた。どこでそんな結論になったのかは分からないが、問題はなさそうだし、別にいいか。そんなお互いの考えを確かめ合ったのだろう。今度もやはり、視線を交わしていたのは一瞬だけである。

「まあ、そうだな。せいぜい頑張れー」

またベティによる口真似である。そう言いながら、いじっていた錠前とツールをレオンの前に置いた。もちろん、解錠出来ていない。ガレットは、そんな娘に冷ややかな視線を送っている。

「頑張ります」

レオンはそれを手に取る。これを解錠するのが、今日の目標だっ

た。

「でもさー、レオンは一体何を目指してるわけ？今やってる事といえば、食べて身体を鍛えて、泥棒の訓練をしてるだけでしょ？」

言い方は良くないが、内容は概ね間違っていない。

「ええ、まあ・・・泥棒に師事しているわけじゃないですけど」

「もっと武器の訓練とかしなくていいのー？」

「してまずけど・・・あんまり深く聞かないで下さい」

聞かれると、お嬢様であるデイジーの隠された一面に触れなければならぬ。もちろんベティは既に知っているだろうが、なんとなく、口ににくい事柄なのだ。

「武器はスローイングダガーとショートソード。盾がバックラー。

まあ、ある意味でオーソドックスではあるな。初心者向きの装備じゃねえが」

ガレットがレオンの身体を見ながら言った。彼が口にした装備を、レオンは今も身につけているのである。重さに慣れるためだが、防犯の意味合いも強い。部屋に置いておいて、なくなっていたら困る。「威力なさそうな装備だよなー。ハンマーとかにした方がいいんじゃない？」

「・・・ベティさんはハンマー好きですよーね」

「武器ならなんでも好きだよー」

「・・・ですよーね」

あまり聞きたくない話である。

「というか、その鍵にしたって、そんなちまちまするより、扉を壊した方が早いんじゃない？」

ベティがレオンの手の中にある物を見ながら言う。確かに、ニコルも同じような事を言っていた。

「そうですね、鉄製の扉とかだったら、壊せないかもしれないですよー」

「そっちだって、鍵穴がなかったら手も足も出ないわけでしょ？」

「ですね・・・両方出来るのが一番いいんでしょうけど」

「そういえば、レオンは罨の解除とかは習ってないの？」

レオンの手が止まった。

「・・・罨って解除出来るんですか？」

真顔で聞くと、ベティはこちらの顔を見たまま停止した。それを見て、そうやら常識だったらしいという事を思い知る。この町に来てからというものの、自分が世間知らずであるという事を思い知らされる事が多々あった。

だが、さすがと言うべきか、ガレットさんは、口元に余裕の笑みを浮かべていた。

「罨の解除は素人には荷が重い。身に付くまで結構時間がかかるんだよ。だから、とりあえずって事で、先に鍵の解錠から教えてるんだろうよ。鍵はコツさえ掴めれば簡単だし、レオンみたいに、力も魔法もない人間には必要な技術だ。それに、罨の方は解除しなくてもなんとかなる場合も多いからな」

「なんとかなるんですか？」

レオンはすぐに聞いた。これからダンジョンに挑戦する身なのだ。知っておける事ならば何でも知っておきたい。

ガレットは笑みを浮かべたまま答える。

「とりあえず、最低でも、罨に気づけねえと話にならねえけどな。だが、気づいたならまず、その場所を通らねえってのがひとつ。だが、どうしても通らざるを得ないって場合もある。その場合一番簡単なのは、わざとひっかかるって事だ」

首を捻る。

「・・・ひっかかったらまずくないですか？」

「お前自身がひっかかるんじゃないかねえ。例えば床を踏んで発動するような罨だったら、そこに重い物を投げてみるとか、扉に触れたら危なそうだったら、遠くから弓矢で射るとか、要は、罨が発動しても安全な場所にいるって事だな。具体的には、なるべく遠くから発動させるんだ。罨が解除出来ない人間は、大抵そういう手を使ってる」

「へえ・・・」

いちいち感心しているレオンに、ガレットは不思議そうな顔で聞いた。

「とういか、お前、元狩人なんだろう？ 罾とか使った事あるんじゃないのか？」

「え？・・・いや、あんまり」

実際、レオンの父親はほとんど罾という物を使わなかった。だから、レオンもそれが普通の狩人だと思っていたのだ。

レオンはそこで重要な事を思い出した。

「あ・・・」

思わず発してしまった声に、ベティが食いついてくる。

「どうしたの？」

「はい、まあ・・・」

正直、忘れていた自分がなんとも情けない。自分で自分に呆れたが、それはともかく、今思い出せたのだから、忘れないうちに言うておかなければいけない。

「ベティさん。ちょっと頼みがあるんですけど」

彼女は真顔で言った。

「寝室に罾を仕掛けて欲しいとかー？」

もし頼んだら、命に関わる罾を用意されそうな気がする。

レオンはなんとか平静さを保ちながら、真面目に答えた。

「違います。あの、アレンさんから聞いたんですけど、ベティさんも狩人なんですよね？」

ベティは一度瞳を瞬かせてから、軽く頷いた。

「そうそう。それがどうしたのー？」

「アレンさんが言うには、ベティさんの師匠のホレスさんって人が、凄腕の狩人だとか」

「うん。何？もしかして、決闘してみたいとか？」

この少女の頭の中は、やはり偏っているようだった。

「そうじゃないです。僕の戦い方の参考になるんじゃないかって言われたので、出来たら会って話をしてみたいんですけど、僕でも会

って貰えるでしょうか？」

「レオンの戦い方？ うーん・・・」

いつも即断即決のベティにしては珍しく、何かを思案している様子だった。

「あの・・・無理にとは言いませんけど」

ベティはそこで腕を組んで、少し首を傾げる。

「会うのは簡単なんだけどねー。ただ、レオンの参考にはならないかもよ？」

「え？ そうなんですか？」

「とりあえず、ホレスは剣を使えないと思うし」

予想外の情報である。どんな武器でも使いこなせるような猛者を想像していたのだが。

「使えないんですか？」

「使えないと思うなー。ホレスっていえば、とりあえず弓なんだよね。あと、笛」

2番目が既に武器ではない。いくつもの武器を使いこなすのが理想とされた自分とはかけ離れたスタイルに思える。

レオンが首を捻っていると、ベティが笑顔に戻って屈託なく聞いてくる。

「どうするー？ とりあえず、弓の腕だけは確かだけど」

「弓の腕・・・」

戦闘スタイルはともかく、弓もいずれは練習しなければならない。それならば、アドバイスのひとつも欲しいところだが、まだ弓は素人同然の自分が突然行ったら、迷惑ではないだろうか。

そこでガレットさんの一押しがあった。

「どうした？ とにかく行ってみろ！ ひよっこが遠慮するもんじゃねえぞ！」

レオンは頷いて、ベティに向き直る。

「迷惑じゃなかったらですけど、今度ホレスさんに会わせて貰えないですか？」

彼女はあっさり頷いた。

「いいよー。今から行く？」

なんというか、本当に躊躇しない女の子なのだ。

「今からはちよつと・・・」

反射的にそう言ったレオンに、ベティが少し笑った。

「雨降ってるしねー。じゃあ、明日？」

「そ、そうですね。明日晴れてたら」

「りょーかい。というわけで、お父さん明日休んでいい？」

その言葉に、レオンは自ずと気付かされた。

「あ、すみません・・・お店が忙しい時に」

だが、ガレットは笑って答える。

「さっきも言っただろ？ ひよつこが気にするんじゃないやねえ！ 分かったか！？」

「は、はい！」

その返事に一笑を返して、今度は娘の方に視線を移す。若干眼が据わっていた。

「ベティ。いい機会だ。この間のけりをつけてこい！」

「はい」

返事はこれ以上ないくらい軽い。

何事もなく話がまとまったようだが、当然と言うべきか、レオンは気になった。

「・・・この間のけりっていうのは何ですか？」

父娘はまた視線を通わす。また何らかの意志疎通があったようだ。

「まあ、来たら分かるよー」

ベティは自然にそう言ったものの、ガレットは、こちらから目を逸らして何も言わなかった。何か後ろ暗い事があるのだろうか。それにしたって、滅多にない振る舞いである。

あからさまに様子がおかしい。

「・・・何か隠してませんか？」

「そうだ。レオンってさあ・・・」

ベティの言葉は続かない。無理矢理話題を変えようとしているのが明らかである。

「・・・絶対隠してますよね？」

「隠す程の事じゃないよー」

「だったら話して下さい」

「でも・・・」

そこでちらっと、父親の方を見た。また例の意志交換である。

ベティの表情に陰が差す。

「・・・聞いたら、レオンはどうなるかな」

声のトーンが暗い。いつも明るいだけに、より顕著に感じられた。よく分からない。分からないけれど、レオンは閃いた。

罨かもしれない。罨というか、深入りしたら危ない。

避けよう。

そういう判断が、瞬時に採択された。

「そ、そういうえば、ホレスさんってどんな人なんですか？会う前に、少し聞いておいた方がいいですよね！」

必死の話題転換である。自分でも分かるくらい、不自然に明るい。だが、とりあえず罨は避けられたようだった。ベティが元の笑顔に戻る。

「ホレスはまあ、変わり者だよな。でも、私は好きだなー」

なんとも軽い好きだった。少なくとも、レオンが慌てないで済むくらいの軽さである。

「そうなんですか。良い人って事ですよね」

「そうだねー。あと、さっきも言ったけど、弓と笛が上手」

「弓はもちろんですけど、笛も教わってみたいですね」

「そっかー」

ベティにしては短い台詞だった。

彼女は、しきりに首を捻っている。

「・・・どうかしました？」

「うーん・・・なんか、まとまらないよね」

「何ですか？」

「笛が上手で、鍵開けも上手い。なんだそれーって言われそう」
悲しい事に、自分でもそう思った。

「・・・とりあえず、弓の方を優先で」

なるほど。戦闘系がないとしまらないものだな。

その日最後に得たのは、そんなどうでもいい教訓だった。

ファースト・エンカウント

自治都市ユースアイは、レオンの故郷の村程ではないものの、十分に丘陵地と言える場所にある。

レオンには低地でも、一般的な感覚からすれば高地。夏には避暑地として観光に来る人もいるらしい。周囲はなだらかな平原が広がっているし、未踏破ダンジョンとも距離があるから、モンスターがうろついている事もほとんどない。北から西にかけては大山脈の一角が占めていて、そこで育まれた大自然の実りと、天然の防衛網の恩恵を得ている。少し東に外れた場所には、大きな湖があって、景観はもとより、水資源の宝庫でもあるらしい。ただ、春や秋には、湖に流れ込む川が氾濫する事が多々あるらしく、それを避ける為に、少し離れた今の位置に町が形成されたという事だった。

まだこの町に来て2週間程だが、住みやすい町だと思った最初の印象は揺らぐどころか、疑いような確信となっている。自然環境に恵まれた町なのは間違いないし、そこで生活する人々も、その豊かさを象徴するように、気質が穏やかな人が多い。レオンの村の人々も気性が荒いわけではないのだが、やはり育った環境そのままに、厳格で逞しい人が多かった。そんな中でも、レオンの家族は例外で、よくぼんやりしていると言われたものだが、この町ではそれほど浮いているわけではない。もちろん、田舎者で世間知らずなのは否めないけれど。

そんな穏やかな町だから、防衛の為の施設がほとんどない。せいぜい獣がやってくる程度の事しかないのだろう。町の周囲には簡単な木製の堀があるだけ。門には警備の人間が一応立っているが、申し訳程度に槍を立てかけているだけである。訓練所のアレンさんが警備と教師を掛け持ちしているのも、きっと警備だけだと暇過ぎるからだろう。言わば、警備員というかボランティアの自警団なのだ。

そのボランティアの警備員に、隣を歩くベティは慣れた様子で声をかける。普段は雑貨屋で働いていそうな、荒事とは無縁そうなお兄さんである。もしかしたら、一番重要な仕事は、ここを出入りした人間を覚えておく事なのかもしれない。腕っ節はともかく、記憶力ならば期待出来そうだった。

レオンとベティは、並んでユースアイから出て行くところだった。方角は西。畑や放牧地の横を抜けながら、短い草の生えた道を歩く。昨日は雨が降ったが、歩きにくいほどはぬかるんでいない。近くには木々がほとんどない為、これ以上ないくらい見晴らしがよかった。

右手には険しい山々。まだほんの少し雪が残っているようだ。

左手には平原が続く。それが途切れた先には山々が見えるが、あまり高いようには見えない。もしかしたら、レオン達が立っているこの場所の方が高いのかもしれない。

2人の目的地は、この町の郊外にあるというウイスキーの蒸留所だった。元々は、ベティの母親の両親の物だったらしいが、今管理しているのはベティの父親のガレットである。

「そういえば、どうしてわざわざ町の外に作ったんですか？」

急に思いついたので、レオンは聞いてみる事にした。

ベティがこちらを向く。いつものブラウンの瞳とポニーテール姿だが、今日はエプロンではなく、シャツの上に長袖の上着、そして薄汚れたズボンを履いている。完全に作業用のファッションだった。そして、背中に矢が詰まった矢筒を引っかけている。弓がないから危険はないはずだが、彼女が持っている、なんとなく不安になる。かく言うレオンも、同じ物を背負わされていた。結構重いが、苦になる程ではない。

「水がどうか、湿度がどうか、要はそういう事らしいよ。こだわりの銘酒なんだって」

「なるほど・・・」

レオンは頷く。場所にまでこだわって、味を追求したという事だ

ろう。

「一応、ちょっとしたブランドらしいよ。少しだけだけど、遠くからも取り寄せの注文があるくらいだから」

彼女はいつもの口調だったが、恐らく、そんなにありふれた事ではないはずだ。

「・・・あの、それって凄い事だと思うんですけど」

その言葉にも、ベティは少し首を傾げるだけだった。

「そう？でも、私は小さい頃から飲んでるから」

小さい頃からというのも極端な話だが、何を隠そう、レオンも小さい頃からアルコールを飲んでいた。お湯で何倍にも薄めた物だが、極寒の冬を越す為の生活の知恵である。

「そうですか・・・さすが酒場の娘という感じですね」

「そうだねー。お陰で今だと何杯飲んでも平気だよ」

「・・・あの、子供の頃からっていうのは、もしかして、薄めないで飲んでたんですか？」

ベティは当然といった様子で頷く。

「当たり前でしょー？もしかして、レオンはお酒だめなの？」

「アルコールに強い弱いはともかくとして、ユースアイには飲酒の年齢制限はないんですか？」

ちなみに、レオンの村にはなかった。だけど、普通はあるものだと聞いていたのだ。

「あるよー」

「あるよーって・・・いくつからですか？」

「16歳以上」

「・・・ベティさんの小さい頃っていうのは、もちろん16歳未満ですよ？」

「そうそう」

「それって・・・どう考えても法律違反じゃないですか？」

そこでベティは微笑む。微笑みというには、邪過ぎる表情だった。

「ばれたらしょうがないよねー」

「いや、しょうがないって・・・」

たじろぐレオンだったが、ベティはすぐに表情を緩めた。

「まあ、本当の事を言うと、法律違反じゃないんだよ」

「え？ そうなんですか？」

ベティは得意げに頷く。だけど、すぐに少しだけ目を細めた。

「私が子供の頃にはね、私のお母さんのお父さん、つまりお祖父さんがまだ生きてたんだ。そのお祖父さんがウイスキーづくりを始めた人なんだけど、よく仕事場まで遊びに行ってたんだ。それで、まあ、お祖父さんは優しい人だったんだけど・・・なんていうのかな、押しに弱い人だったんだよね。孫が可愛かったんだと思うけど」

レオンには、おぼろげながらも話の展開がよめた。

「まさか・・・ウイスキーを飲ませて欲しいって言ったんですか？」

頼む方も頼む方だが、飲ませる方も飲ませる方である。

「そうなんだー。あの時のウイスキーは美味しかったな・・・きつと、孫娘への愛情がたっぷり詰まっていたからだよね」

美談みたいな言い方だったが、もちろんそんなわけがない。

「あの、ベティさん」

「何？」

「結局、16歳未満でお酒を飲んでるわけですから、法律違反ですよね・・・？」

ベティは右手の人差し指を立てて軽く振る。

「それが違うんだよ。私がお酒を飲んだのは、蒸留所の中でしょ？」

「・・・それがどうかしたんですか？」

「あそこはユースアイの法律の適応外なんだよ」

それだけ言われても、レオンにはさっぱりである。

「・・・えっと、すみません。もう少し詳しくお願いします」

「うーん、私もあんまり詳しくないんだけど」

「そこをなんとか」

「じゃあ、だいたいでいくねー」

彼女は右手の人差し指をくるくる回し始める。何の意味があるのかはよく分からない。

「自治都市ってだいたいのは自分で決められるんだけど、一部だけ、国に認可して貰わないと作れない物があるんだって。たぶん、鉱山とか河川の開発とか、要は資源系だと思うけど」

「へえ・・・」

話が大き過ぎるので実感がわかないが、そういうものなのかもしれない。

「だけど、どういうわけか、お酒に関する施設も国の認可がいるんだよ。なんか、大昔にお酒が原因で争いみたいのがあったらしくて、今の国になってからも、お酒に関する事は徹底しようって事になったんだって。歴史に学んだって事だと思うけど・・・あ、歴史の話ならデイジーが詳しいから、興味があったら聞いてみたら？」

「えっと・・・あ、はい。機会があったら」

正直、興味云々の前に、お酒で争いが起きたという史実を想像するのすら難しい。どんな状況になったら、お酒程度の事で、そんな深刻な事態になるのだろうか。

ベティは、回していた指を下ろして、話を続ける。

「そういうわけで、お酒関連の施設は全部国の管理下にあるって事になってるんだよね。だから、自治都市の管理内でも、蒸留所内は国の法律優先なんだ。それで、この辺りは、国の区分では寒冷地って事になってるんだよ。そして、もっと寒い山奥の方では、冬場に身体を温める為に子供にもアルコールを与える習慣があるから、寒冷地には特例が適応されてるんだって。レオンの村でも、普通に子供の時からアルコール飲んでたでしょ？」

「あ、はい」

「国の区分だと、ユースアイもレオンの村と同じって事になってるんだよねー。まあ、低地の人から見たら一緒なのかもしれないけど、ユースアイは結構新しい町だし、低地から来た人も多いからそんな習慣はないんだ。だから、ユースアイの法律では普通に16歳まで

飲酒禁止。それなのに、蒸留所内は国の寒冷地特例で飲んでもよし。うん、不思議だねー」

「なるほど・・・」

要は、蒸留所内は法律上ユースアイではないという事らしい。なんとなく屁理屈のような気もするが、レオンも同じ寒冷地特例の恩恵を受けていたわけだから、人の事をとやかく言う筋合いはない。

ただ、一応一言だけ言っておこうと思った。

「それは分かりましたけど、ベティさん」

「何ー？」

「子供がウイスキーをストレートで飲むのはまずいと思いますよ・・・下手すると倒れるだけでは済みませんから」

ウイスキーはアルコール度数が40を超えるものも珍しくないのだ。大人でも危険な状態になる事もあるくらいだから、身体の小さい子供は尚更である。

ベティは楽しそうに言った。

「飲んだって言っても、ちょっとだけだし。でも、あれで味を覚えたのは確かだよね」

「・・・お祖父さんはとんでもない事を覚えさせましたね」

「何？もしかしてレオンはお酒ダメな人？」

「いえ、飲めない事はないですけど」

「そっかー。じゃあ、レオンが初めてダンジョンクリア出来たら、祝杯だねー」

嫌な予感しかしない提案だった。

「祝杯って、あの、僕は別に・・・」

「我ながらいい事思いついたなー。どうせなら、みんな呼ぼうか。うんうん。みんなお酒強いからね。きっと凄い事になるよー」

「なるよーって・・・」

凄い事ってどんな事だろうか。とりあえず気になったのは、血を見る事になるのかという事。そして、ならないまでも、怪我をしないうで済むだろうかという事だった。ベティとガレットがいるだけで、

半ば予想が出来る事だったが。

本当に凄い事になるかもしれない。凄惨という意味で。

「・・・とりあえず、魂の試練場のクリアまでとっておいて貰えませんか？」

レオンは控えめに、そう口にした。

その言葉を言い終えた、その時だった。

何の前触れもなく、その音は聞こえた。

最初は、どこか遠くで雪崩が起きたのだろうかと思った。腹に直接響くような低い音。山の唸り声の様だった。

レオンとベティは立ち止まる。

2人がいるのは、ユースアイからかなり離れた場所である。町はだいぶ後方に見える。周囲にはもう畑等はなく、ただ丈の低い草地が広がるだけである。元々、こちら側には農地が少ないのかもしれない。

見晴らしだけは抜群にいい。

「・・・獣の声だった？」

ベティがこちらを見て聞く。いつもの彼女の笑顔はなりを潜めていて、どこことなく不安げな表情だった。

それを見て、レオンは自分の表情を認識した。

見た人が不安になるくらい、怖い顔をしていたんだ。

「いや・・・」

笑おうとは思えなかった。狩人生活の長かったレオンにははつきりと分かったからである。

あれは獣の声じゃない。あんな声で鳴く獣は、あの山にはいない。

そうになると、他に考えられる可能性は、そう多くはない。

そこでまた、地響きの様な音が聞こえる。

レオンは驚いた。

とんでもなく近い。

そして、音はすぐに終わらなかった。

どんどん近づいてくる。

黙ったまま、ベティの腕を左手で掴んだ。

「え？何？ちよっと・・・」

少女の狼狽えた声に構わず、レオンは体勢を低くする。ベティに背を向けて、右手を短剣の柄に持っていた。

近づいてくる地響き。そして振動がはつきりと伝わってくる。

まさかとは思った。だけど、もう疑いようがない。

何か地中にいる。

しかも、かなり大きいやつが。

あと数秒もすれば、ここに到達するだろう。

武器はある。だけど、鎧がない。戦えるだろうか。

だが、レオンの決断は早かった。

「逃げて」

自分だろうかと思ふくらい無機質な声だった。同時に、背負っていた矢筒を地面に放り出す。

「え？」

背後の彼女が戸惑っているのが分かる。だけど、もう待っていない。彼女が自分から離れた。

レオンは左手でベティの身体を突き飛ばした。彼女の身体が自分から離れる。

「逃げて！ベティ！」

その声のわずか後。

自分の二の腕くらいはあろうかという程の太さの針が、突如地面から飛び出して来る。

レオンの顔めがけて。

咄嗟に右後方に倒れ込む。避けたつもりだったが、もしかしたら腰が抜けたのかもしれない。だが、すぐに左手について反動で立ち上がった。体勢を整えながら、周囲を観察する。

そこで見てしまった。

針だと思ったのはほんの一部で、実際には黒い木の幹の様な物の先に、同じ黒い針が付いていただけである。針自体はそれほど太く

ないが、それでも槍の穂先くらいはあった。その針を操る黒い幹は怪しく蠢いている。

それだけでも十分気色悪いが、それに拍車をかけるものがあった。目玉。

そうとしか例えようのないものが、地面から顔を出しているのだ。生えていると言った方がいいかもしれない。

その周囲は地面がめくれてしまっていて、幸か不幸か、目玉の動きがよく分かる。キョロキョロと辺りを観察しているようだ。大きさは人間の物どころではなく、明らかにどの生物のものより大きい。生物ではないのだ。

いつか戦う事になるはずだった。その時に緊張しないように、あるいは恐れないように、心の準備をしていたはずだった。その成果なのかは分からないが、とりあえず、緊張も恐怖もそれほどではない。だからといって、もちろん嬉しいわけではない。

まさか、こんな所で会うなんて。

目玉の周囲の地面が崩れていく。

地震のような地響き。

やがて、地中からせり上がるようにして、それは全貌を表した。

サソリという虫によく似ていた。同じ様な地を這う体勢に、大きな鉗状の前脚。長い尻尾の先には鋭そうな針。ただ違うのは、その大きさが、高さで2メートル、全長は尻尾を入れれば軽く5メートルを超すくらいはあるという事。鉗以外の脚が4本しかない事。

そして、通常なら顔にあたる部分に、大きな目玉がひとつだけしかない事。

見たらもう疑いようがない。こんな生物はいない。

間違はなく、モンスターだった。

レオンは右手にスローイングダガーを握る。左手にも握っておくが、投げるのは無理だ。投擲には相当な技術が必要で、レオンはまだ右手でしか投げられない。左手に持っていても、持ち替えの時間

を短縮する程度の意味しかない。

武器はダガーが3本とショートソード。これ以外には何も準備していない。

その一本目のダガーをレオンはいきなり投擲した。

狙いは目玉。一番弱そうな部位だったからである。

だが、サソリ型のモンスターは、あっさりと左の鋏でそれが弾いた。機敏かつ的確な動き。

巨体に似合わないその動きに驚きつつも、早くも困り果てた。

自分の装備があまりにも少な過ぎるのだ。もっと武器や道具があれば工夫しようがあるが、それもない。近づこうにも、鎧がないから強気には出られない。かといって、弓もないから遠距離だと決定打がない。投擲程度の速度だと見切られてしまうのだ。

隙をつくしかない。

2本目のダガーを腰から抜こうと思った時だった。

目玉の周りで紫の光が軌跡を描く。

信じられなかった。

幼い頃に、母親に一度だけ見せて貰った事があった。あの時は青白い光だったが、今のも間違いない。

魔法だ。

そう気付いた時には遅かった。

球形だったモンスターの目玉の輪郭が突如歪む。

直後、レオンの身体はバランスを崩しそうになる。

音は普通に聞こえる。だけど、視界がおかしい。水の上に垂らした油が広がっていくように、中心から歪んでいく。

魔法の効果だという事には、すぐに気付いた。

もちろん気分は良くない。だけど、目を瞑ったらもっと酷い事になる。

その予感が、レオンの気力を保っていた。

モンスターが近づいてくるのを音で判断する。虫が動き回るような小さな音ではないが、ぬかるんだ地面のせいで、音の大半が吸収

されてしまっているようだ。

何を恐れるべきなのか、向こうの武器で注意すべき物は何なのか、必死に考えた。

尻尾の針だ。

歪んだ視界に黒い面積が増えたとき、咄嗟に身体を右に捌く。視界が曖昧だから、上手く動けたのかよく分からない。

左側で風を切るような音が響く。

上手く避けられたのか。

だが、その一撃で終わりではなかった。

腹部に衝撃。

後方に飛ばされる。地面から足が離れて、宙を浮く程のパワーだった。

地面に倒れ込む。

腹部の痛みに耐えながら、必死に息をした。それと同時に、頼りにならない視界は諦めて、耳の方に神経を注ぐ。

地を引きずる音が近づいてくる。

速い。

勘弁して欲しいと思った。あるいは、諦めて楽になりたいと思ったのかもしれない。何の前触れもなく、アレンの言葉を思い出す。最初は誰でも負けたいと思っている。きっと用法は間違っているけれど、今の自分と少なからず共通点はあるような気がした。

だけど、レオンは諦めない。

それが父からの教えだったから。

自分がとどめを刺す動物達。彼らは最後まで目を逸らしたりはしない。最後までじっとこちらを見ているのだ。

それが生きるという事だ。

父の声が聞こえた気がした。

「レオン！」

ベティの叫ぶような声。

危機感が体中を駆け巡る。

左手を地面に叩きつけ、その反動だけでその場から離れた。わずかに遅れて、地面を抉るような音。

右手について体勢を起こしながら、内心助かったと思った。思わずベティにお礼を言いそうになる。

だけど、いつまで避けていられるだろうか。

この目眩ましの魔法がどれくらい続くものなのか、レオンには判断出来ない。魔法を使った事はおろか、効果を体験したのも今が初めてなのだ。予測なんて出来るわけがない。

モンスターの足音は容赦なく近づいてくる。

諦める気はない。だけど、手が何も思い付かない。

焦りが顔を出す。

だが、突然、モンスターの足音が乱れたような気がした。

レオンは訝しんだ。普通にこちらに迫ってくる感じではない。脚を地面に擦り付けているような、ともすればのたうち回っているような、そんな感じだ。

その時、突然レオンの視界が戻った。何の予兆もなかった為、魔法が切れたのだと気付くのに時間がかかった。

そして、目の前の光景に驚く。

そこにいたのはサソリ型のモンスター。そこまでは当然だが、視界が戻ってみると、それは本当にのたうち回っていた。十分気持ち悪い光景だが、それよりもレオンは、モンスターにも痛覚があるんだなとぼんやりと思った。

痛みの原因。それは、モンスターの目玉を見れば明らかだった。

その中心を、矢が数本も深々と貫いている。

よく見ると、それは今日自分とベティが背負っていた矢にそっくりだった。自分のはとくに放り出してしまったから、もしかしてベティの矢だろうか。

だけど、彼女は弓を持っていなかったはずだ。そう考えながら、レオンはベティを突き飛ばした方へと視線を向ける。

なんだか随分久し振りに見た気がするベティは、今も尻餅をつい

たままの体勢だった。大怪我をしている様子はないので、とりあえず安堵する。彼女の矢筒は背負われたままだ。

彼女は自分とは反対側を見ている。

レオンもそちらを見た。

最初は誰もいないと思った。だが、よく見ると平原の遙か彼方に、馬に乗った人物がいる。

その人物が馬を駆りながら、弓を構えたように見えた、その一瞬後。

感じたのは、視界で捉えきれない程の速度で飛来した何か。

「え？」

思わず声に出るほど驚いた。

モンスターの目玉に刺さった矢がいつの間にか増えている。それを確認している間にも、次々と吸い込まれるように突き刺さっていく。中には、貫通し過ぎて、やじりが見えてしまっているものもあった。

レオンはもう一度馬の位置を確認した。軽く200メートル以上は離れている。あんな距離では、狙いに正確に命中させる事はもちろん、これだけ深々と刺さる勢いが残っている事もあり得ない。ましてや馬を駆りながらとなると、想像も出来ない領域の腕前だ。

だが、状況から考えるとそれしかない。何故なら、他には誰もいないのだから。

目玉を蜂の巣にされたモンスターはほとんど動かなくなった。

やがて、身体中から紫の煙を出したかと思うと、空気に溶け込むように薄くなって、あっという間にその姿を消した。

助かったとは思わなかった。

この信じがたい弓の腕を見せられて、ただ呆然と、何もいなくなったモンスターの跡を眺めていた。

支える瞳

昨日の雨の影響なのか、それともいつもこうなのか、湿っぽい空気が漂う場所だった。

平原にぼつりと建っている、廃屋と呼んでも差し支えない小屋。むしろ、建物というよりも、休憩所と呼んだ方がいかもしれない。誇張でもなんでもなく、四隅の柱に屋根が乗っているだけの建物である。昔はちゃんとした壁があったのかもしれないと想像が出来るくらいには壁らしき物が残っているが、それもほぼ半壊状態。文句なしのオンボロ小屋である。

ただ、そもそも屋根さえあれば十分だったのだろう。その小屋の中心あたりに、岩を加工して作っただけの、地下扉がある。レオン達がいるのはその中だった。

扉と同じ岩で出来た階段を下っていくと、まず事務室らしき部屋にたどり着く。テーブルやイスはもちろん、棚や水道もある。壁も床も石材だから、暖かみも何もないが、不思議と寒くはない。ろうそくの明かりが、厳かで幻想的な雰囲気を出していて、ちょっとした非日常を味わえる不思議な場所だった。どこかで匂った事のあつんとした香りが、うつすらと漂っている。

レオンは、この部屋にひとつしかないイスに座らされて、ベティに傷の手当てを受けているところだった。彼女は狩人だからなのか、なかなか手慣れた様子だった。

「擦り傷とかはともかく、お腹は平気なの？」

右手首に包帯を巻きながら、ベティが聞く。彼女は片膝をついた姿勢だった。その方が巻きやすいのだろうが、自分だけイスに座っているこの状況は、なんだか申し訳ない。

一応、空いている左手で腹部に触れてみる。

「ちよっと変な感じですけど・・・痛くないので、たぶん平気だと

思います」

モンスターの巨大鋏によって、身体が吹き飛ぶくらい殴打された腹部だったが、骨はおろか、内出血している様子もない。違和感があるにはあるが、きつと打撲程度だろう。

その返答に、ベティは少しムツとしたようだった。薄暗い上に陰になっていたので、表情がよく分からない。

「そういうのは危ないと思うなー。町に戻ったら、一応医者に見て貰った方がいいよ」

「え？ いや・・・そんなに大した事ないですよ。寝て起きたら元通りだと思います」

「痛くないって、無理してない？ あんなに吹き飛んでたのに」

「いえ、全然」

「本当？ ちょっと触ってみてもいい？」

「え、あ、はい・・・あの、拳を握るのはやめて下さい」

そう言うと、ベティは笑った。どうやら突っ込み待ちだったらしい。あっさりと拳を引っ込める。

「そう言うベティさんこそ、大丈夫ですか？」

最初に思いつき突き飛ばしてしまったのが、レオンは一番気になっていた。だが、それがなかったとしても、突然モンスターに襲われたわけだから、動揺していてもおかしくない。

「私は平気。レオンのお陰で無傷だったからね」

ベティは明るく答えたものの、少し元気がないような気がした。この場所の雰囲気のせいかもしれないし、自分が心配しているせいかもしれない。だけど、もちろんそれで納得出来るわけがない。

「・・・すみません。僕につき合ってもらったから、酷い目に遭わせてしまった」

後悔の念でいっぱいの子レオンだったが、ベティは優しい表情でそれに応える。

「それって逆だよね」

「え？」

「レオンがいたから助かったよー。ありがとう」

思いも寄らない言葉だった。

自分がここまでの道案内を頼まなければ、彼女が怖い目に遭う事もなかったのに。

「いや、そんな・・・」

ベティはそこで立ち上がって、両手を腰に当てた。顔は優しいままだ。

「分かってないなー。ここまで案内してあげるって、私が請け負ったんだから、レオンが気にする事ないでしょ？それどころか、あんな大きいモンスターを相手に私を守ってくれたんだから、ありがとうっていうのが普通じゃない？」

「守ったっていうか・・・あんまり守れてませんでしたけど」
事実、自分だけだったら完敗だっただろう。

ベティはそこにやりと笑う。

「そうだねー。レオン、あんまり強くなかったね」

「・・・ですよね」

武器や鎧がなかったとは言える。だけど、それは言い訳というものだろう。準備万端だったとしても、あの目眩ましの魔法を使われたら、負けていた可能性が高い。

がっくり肩を落とすレオンに、ベティは顔を近づける。

「でも、格好良かったよ」

思わずドキッとするような大人びた声が、耳元で囁かれる。

当然というべきか、レオンはこれ以上ないくらい慌てふためいた。
元々バランスの悪かったイスごと、後ろに倒れ込む。

そんな過剰反応に栗色の瞳を大きくしたベティだったが、すぐに笑顔に戻る。

「ダメだなー。こっちは全然免疫出来ないねー」

「・・・お願いですから、僕で遊ばないで下さい」

身体とイスを起こしながらレオンが言った。とにかく心臓に悪過ぎる。目眩ましの魔法なら視界だけで済むが、こちらは思考が止ま

るからもつと質が悪い。

ベティは悪びれる様子もなく微笑んだままだった。

「いいでしょー？だって、格好良かったのは本当だし」

「格好良くないですよ。というか、格好良かったとしても普通に言っただけ」

「さっきのは普通だと思うなー。なんなら、普通じゃない方を聞いてみる？」

「・・・すみません。さっきのが普通でした」

レオンはすぐに折れた。これ以上の衝撃は心臓が保たない。

それで満足したのか、ベティは一息吐いて、この部屋唯一の木製の扉の方を見る。その扉の向こうにある物が、この地下空間で最も重要な物なのだ。

即ち、ウイスキーの蒸留所。

「それじゃあ、治療も済んだし、ホレスに挨拶しよっかー」

「あ、そうですね。さっきのお礼もしないといけないし」

レオンは立ち上がりながら同意する。

その言葉を聞くと、ベティは何も躊躇せずにその扉の方に向かう。彼女は子供の頃からここに出入りしているのだ。十分に勝手知ったる場所だと言えるだろう。

彼女の後ろに、レオンも続く。

木の扉の向こうに入ると、そこはまさに酒蔵といった様相だった。先ほどまでいた事務室らしき場所もそこその広さがあった。生活しやすいかはともかくとして、広さだけなら十分一人暮らし出来る程である。だが、こちらの酒蔵の方を見ると、それも氷山の一角だった事が分かる。

とにかく目に入るのは、棚によって綺麗に整列された酒樽の山だった。人1人が入れるくらいの大きさの樽が、横倒しの状態で所狭しと並べられているのだ。他にも、蒸留用の道具なのか、巨大な木製の器具や箱が積み上げられているが、それすらもほんの一部。とにかく酒樽だけで、ニコルのガレージはおろか、もしかしたら、ガ

レット酒場くらいのスペースは占拠されているかもしれない。もちろん、高さは一階分程度しかないのだが、広さは相当な規模のものだ。

その酒樽を収納している棚。それによって通路が仕切られているようなものだが、扉のすぐ正面の通路の奥に、1人の男が壁にもたれて座り込んでいる。どちらかというと、しなだれかかっているという感じかもしれない。足を投げ出して、どこか気の抜けた感じでぼんやりと近くの酒樽を眺めているように見える。

正直、レオンには違和感があり過ぎた。さっきの神業の射手はどこに行ったのか。もしかして双子の別人だろうか。

一応周囲を見渡してみる。もちろん、視界のほとんどは酒樽によって遮られているのだが、他の人の気配はなさそうだった。

そんなレオンをさし置いて、ベティはさっさとその男性の方へ歩いていく。しばらくしてからそれに気付いて、レオンもその後が続いた。

たどり着くまでの十数秒間。男は微動だにしなかった。

「ホレス。さっきはありがとう」

ベティが抑えめの声で言う。

その声に、ようやくその男はこちらを向いた。

なんというか、恐らく中肉中背の人なのだ。むしろ、少し上背があるから、体格的には恵まれているはずである。だけど、どこことなく彼が貧相に見えてしまうのは、ボサボサの髪と、年季が入り過ぎている服装、そして、まるで魂が抜けてしまったかのような、無造作な座り方のせいに違いなかった。

そんな彼の唯一の明るさ。それは間違いなく彼の瞳だった。

髪に半分隠れているが、確かに彼の瞳は、右目だけエメラルドのような碧色。左目はベティと同じブラウンの瞳。

瞳の色が左右で違う人がまれにいるとは聞いていたが、実際に見るのはこれが初めてだった。

「気にするな」

ぶっきらぼうな声だった。不機嫌なのか、それともこれで普通なのか、レオンには判別しかねるところである。

ベティはそんな口調にも構わず、親しげに会話を続ける。

「気にするなって言われても、気にすると思わない？ ねえ、お礼は何がいい？」

「礼なんかされたら困る」

「別に困らないでしょー？ キスくらいでいい？」

一番動揺したのはレオンだっただろう。言われたホレスの方は無表情そのものだった。

「安売りするものじゃない」

「安売りじゃないでしょー？ だって、命の恩人なんだし」

「命の恩人なら、そっちの彼の方だ。お礼なら彼にしたらどうだ？」
とんでもない提案だった。

密かに、いつでも逃げ出せるように準備していたレオンだったが、ベティはこちらを振り向きもしなかった。それどころか、どこか不満そうな口調になる。

「ホレスは、私がレオンにキスしてもいいわけ？」

「ベティの自由だ」

「何それー？ 私のフィアンセでしょー？」

さすがに、レオンはその言葉を無視出来なかった。

「あの一・・・」

ベティとホレスがレオンの方を向く。

「・・・今、フィアンセって言いました？」

「うん」

あっさりと頷くベティ。

レオンの頭の中では、なぜかフィアンセという言葉の定義を確認する作業が始まっていた。もしかしたら、婚約者という以外の意味もあったかもしれない。それどころか、もしかして、婚約者という意味だと思っていたのは自分の勘違いだったかもしれないと、そんな意味不明な疑問が頭の中を駆け巡っていた。

もちろん、そんな勘違いはない。

それをどうにか受け入れた瞬間、レオンの身体は驚きの声をあげるべく、止まっていた空気を思いっきり吸い込んだ。

そこに、男の声がタイミング計ったかのように水を差す。

「ここで大声は出すな」

急な要請だったが、なんとか、声ではなく息を吐き出すにとどめる事が出来た。

そんなレオンの様子を見て、ベティは可笑しそうに笑う。

「もしかして、レオンは私にフィアンセがいてシヨックだったのー？」

言われてみて、腕を組んではたと考えてみたが、しばらくして首を捻る。

「・・・いえ、あんまり？」

ベティは腰に手を当てる。だが、顔は笑っていた。

「それはそれで、ちょっと傷つくなー」

「あ、いえ。もちろん、驚きはしましたけど」

フォローのつもりだったが、あまり意味をなしていなかった。

そこでまた、ホレスの声が割り込む。

「フィアンセといっても、もう無効だ」

「無効・・・？」

そう言われても、レオンにはよく分からない。

その様子をみて、ベティが説明する。

「さっき、私のお祖父さんの話をしたでしょ？」

「あ、はい」

あの後モンスターに襲われたわけだが、もちろん忘れてはいない。ここで子供だったベティにウイスキーの味を覚えさせたという、ある意味で罪人である。

「ホレスはね、そのお祖父さんのお気に入りだったんだよね。ちょっとした縁で知り合って、ここの手伝いをしてくれてたんだ。えっと・・・もう何年くらい前からだっけ？」

「15年」

素っ気ない答えにも、ベティは慣れた様子だった。

「その頃はまだ私も小さかったから、ずっとお祖父さん1人だったんだよ。だから、きつと少し寂しかったんじゃないかな。息子がいれば後を継がせたかったんだろうけど、女の子ばかりだったし。だから、ホレスが手伝ってくれるようになって、きつと息子っていうか、まあ、後継者にしたいと思ってたんだよね。ホレスは見込みがあるって、よく言ってたし」

「俺はそれほどでもない」

「そんな事はいいの」

ホレスの呟きにベティがすぐさま言い放つ。手慣れた会話で、本物の兄妹みたいだった。

「それで、ずっとお祖父さんとホレスが2人でここを切り回したんだけど、3年ちよつと前くらいに、お祖父さんが体調を崩しちゃって、まあ、なんていうか・・・もう仕事には戻れないって事になっちゃったんだ。もういい歳だったからね」

ベティの表情は明るいが、どこか笑顔になりきれていない。まだ3年程しか経っていないのだから、無理もない。その人とベティには思い出がたくさんあるようだから、尚更である。

「あの、ベティさん。別にいいですよ。僕、そんな話になるとは思わなかったの・・・」

レオンの言葉に、ベティは少し照れたような笑みを浮かべた。

「いいのいいの。えつと・・・あ、そうそう。それで、いよいよ最後って時に、何かお祖父さんを喜ばせたいと思ったんだよね。それなら、ホレスがここの後継ぎになるって事が決まれば、安心出来るだろうなって思って、もう思いついたその日に、ホレスのところまで行って、すぐに病室まで連れて行って、私達婚約しましたーって」

なんというか、子供みたいな話だが、レオンは素直にベティらしいなと思った。呆れるよりも前に、思わず笑ってしまった。

ベティもそれにつられたようで、いつもの笑顔に戻った。

「あの時は、私はまだ結婚出来ない歳だったからねー。もう1年遅かったら、勢いで結婚してたかもしれないなー。ホレスも別によかったでしょ？」

「そうだな」

当たり前みたいに聞いたら、当たり前みたいな答えが返ってきた。

「いや、あの・・・結婚ですよ？」

レオンが怖ず怖ずと確認すると、ベティはきよとした顔をする。

「そうだけど？」

「えっと・・・結婚ってあれですよ。夫婦になるっていう」

また言葉の定義をついつい確認してしまう。

「当たり前でしょー？他にケツコンっていったら、すぐに拭き取ったらそうでもないけど、後になったらこびりついて取れなくなる、お父さんの喧嘩の後にいつの間にか増えてるあれの事くらいじゃない？」

ベティにしてみたら、確かに血痕はそういう物かもしれない。

「そうじゃなくて・・・普通は、結婚って好きな人同士がするものですよね？」

その質問に、ベティは真顔で答えた。

「私、ホレスの事好きだけど」

何の偽りも感じられない、堂々とした宣言だった。

ベティはホレスの方を向いて聞く。

「ホレスも私の事好きでしょ？」

「そうだな」

またもや、当たり前みたいな会話だった。

レオンはたっぷり間を空けてから、慎重に言葉を選んで聞いた。

「・・・あの、僕が気付いてないだけで、ベティさんとホレスさんは恋人同士なんですか？」

「ううん」

「違う」

同時に、同様の答えが返ってきた。

レオンはなんとか、納得のいく答えを導きだそうとする。その数秒後にはあえなく破綻したのだが。

「・・・すみません。僕にはついていけないみたいです」
正直に敗北宣言する。

2人がどういう関係なのか、さっぱり分からない。
あっけらかんとした口調で、ベティは言った。

「それよりも、レオンはここに來た目的を忘れてない？」
そうだった。すっかり忘れていたのは事実だが、今ならすぐに切り替えられる。とりあえず、現在の摩訶不思議な難題を忘れ去りたいという思いが強過ぎる。

レオン本人が聞く前に、ベティが勝手にホレスに尋ねた。

「ホレスー。レオンが弓と笛を教えて欲しいんだって」

全く見当違いではないが、かといって正解とは言えない。正確には、狩人としての戦闘について、アドバイスして欲しいというのが正しい。

だが、レオンが訂正するより前に、ホレスの答えがあった。

「いいだろう」

こちらを見るわけでもなく、隣の酒樽を見つめながらの返事。
わずか数秒で、話がまとまった。

「よかったねー」

ベティの言葉はとりあえず置いておく事にして、レオンはホレスに確認した。

「いや、あの・・・いいんですか？」

「ああ」

「こういうのもなんですけど・・・お忙しいんじゃないですか？」

「暇な日もある」

「そうかもしれませんが・・・別に僕の為に使わなくても」

そこでホレスはこちらを向いた。向いたのは碧の右目だけだったが、それだけで彼の全てがこちらを向いたような、それほどの存在

感があつた。

「レオンだったな」

やや気圧されながらも、レオンは頷く。

「は、はい」

「ベティの命の恩人だ」

意外な一言である。ベティに言われた時も戸惑ったが、ホレスの口からその言葉が出るのは尚更違和感があつた。

「いえ、僕は何も・・・助けたのはホレスさんですよ。どちらかというと、ホレスさんが僕の命の恩人です。本当にありがとうございます」

その言葉にも、ホレスの碧の瞳は微動だにしない。

「俺はとどめをさしただけだ。俺がいなくてもベティは逃げられた。だから、助かったのはレオンのお陰だ。本当に感謝している」

全然感謝している口調でも体勢でもない。だけど、きつと不器用な人なのだろうとレオンは思う事にした。

「逃げられたかは分かりませんが、ベティさんがここまで来たのは僕が頼んだからなんです。だから、あれくらいは当然というか・・・本当は、見習いとはいえ冒険者なんですから、倒せないといけないんですけど」

「ダガーを使っていたな」

突然の話題変更に、戸惑いつつも頷く。

「え？あ、はい・・・まだ習いたてですけど」

「アレンに言われたのか？」

「そうですけど・・・」

「なるほどな」

「・・・はい？」

そこでホレスはベティの方を向いた。

「ベティ。これからはレオンと一緒に来い」

何の脈絡もない言葉だが、やはり慣れているのか、ベティはすぐに答える。

「それはいいけど、毎回一緒は無理だと思うよ。レオンはこれからダンジョンにも挑戦し出すから、結構忙しくなると思うし」

「・・・分かった。遅いようだったら俺が迎えに行く」

「ホレスが？それって、私を心配してくれてるの？」

「当たり前だ」

ベティは照れたように苦笑する。ホレスの前ではよく見せる表情なのかもしれない。

「そんなに心配しなくてもいいよー。あんなモンスターはそうそう出ないと思うし。だいたい、今まで出た事なかったしね」

「一応だ。絶対に1人では来るな」

「はいはい。心配性だねー」

諦めたようなベティの口調。お互いの事をよく知っているのだろう。会話を聞く度に、その印象が強くなっていく。

そこでふと、2人の関係が分かった気がした。

「レオン」

ホレスの声に、レオンの思考は中断された。

「あ、はい」

「狩人としての弓という事なら教えられる。ベティの護衛を頼むよ
うで悪いが、俺のところまで来て貰えれば出来るだけの事は教えよ
う。元々、野外でしか教えられない。わざわざ出向かせるようだが、
理解してくれ」

その言葉で、レオンの推測はほとんど確信に変わった。

「いえ、教えて貰えるだけでも十分です。それで、あの、ホレスさ
ん」

「どうした？」

「ホレスさんにとって、ベティさんってどんな存在ですか？」

回答はやはり早かった。

「幼馴染み。それか、妹か。いずれにしても大切な人間だ」

やっぱりそうだった。恋人というよりも、そちらが近い。ある意味夫婦にも近い存在なのかもしれない。家族同然の付き合いという

事なのだろう。

そこで、ベティの声が響く。

「恥ずかしい事聞くよねー。そんな事確認してどうするの？」

そちらを見ると、どこかにやけた顔をしていた。からかう気満々である。

どう答えたら被害が最小限で済むだろうか。そう思案していた時、ホレスが不意に、懷から笛を取り出す。オカリナに似ているが、穴が少ないように見える。片側しか見えないが、2カ所しか確認できない。薄苔色の不思議な楽器だった。

「あ、吹いてくれるの？」

ベティのどこかわくわくとした声。

「ああ」

「こんな時間に珍しいね」

「今日は特別だ」

その言葉に、ベティは微笑んでレオンの腕を掴んだ。

「何ですか？」

「いいからいいから。座って座って」

腕を引っ張られて、強引に床に座らされる。石材だから冷たいかと思ったが、意外にも少し熱を持っていた。

2人並んで、ホレスの方を向く。演奏者の方かというと、笛に口を当てて、じっと目を瞑ったまま動かない。精神統一しているのだろうか。

「ホレスはね、よくウイスキーに笛の音を聞かせてるんだよ」

「・・・どうしてですか？」

「味が良くなるんだってさー。だから、ここも大声厳禁なんだよ」

「へえ・・・」

聞いた事のない話だったが、職人が言うのだから、きっとそうなのだろう。

そこで突然、笛をくわえていたホレスが口を開く。目は瞑ったままである。

「これはウイスキーの為じゃない」

ベティは笑顔でそれに返事をする。

「じゃあ、何の記念？」

「記念じゃない」

「あれ？レオンとの出会い記念じゃないの？」

「それもいいが、観客はもう1人いる」

少女の瞳が一瞬大きくなる。

「・・・へえ。珍しいね」

「これくらいしか出来ない」

「本当に心配性だなー」

今日何度目かの、ベティの照れた声。

それを受け止めるようにして、笛の音がその片鱗を見せ始める。

決して高くはない、身体に直接響いてくるような素朴な音。それをどこか寂しげな旋律で彩るのだが、不思議と暗い印象は全くない。

悠久の自然に、或いは母の腕の中に抱かれるような、心休まるメロディ。身体中を癒しの音色が包み込んでいく。

その笛の音に酔いしれながら、レオンは演奏する青年と隣に座る少女を見た。

さっきの会話を思い出す。

通じ合った2人の会話だから推測で補うしかないが、やはり兄妹だと考えると分かり易い。兄は、明るく振る舞っている妹の事が心配なのだろう。あんな体験をすれば、本当は辛かったはずなのだ。その心の負担を和らげる為の演奏なのではないだろうか。そんな優しさそのものの音色に聞こえる。

家族。

笛の音にのせて、レオンも自分の村に思いを馳せる。まだ村を出て半月程しか経っていない。ホームシックになるには早過ぎるが、この2人を見てこの音色を聞くと、否応なく故郷が恋しくなってくる。

だけど、それにはまだ早過ぎる。

ついさっきの戦いを思い出す。文句なく、自分の完敗だった。次に戦う事になった時、自分は勝てるだろうか。もし傍に誰かいたら、その人を守るだろうか。

逆の懸念もある。あの時ベティがいなかったら、自分は針の攻撃を避けられなかっただろう。彼女の声があったから、咄嗟に避けられたのだ。それだって、確信があったわけではなく、ほとんど勘みたいなものだった。

あんなのがダンジョンにはうようよしているのだろうか。

そんな場所で、自分はたった1人でも生き残れるのだろうか。やめるなら今のうち。

そんな考えが頭を過ぎった時だった。

最初はそういうメロディーなんだと思った。だけど、違った。

笛の音が次第に遅くなっていく。音色だけではない。他の音も、感覚も、時間でさえ、勢いを失っていくのだ。ゆっくりと、だが確かに停滞していく世界。

それを認識していたレオンだが、どういうわけか身体が動かなかった。意識だけが遠くから見ているような感覚。

そしてついに、時が止まる。

だが、それも一瞬だけだった。

気付いた時には、時は元に戻っている。

笛の音は元の旋律のまま。

ホレスは目を閉じている。ベティはこちらを見ていない。何も気付いてないようだった。

だけど、レオンは確かに感じた。

今何か起きた。

そして、確かに見た。

時が止まった一瞬。その時自分の視界を支配したのは、この蒸留所の風景ではなかった。

そして、その場所でじっとこちらを見ている存在。

行儀良く座って、じつとこちらを見ていたのは、白毛に紅眼のカーバンクル。

今のは何だったのだろう。

笛の音はまだ続いている。

その癒しの旋律も、今のレオンの耳にはどこか遠くの音色のように聞こえた。

酒場の主人と行商人

ガレット酒場の朝は早い。

それは、ここが宿屋の食堂も兼ねているからとか、また、冒険者は日の出前の時間に出立する事が多いからという理由もある。だが、もしそんな理屈を本気で信じている人がいるとしたら、それはきつとこの酒場の事をよく知らない人だろう。ここはそんな客目線の発想をするような店ではないのだ。

この酒場の朝が早い理由。それは、単純に酒場の主人のガレットが早起きだからである。

彼の場合、日の出前に起きるのは当たり前。睡眠時間が3時間を越すことはほとんどない。仕事の為とかではなくて、そういう生活習慣が身についてしまっているのである。

元冒険者であるガレットにとって、睡眠は短い程良い。特に、魔法を使うジーニアスは精神的負担が多い為か、睡眠時間が長い傾向がある。夜の見張りは基本的に、彼のようなアスリートの仕事なのだ。無駄に長い睡眠は他のメンバーの負担になるし、何より、寝ている間は無防備だから、寝ていても落ち着かない。その頃の癖が抜けないままのガレットは、長い睡眠が出来ない身体なのである。

それだけなら、彼が早起きであるというだけの話で済むのだが、ガレットには欠けているものがあつた。

一言で言うなら、それは配慮、あるいは遠慮である。

早朝だから静かにしようなどという発想が彼にはない。冒険者にしてみたら当たり前の事なのだが、酒場兼宿屋の主人となった今でも、困った事にならない。何かしてないと落ち着かないという事なのだろう。客はおろか、家族だってまだ寝ている時間でも、平気で廊下をうろうろする。うろうろするだけならまだ良いが、掃除や片づけを始めたりする。特に、何か捜し物があると、妻や娘を起

こして聞く事もある。本人達はもう慣れてしまったわけだが、その話し声を聞かされる客達の方はそうではない。

端的に言えば、朝から落ち着かない。

そういう場所だから、ここに宿をとる一般の客はほとんどいない。初めてここに泊まった一般人は、次からは大抵他の宿をとるし、そもそも、ユースアイの人々は親切だから、一般人が宿を探している場合、ガレットの宿場を紹介する事はない。

代わりに、冒険者が宿を探している場合には、迷わずここを紹介する。何故なら、冒険者の生活習慣が身につくからである。さらに、明日の出立が早い場合でも、寝坊する事はまずない。仮に自分達で起きられなくても、主人自ら起こしにくるからである。多少身体にダメージが残る起こし方だが、他の宿屋ではこうはいかない。夜遅くに帰ってきた場合でも、ガレットはすぐに飛び起きて出迎えてくれるし、そもそもほとんどの時間起きているわけだから、閉め出しされる心配もない。好意的に見れば、冒険者向けの宿屋だと言えるだろう。

そんなガレットの店だが、1階のフロアのほとんど全てが酒場兼食堂となっている。そこで冒険者達が、酒を飲んで語り合ったり、羽を休めたりするわけだが、そういう場合、多くの客達はテーブル席を使用する。というのも、冒険者の多くはパーティを組んでいるからで、イスが3つしか用意されていないカウンター席は、4人以上が理想とされる冒険者パーティには少な過ぎるのである。

カウンター自体の広さはもつと多くのイスを置くのにも十分なもののだが、ガレットはそれ以上のイスを置こうとはしない。その理由を一言で説明するのは難しいが、簡単に言えば、冒険者達と必要以上で馴れ合いたくないからである。馴れ合ってもお互いの為にならない。志半ばで冒険者を引退した自分にとっても、これからより高みを目指す冒険者達にとっても。

その為、現在カウンター席を利用する人間といえば、まだ仲間がない見習いのレオン、たまに遊びにくる自分やベティの友人達。

それから、今座っている行商人の男くらいである。

ガレットはカウンターの中から、座っているその男を見下ろす。男は2つのグラスに注がれたウイスキーを交互に飲み比べているところだった。

旅人にしては頼りない体つきで、道中で強盗に襲われたらどうするのだろうかといつも思うのだが、町中にいる時には恵まれた外見だと言えるだろう。相手に警戒心を抱かせないのはもちろん、実は整った顔立ちでもある。客に取り入るには有利な武器となっているに違いない。服装も当然くすんだり汚れたりしているわけだが、こういった職種の人間には珍しく、意外に気を使っているという事だった。これは、本人に聞いたわけではなく、妻や娘の意見である。少し無精髭をのばしているが、それもファッションのうちという事なのだろう。人当たりがいいのは間違いない。

彼は自分の事をガイと名乗っているが、本名ではなく、覚えやすいからそう名乗っているという事だった。そして、実を言うと、彼こそがこの町までレオンを乗せてきた男である。ついさっきこの男に確認もしたし、レオンが住んでいたような山奥まで行くような行商といえば、彼くらいのものである。まだ若い男だが、その若さに見合ったフロンティア精神と、しっかりとした商売眼を併せ持っている、なかなか大した男である。

ガイは両方のグラスとも二口しか飲まなかった。それもそのはずで、これが彼の仕事の一部だからである。

しばらくして、彼は顔を綻ばせながら言った。やや苦笑気味と言っている。

「・・・同じ場所で作ってるのに、どうしてこんなに違うんだろうなあ」

彼が味見していたのは、ガレット酒場自家製のウイスキーである。彼の妻の父親が始めたという、こだわりの銘酒だ。

「そんなに違わねえだろ」

ガレットが吐き捨てるように言ったが、ガイは全く意に介さず続

ける。見かけによらず、この男は度胸もある。

「いやいや。分かる人には分かるんですって。ホレスの方は小川のせせらぎみたいな繊細さがあるけど、オッサンの方は土石流……」
眉がぴくりと動いたのが自分でも分かった。

「てめえ、本人を目の前にして土石流ってな……覚悟してるんだろな？」

怒気を込めた眼で睨むと、ガイはあっさり両手を挙げた。だが、顔は笑っている。

「そういう荒々しい方が好みって人もいますよ。この口の中で荒れ狂う感じはなかなか出せないって」

「てめえなあ……それで褒めてるつもりか？」

ガイは口元を上げる。

「もちろん。悪い品だったら、買い手なんてつかないし」

「その買う奴も買う奴で、何を好き好んで、そんな土石流を飲みたがるんだ？」

「都会人は刺激が欲しいんでしょうね」

「じゃあ、ホレスの方はどんな奴が買うんだ？」

「それはまあ……違いが分かる人でしょうね」

自分のは出来が悪いと遠回しに言われたような気がしたので、もう一度睨んでみたが、今度は効果がなかった。どうもやりにくい相手である。

ガイは周囲を見渡してから、ガレットに聞く。

「今日はベティちゃんは何？ホレスのところですか？」

世界広しといえど、ベティの事を今もちゃん付けで呼ぶ男はガイだけである。

ガレットはグラスを片づけながら低い声で答える。

「レオンの鎧が出来たとかで見に行っちゃったんだよ。付き添いつていうか、仕事をサボる口実みたいなもんだ」

「へえ……レオンはどんな感じですか？」

「どうってなあ……これからようやくダンジョンに挑戦ってとこ

ろだから、何とも言えねえだろうな。まあ、なるようにしかならねえよ」

「いや、そうじゃなくて・・・例えば、息子としてどうですか？」
思わぬ質問に、ガレットは鼻で笑った。新しいグラスを手に取りながらガイの方を見ると、彼も楽しそうな表情だ。

「まあ、息子としてなら、どこに行ってもやっていけるだろうよ。うちもたまに手伝って貰ってるが、よく働くし、人当たりもいいしな」

「やっぱりそうですねえ・・・俺も、ここに連れてくる時、そう思っただけですよ」

「そういえば、そんな話をあの馬鹿娘から聞いたな。弱そうだ弱そうだって、皆に言われたらしいんだが、連れてきて貰った行商の男にもそう言われたってな」

娘のベティは、そういう情報を聞き出す事にかけては天才的と言ってもいい。

悪びれる様子もなく、ガイは可笑しそうに笑った。

「本当に弱そうですからねえ。最初はジーニアスかと思ったんですけど、魔法は使えないって言うし・・・だから、一応少し心配してたんですよ。というか、最初に会った時、止めとけて言おうと思っただけで。だけど、レオンの両親と知り合いだったから、断るのも悪いし」

氷を入れたグラスにウイスキーを注ぎながら、ガレットは軽く答える。

「あいつのご両親がお得意さんだったが、それか母親か姉が美人だったか、どうせそんな理由だろうが」

ガイは微笑む。肯定の笑みだ。

「美人っていう事なら、それはもう・・・レオンの母親ですからね、愛想が良くて優しい人ですよ。そうだ。それで、聞きました？」

ガレットはウイスキーの入ったグラスをガイの前に置く。

「何をだ？」

いつの間にか、ガイは真剣な表情だった。

「実は、つい最近、新ダンジョンが見つかったんですよ。それが滅多にないような規模のものらしいんですけど、その入り口がユースアイからも結構近いそうで」

思い当たる節があり過ぎる話だった。

「おい。そのダンジョンの入り口、まさか、ここから西の方か？」
目を見開いたガイの表情を見れば、その答えも一目瞭然だった。

「あれ・・・知ってました？西っていうか、正確には北西の山奥の方なんですよ。どちらかというところ、こっちよりも、山を越えた向こうの方では、結構な強さのモンスターが出るようになったみたいで、今ちよつとした警戒態勢だとか」

ガレットは右手を額に当てて、大きな溜息を吐いた。

「てめえは・・・こういう時はちつとも役に立たねえんだよなあ」
役立たず呼ばわりされたガイだったが、困惑しているのは明らかである。

「いや・・・なんか知りませんが、俺、間が悪かったですか？」
あさつての方を向きながら、ガレットは言い放った。

「こっちにも出たんだよ」

「モンスターが？」

「当たり前だろうが。もっと早くに聞いてたら・・・いや、もういい。てめえに期待しても仕方ねえ。それよりか、ギルドの情報網はどうなってるんだ」

「いやいや。何かあったんですか？あれ、西って言えば・・・もしかして、モンスターに襲われたの、ベティちゃん？」

西にはさっき味見させたウイスキーの蒸留所があり、そこにベティが度々通っている事くらいはこの男も知っている。相変わらず彼の勘は鋭いが、今更働いても意味がない。

さすがに驚いた表情のガイはさておき、ガレットは心中穏やかではなかった。そんな情報があるのなら、ギルドから注意勧告があってもいいはずだが、それが全くなかった。一言でも情報があれば、

いくらでも対処方があったはずだ。

だが、ガイはその辺りの心情も読み取れたらしい。こちらの勘は捨てたものではない。

「いや、ケイトさんは悪くないですよ。この情報をここまで持ってきたのは、たぶん俺が一番手ですからね。入り口が判明したのは、本当について先日なんです。それまでは、山のどの辺りかなんて全然分かってなかったわけですから。あの山脈、結構広いですからね」

「そんな情報が、何でギルドよりも先にてめえにまわってくるんだ？」

「大した事じゃないですよ。何の偶然かは知りませんが、山奥でたまたま乗せた冒険者達が、その入り口を見つけた人達だったってだけです。まさにその帰りだったらいいんですけど、移動手段の方をモンスターにやられて途方に暮れてたらしいんですよ」

「・・・てめえはそんなモンスターが溢れる山奥をうろちよろしてたのか？」

「いやあ、そんな事知りませんでしたからね。堂々と通ってたら、意外に会わないものなんですってねえ」

他人事みたいに言ったが、一歩間違えたら命がなかったのは確かである。ただ、ここで笑い飛ばせるとというのが、彼がただ者ではないという何よりの証明かもしれない。

ガイはグラスに口をつけてから、話を戻す。

「そういうわけなんで、そろそろギルドにも報告が来て、手練れの冒険者が押し寄せて来ると思いますよ。まあ、山の向こうの方が大々的に募集してると思えますから、こっちはそれほどもないと思いますけど」

「そのダンジョンの規模がどれくらいかは分かるか？」

「いや・・・その人達も入り口を見てきただけらしいんで。そういう依頼内容だったらしいですね」

ギルドからの依頼だったという事だろう。普通、ダンジョンの入りは冒険者が勝手に見つけるから、そんな依頼が出る事はほとん

どない。逆に言えば、それだけギルドの憂慮する案件だという事だろう。

難しい顔をしている酒場の主人に、ガイは少し間を取ってから聞いた。

「・・・その、ベティちゃんが襲われたモンスター、倒したのはホレスですか？」

ガレットは無然として答える。

「ああ」

「強さはどんなものだったかは聞きました？」

「矢を13本使った」

「あいつらしい表現ですねえ。でも、13本っていったら・・・」

そこでガイの言葉は途切れたが、言わんとする事は分かる。ホレスの矢は正確無比であり、普通の獣なら1本あれば急所を射抜く。急所がはつきりしないモンスターでも、普通は5本もあれば十分事足りる。その倍以上使ったという事だから、それだけ強力なモンスターだったという事だ。

「・・・どうも嫌な感じだな」

ガレットの呟きに、ガイが軽く聞く。

「元冒険者の勘ですか？」

「行商の勘は何て言ってるんだ？」

「ここは安全」

「・・・根拠は？」

「勘だからなあ・・・と言いたいところですけど、実はひとつだけいい材料があるんですよ」

方眉を動かしたガレットに、ガイは微笑んで言った。

「レオンは、実はただ者じゃないんですよ」

「何？」

確かに、前世を見た事がないという意味ではただ者ではないし、強力なモンスター相手に恐れもなく立ち回ったというのは、聞いた時は思わず感心した程だ。だが、ガイの口振りではそれだけではな

さそうである。

たっぷり間を取ってから、ガイは自信満々の口調で言った。

「あいつは伝説になる男なんです」

同じくらいたっぷり間を空けてから、ガレットは半眼になって聞いた。

「・・・根拠は？」

「俺の勘」

「帰れ」

グラスを下げようとするガレットを、慌ててガイは止めた。

「いやいや！今のは冗談」

「今のは？どうせ他に理由なんかねえだろうが」

「あるある！」

「分かった。とりあえず聞いてやる」

「そう言いながら、グラスから手を離さないのは何で？」

「いいから言ってみやがれ」

ガイはそこで困った顔になった。

それを見たガレットは、口元に笑みを浮かべる。全然明るくない笑みを。

「・・・ガイ。こちら家族の命が賭かってるんでな。お前の戯れ言につき合ってる暇はねえんだ。これ以上つまらねえ冗談を言いやがったら、二度と馬鹿な事が言えねえ身体に矯正してやるから楽しみにしてろ」

「いや、冗談ではないけど・・・ただ、あの、最後まで怒らないで聞いていただけませんか」

「そうだな。最後まで望みは聞いてやろう」

「最後って・・・」

「何だ？もう言い残す事はないか？」

ガイは瞬時に両手を挙げて、後ろに飛び退いた。ウイスキーよりも命を優先したようだ。なかなか賢いと、ガレットは少し感心した。それを見届けてから、黙ってグラスを片づけると、不意にガイが

近寄ってきた。まだ話があるようだ。

「・・・何だ？」

思いつきり不機嫌な声で言ったが、ガイは少し微笑むだけで、それを受け流す。

「レオンの村。サイレントコールドの故郷なのは知ってますよね？」

「それがどうした？」

「これは本当は秘密なんですけど・・・レオンが知らなかったら話しておいて貰えますか？」

ガレットは眉を動かす。どうやら真面目な話らしい。

ガイは小声で話を続ける。

「実は、レオンの村には、サイレントコールドが作ったアーティファクトがあるって話なんですよ」

アーティファクトとは、魔法によって作られたアイテムの中でも最上位の物の総称だ。一般人はもちろん、冒険者でも一生お目にかかれない事が多い。普通の魔法のアイテムなら、ある程度のジーニアスならば作る事が出来るが、アーティファクトとなると、伝説級の能力がなければ製作不可能と言われている。まさに幻の品であり、それに秘められた力も、他のアイテムの比ではない。

「そのアーティファクトにはいろいろな力があるらしいんですが、常に作用してるのは、村を守る機能なんです。あの辺りに雪女が出るって話を聞いた事あると思うんですけど、それがまさにその防衛機能らしいんですよ。アーティファクトの力によって生み出された幻影なんですけど、モンスターとか、あと、盗賊とかの前に現れて、そいつらを魔法で氷漬けにしているらしいです。若い頃のサイレントコールドにそっくりの姿で、その魔法の力も、並の冒険者じゃ勝てないって話です」

「その村で育ったんだから、レオンもそれくらい知ってるだろう？」

当然のガレットの疑問だったが、ガイは頷かなかった。

「子供にはそういうお伽話として教えてるらしいですよ。レオンは16歳だから成人といえば成人なんですけど、いつ教えるかは親

の勝手らしいんです。というか、レオンのご両親が、なんていうか・
・ちょっとぼんやりしてるんで、たぶんまだだろうなあと思って
酷い言われようだが、ガレットにも否定出来ないところだった。
またベティ経由の情報だが、レオン一家は村でもぼんやりした家族
で有名だったらしい。

ガイはそこで身体を離す。微笑みながら軽く左手を挙げた。

「じゃあ、そういう事なんでよろしく。ボトルの方は、明日取りに
来ますんで」

それだけ言うと、出口の方へと歩いていく。

ガレットは腕を組んでそれを見送っていた。

相変わらず、食えない男である。

結局、ガイが何故こんな話をしたかというところ、レオンの村がその
北西の山脈のどこかに位置するからだろう。ガレットは行った事がない
から分からないが、ガイは何度か訪ねた事があるらしいから、
場所を知っているのだ。

つまり、これから新ダンジョンの話が広まれば、当然レオンの耳
にも入る。そうになると、レオンは自分の故郷の事が心配になるだろ
う。それでも、村にある程度の防衛機能があるという事を知ってい
れば、ある程度は安心出来る。

もちろん、彼は行商人だから、ただの親切心だけだとは思えない。
自分やレオンに対して誠意を見せたと捉える事も出来る。彼はそれ
くらいの計算が出来る男であり、そうでなければ、あの若さでたつ
た1人、行商を続ける事は出来ない。

そう捉えられる事もまた、お互い承知の上である。商売人とはそ
ういうものなのだ。

「あれー、ガイさん来てたの？」

ガイが出口にたどり着こうとした時、扉が向こうから開いた。そ
こに立っていたのは、新品の皮鎧を着たレオンと、ベティ、そして
鍛冶屋で働くりディアの3人だった。ばったり出くわす格好になっ
たわけだが、当然というべきか、最初に口を開いたのはベティだっ

た。

「お久しぶり。ベティちゃんもリディアさんも綺麗になったね」
齒が浮くような台詞だが、ガイは平気な顔で言える男なのだ。

「何で私だけちゃん付けなのー？」

「レオンも鎧が出来たんだって？」

「私の質問は！？」

ガイはあっさりとそれも無視する。扱いに慣れているというか、完全に遊んでいる。付き合いが長いわけでも深いわけでもないのここまでの事が出来るのは、きっと相性の問題だろう。

レオンは慣れない状況に戸惑っているようだった。いつもベティに振り回されているわけだから、無理もない。

「えっと・・・」

ガイはそんなレオンの肩に手を置く。あまり体つきはよくないが、それでも身長はガイが一番高い。

「鎧はよく似合ってる。だがな、レオン。二股は程々にしておけよ。鎧と一緒に、2人同時なんてのは無理があるんだ。ベティちゃんとはかく、リディアさんみたいな美人を見て、思わず手を出してしまった気持ちは、分らないではないけどな」

完全な濡れ衣だったが、ガイがわざと言っているのは明らかだった。声がやや大きいのは、多くの人間に聞かせる為だろう。

酒場中の視線が、出入り口の扉に集中する。

「私はともかくって何ー！？」

怒った様子のベティはともかく、レオンとリディアは完全に固まっていた。好奇の視線を一身に浴びているのが分かっているのだ。レオンは顔が青くて、リディアは顔が赤いという違いはあるが。

「じゃあな。みなさんお元気で」

普段通りの口調でにこやかにそう言うと、ガイは颯爽と店を後にした。

酒場には、変な空気が残っていたが。

ガレットは溜息を吐く。

これは一体何のサービスなのだろうか。さっきのアーティファクトの話のように、何か利点があるのだろうか。

考えても答えはない。あるはずもない。

ただの遊びに違いなかった。

そして、結局、この事態を処理するのは、自分の仕事のようにだった。

「ベティ！レオン！あの馬鹿の戯れ言はいいから、とっとと報告しやがれ！リディアの仕事が止まっちゃまうだろうか！」

ガレットの店内を揺るがす声が、凝り固まりそうだった空気を一喝で吹き飛ばした。

ダンジョン入門

その日、レオンの朝は早かった。

どれくらい早起きだったかというところ、泊まっている宿場の主人のガレットよりも早かった。彼は、毎日夜明け前には廊下を徘徊している事で有名だが、今日起きた時には、宿場内は静寂そのものだった。しばらくしてから用を足そうとして部屋を出たら、その物音でガレットを起こしてしまったらしく、気まずい思いをした程である。そもそも、ベッドに入った時間が早かったとは言える。けどそれ以上に、よく寝付けなかったのは自分でもよく分かっていた。

高揚と緊張。

それらと上手く折り合いをつける為の心の準備をしながら、薄明を迎え、身支度をして、早い朝食を済ませたレオンは、まだ早朝と言える時間に酒場を後にした。

風がやや冷たい。

だが、それが気にならない程、レオンの頭はこれから向かう場所の事でいっぱいである。

ガレットにも訓練所のアレンにも、ただの通過点だと言われた。それでも、最初の一步には違いない。

まだ人気の少ない大通りを歩きながら、装備を確かめる。

腰に下げているのは、スローイングダガーが3本とショートソード。それから左腕にはバックラー。もう重さには十分慣れている。投擲もだいぶ上達してきて、動きながらも狙った位置に飛ぶようになってきた。ただし、それは右手で投げた場合だけで、左手で投擲するのはまだ難しい。

一昨日初めて着たのが、鍛冶師のジェフとその娘のリディア特製の皮鎧。ただの皮だけではなくて、特殊加工した金属で網目を作っ

て、それを下地にしてあるという事だった。軽くて丈夫だが、もちろん、金属製の鎧程の信頼性はない。それでも、命綱としては十分な物である。元冒険者のガレットにも見て貰ったが、初心者には勿体ないと言わせた程、手の込んだ代物だった。

背中には弓と矢筒。狩人であるホレスのお下がりだが、かなり小型の弓で、矢は10本程しかない。というのも、レオンはまだあまり弓が使いこなせない。よほどのが大きくないと、動きながらは当てられない。急所を狙うなんて事はもつての他。あくまで補助としての武器だ。

そして、昨日最後まで揉めたのが、二の腕に巻き付けてある紐のような物だった。細くて光沢のある紐の両端に、小さな円錐状の器具が取り付けてある。紐の長さは最長で4メートル程はあるが、端の器具に仕掛けがあって、普段は短く収納されるようになっていて、それを左の二の腕に2本、右腕に1本巻き付けてある。皮鎧の上からだから、それほど痛くはない。

実はこれはニコルが作った物だ。彼が呼ぶガジェットという物である。

昨日、ニコルは様々なガジェットを見せてくれた。自分の為に用意してくれた物だったが、予想通りというかなんというか、その大半が、凶悪な威力を誇る代物だった。もちろんガレージ内では実践できないから、説明を聞いただけである。粉塵が舞ってみたい、二種類の液体が混合したり、とにかくいろいろ過程はあるものの、最終的には何らかの形で爆発させるのがニコルの流儀らしい。

だが、嬉々として説明していたニコルはともかく、実際に使うかもしれないレオンは、はっきり言って気が進まなかった。取り扱いを誤った場合はもちろん、万が一モンスターの攻撃が命中して起動したりすれば、木っ端微塵になるのは自分の方だからである。

それをなるべく丁重に訴えてみたところ、次にニコルが紹介したのがこの器具だった。いろいろな用途を教えてくれたのだが、とにかく爆発しない。その一言で、レオンはほぼ即決した。

以上が、レオンの装備の全て。

全てといっても、他にも食糧等の細々とした道具が必要だから、重量にもある程度の余裕が必要だ。そう聞いていたからこの装備でいいと思っていたが、実際には初めての事だから加減が分からない。やってみなければ分からない。

例えそれが危険なチャレンジでも。

いつの間にか、レオンは目的地に着いていた。

町の南西部。ぽっかりと空いた大穴の中を、石レンガで出来た下り階段が続いている。

その脇には石碑があり、大きくこう書かれている。

ダンジョン。ビギナーズ・アイ。

自治都市ユースアイは、その町の中にダンジョンを有している事で有名でもあるらしい。普通はもちろん、ダンジョンの入り口は町の外にある。そこからモンスターが出てくる事もあるし、観光名所になるわけでもない。だが、この町は、敢えてこのダンジョンを囲むように作られたという事だった。

それには当然理由がある。最も大きい理由は、今から400年以上前、この町を作ろうとしていた頃に起きたとある事件だった。

ある町の中心に、突然ダンジョンの入り口が出現して、そこからモンスターが溢れ出てきたのだ。

それは、レオンでも知っている程有名な話だった。その町の人々は必死に応戦したが、一週間もしないうちに、その町には人がいなくなつた。ダンジョンの規模が大きかった為、モンスターの強さも相当なものだったのだ。ダンジョンの規模とその中に潜むモンスターの強さは比例するし、外に出てくる頻度も多くなる。

その話を聞いて、ここに移住しようとしていた人達も不安になった。そもそも、ここが自治都市なのは、国が普通の都市として認めていないからである。今でこそ大きくなったが、当時にしてみれば、交通の要所でもないし、高地で冬が厳しいし、季節の変わり目には水害もある。自然の恵みもあるが、裏を返せばそれは厳しさでもあ

る。ただでさえ辺境と言える土地なのに、そんな住みにくい都市を、国力を費やしてまで守ろうとは思わなかったのだ。そこで、自治都市という事にして、軍備や行政を丸投げしているのである。

そんなわけだから、万が一ダンジョンが出現しても国は守つてくれない。自分達を守るのは自分達以外にはいない。だが、人も資産にも恵まれないわけだから、備えようにも備えられない。

力が無かった当時の人達は、そこで頭を使った。

だったら、最初からダンジョンがある場所を選べばいいと。

本末転倒な話に聞こえるかもしれないが、もちろん根拠があった。踏破済みのダンジョンからはモンスターが外に出て来ない事。そして、ダンジョンの入り口には一定以上の間隔があるという事。どちらも経験則でしかなかったが、移民がほとんどだった為、それぞれの故郷の話を聞いているうちに、そういう傾向がある事に思い至ったのだ。

当時、この付近にはダンジョンが2カ所存在した。ここ、ビギナーズ・アイと、町東部の池のほりにあるというファースト・アイ。どちらも難易度が低めであり、かつ踏破済みのダンジョンだった。ビギナーズ・アイは、その名の通り、まさに初心者向けのダンジョンであり、万が一モンスターが出てきたとしても被害が大きくなるはない。

それから150年程すると、町北部の山脈の入り口辺りにダンジョンが出現した。ほどなくして、そこが魂の試練場と呼ばれる特別なダンジョンだという事が分かった。魂の試練場からはモンスターが出てきた事はない。ユースアイの人々は安堵したに違いない。

それから今に至るまで、大きくなったユースアイの町中に突然ダンジョンの入り口が顔を出すといった事態は起きていない。ビギナーズ・アイからもモンスターが出てきた事はない。

ただ、だからといって、ユースアイの先祖が慧眼だったかという、それは断言出来ないところだった。何故なら、400年以上前のあの事件以来、町中にダンジョンが出現したという事例はないの

である。今では、あの町であの時、邪悪な何者かが暗躍したのではないかという説が有力という事だった。

もっとも、ユースアイの人達だって、自分達の推測をまるごと信じたというわけではないだろう。ただ、これからこの土地を開発しようという時に、不安は出来るだけ解消しておきたかったはずだ。その為のお守りというか、気休めのようなものだったに違いない。

最後の想像も含めて、これはデイジーから聞いた話である。彼女は読書が趣味という事で、そういった歴史に詳しい。ただ、歴史は歴史でも、血生臭い方面に偏っている傾向はあった。そもそも、この話を聞いた時もダガーの投擲の訓練中だったのだ。たおやかに微笑みながら短剣を投げる彼女の姿は、それだけでも十分アンバランスだった。

その光景を思い出して複雑な心境になっていたレオンだったが、ふと我に返る。

目の前には、ビギナズ・アイと記された石碑。

昔はともかく、今は自分の為にあると言っても過言ではない。

ダンジョン初挑戦。

それにうってつけのダンジョンなのだ。

レオンは大きく深呼吸する。

ここから始まるという期待。そして、ここで終わるかもしれないという不安。

どちらも、完全には消えなかった。

さらに小さく息を吐いて、呼吸を落ち着ける。

そして、足を踏み出したレオンだったが、その方向はダンジョン内へ続く石段ではなく、隣に立つ家屋の方だった。

怖じ気付いたわけではない。そもそも、そういう予定なのである。隣に立つのは、この町では一般的な木造2階建て。横にダンジョンがあるわけだが、特別な防備を備えているようには見えない。むしろ、ダンジョンの方に向けて、大きな両開きのドアが備え付けられている程である。

もちろんモンスターを迎え入れる為の物ではない。

レオンはその扉のすぐ脇にある勝手口の方をノックする。

「入れ！」

聞き覚えのない女性の声。だが、もちろん予想はついている。

レオンがドアを開くと、そこは広間だった。この家の一階部分の3分の1程の広さはある。そのスペースをカーテンで仕切って、広々とした何もない空間を確保している。本当は何もないわけではなくて、入った右手には大きめのベッドが置かれているし、木製の小さなイスが2つと棚もある。ただ、それでも広々とした感じがするほどの、普通の広間にしては家具が少なすぎる部屋だった。

そして、室内には先客が3人いた。そのうち2人とは顔馴染みで、1人は、ユースアイのギルドで働くケイト。もう1人は、冒険者向けの道具屋をしているラッセル。

最後の1人は、今日初めて会う人物である。やや明るい髪を頭の上の方で留めている、鋭い顔つきの女性。白いブラウスにカーキ色のズボンという格好だが、何となく立ち方が様になっている。鋭角的な雰囲気といい、ファッションといい、どこかリディアに似ている感じがした。彼女があと10年くらいしたら、きっとこういう女性になっているだろう。要するに、それくらい大人の女性である。

レオンはベティからいくつか予備知識を得ていた。彼女の名前はイザベラ。ここで医師をしている女性で、現在32歳。子供が3人いる。ただし、絶対に年齢は聞くなという事だった。

「朝早くから、僕の為にわざわざすみません」

3人の近くまで行くなり、レオンはそう言って頭を下げた。

微笑んで答えたのはケイトだった。ブラウンの髪と瞳はいつも通りだが、今日は相棒のカーバンクルであるシニアはいない。きつとギルドで留守番をしているのだろう。そのせいなのか、いつもはしている頭の装飾品を忘れているような、そんな物足りなさがある。

「いえ、これが仕事ですから。見習いの方が最初にダンジョンに入る前には、必ず説明しておくようにと。それがギルドの方針です」

そう言うなり、ケイトは隣のイザベラの方を向く。彼女の話聞けという事だろう。ラッセルは最初から少し離れた位置でこちらをまとめて眺めている感じだった。

しばらくしてからレオンが注目すると、イザベラはこちらを値踏みするような視線を送ってから、何もリアクションせずに口を開いた。

「レオンだっけ？」

優しいと厳しいの中間のような口調。さばけた感じが出ていて、大人は大人でも、母親らしい口調だと思った。もともと、レオンの母親はもっとおっとりした話し方だったけれど。

「はい」

「とりあえず、言っておくことが3つある」

ダンジョンに入る時の注意事項だろう。レオンが気を引き締めて頷くと、イザベラが右手の指を1本立てる。

「まず、私の事は先生と呼びなさい」

「・・・はい？」

いきなり小さな要求をされたので戸惑ったが、その返事が気に入らなかったらしい。もともと鋭かったイザベラの視線がさらに強くなる。

「返事は？」

彼女の低い声に、レオンは咄嗟に頷いていた。

「あ、はい」

「じゃあ、2つ目」

元の声を表情に戻ったイザベラは、右手の指をもう1本立てた。

「私の歳を詮索しない事」

「・・・はい」

既に知ってしまったているわけだが、それを言うのはやぶ蛇だろう。幸い気づかれた様子はなく、イザベラは3本目の指を立てる。

「じゃあ、最後」

正直、レオンはあんまり期待してなかった。たぶん、また小さい

要求だろう。一応、この人との関係を良好に保つ上では役に立ちそうだが、それ以外には使えない情報に違いない。

だが、最後だけはそうではなかった。

「私でも、死んだ奴は治療出来ない」

イザベラの表情は変わらないまま。だけど、隣にいるケイトの表情が、少しだけ曇ったのが分かった。

女医の言葉は淡々と続く。

「もし怪我をしたら、例えばそれが軽傷でも、あと少しでダンジョンクリアでも、今日の儲けがほとんどなくても、要するにどんな状況でも、とにかく撤退する事を選択肢に入れなさい。軽傷を負ったという事は、次は重傷を負うという事だと考えなさい。重傷を負えば、死はすぐそこだ。死との距離を確認する方法は、自分の身体に聞く以外ない。傷を見たらその背後の死を見る事。経験が浅いうちは、とにかくこれが鉄則だ」

言われた事を噛みしめるようにしながら、レオンはゆっくりと頷く。

それを確認すると、イザベラはケイトに視線を送る。もう言うべき事は言ったという事なのだろう。てきぱきとしていて効率的だ。医者という仕事をしていたら、自然とそうなるのかもしれない。

ケイトの方はどこか表情が固い。それを見ているレオンの方が、少し心配になった。

「では、レオンさん。私の方からは、ダンジョンの構造について、簡単にですが説明させていただきます。今から説明する事は、この先どのダンジョンに入った場合でも、すべてに共通している事です。今日入って出ていただければ忘れる事はないと思いますが、万が一確認したい場合には、いつでもギルドに尋ねて下さい」

「分かりました」

そこでケイトは少し微笑んだ。レオンの声に緊張が含まれていないのを確認して、少しは安心して貰えたのかもしれない。

「まず、ダンジョンの定義についてです。多くの方は、地下空間に

あつて、中にモンスターがいる場所をぼんやりとダンジョンだと考えていますが、ギルドには正式な定義があります。レオンさんは、ダンジョンも転生しているという話を聞いた事はありませんか？」

「え？」

思わず声が出る。そんな話は聞いた事もないし、考えた事もない。

「ダンジョンは入る度に構造が変化します。昨日と今日では、同じ人が入ったとしても、中にいるモンスターはもちろん、部屋や通路の配置、鍵や罠の有無も違います。昨日ダンジョン内で落とした物が、次の日入って見つかる事はまずありません。逆に、同時に入った冒険者の場合、つまり仲間の場合ですが、仮に中ではぐれてしまった場合でも、ダンジョンから出なければ合流出来る事が確認されています。ですが、一旦外に出てしまうと、中で再会するのは難しいと言えます」

そこでケイトは言葉を止めた。こちらをじっと見ている。どうやら、理解出来ているか確認したいようだ。レオンが頷いてみせると、彼女も小さく頷く。

「ですので、ダンジョンは普通の地下空間ではありません。学者の方々は、そこが時の牢獄ではないかとか、冒険者達の幻覚ではないかとか、それから先程の、転生しているのではないかという説、とにかくいろいろ議論されていますが、結論はまだ出ていません。ですが、ギルドとしてはその結論を待つわけにはいきませんから、とりあえずとしての定義を設けています。それは、入り口に導きの泉があるという事です」

導きの泉。レオンも名前は聞いた事がある。

「ビギナーズ・アイにも、入ってすぐにその泉があります。広い部屋の中央に、白い石で設えられた泉があつて、その中心部分に、同じ石で出来たカーバンクルの像があります。高さはだいたい1メートル程の像で、直方体の台座の上に、立派な翼の生えたカーバンクルが座っています。それは見ていただければ分かるのですが、問題はそのカーバンクルの見ている先です」

「見ている先？」

ケイトは軽く頷く。

「その導きの泉がある部屋に入ると、ちょうど台座の上のカーバンクルに見つめられる格好になります。というのも、像のカーバンクルは必ず入り口の階段の方を見ているからなんです。そして、実はこれが目印になっています」

「目印ですか？」

「はい。導きの泉はダンジョンの中に何カ所もあります。そして、そこにある像のカーバンクルは、すべて上り階段がある方を見えます。それで、不思議な話なんですけど・・・その上り階段は、そのすべてがダンジョンの入り口につながっているんです」

頭の中がこんがらがった。

「えっと・・・どういう意味ですか？」

レオンが首を捻りながら聞くと、ケイトは少し苦笑したようだった。

「仕組みは誰にも分かりません。ですから、事実だけをお伝えします。ダンジョンの入り口は一カ所だけです。ですが、導きの泉は、つまり、出口は何カ所もあるんです。中には何十階層もあるダンジョンもありますが、例えば、地下20階の導きの泉にある出口を使ったとしても、ほんの数秒歩くだけで、最初に入った入り口から出てきます。例えば2階でも、200階でも、道のりは同じだと言われているんです」

摩訶不思議な話だった。どんな仕組みなのか想像もつかない。

「ですから、導きの泉の場所さえ覚えておけば、入った場所を覚えておかなくても、ダンジョンから出る事が出来ます。ダンジョンは出る事さえしなければ構造が変わりませんから、余裕がある時に地図を書いておくといいと思います。或いは、目印でも構いません。退路の確保という意味で、是非利用して下さい」

よく分からないものを信じ切って利用していいのだろうか。レオンはそう思ったが、命に関わる事だから、それくらいは妥協した方

がいいのかもしれない。帰り道は短い方がいいに決まっている。長ければ長い程、モンスターに会う確率が上がるのだから。

レオンの頷きを見てから、ケイトは話を再開する。

「導きの泉についてですが、その部屋にはモンスターが出ないとも聞きます。もちろん、絶対出ないとは言えないと思いますが、遭遇しにくい場所とは言えると思います。それに、湧いている水も綺麗で、飲んでも平気だという事です。ですから、休憩をとる場合、可能なら、導きの泉で休むのがいいと思います。ダンジョンには時間の感覚がありませんから、無理をしないように、なるべく余裕をみて休息して下さい」

「・・・親切設計ですね」

思わずぼやくと、ケイトは苦笑いする。

ギルドからの説明はまだ続いた。

「最後に、いわゆるボスモンスターについて説明します。ボスモンスターは、必ずダンジョンの最深部にいるわけではありません。ですが、9割以上は最深部にいると考えていいと思います。そして、他のモンスターより強力な場合がほとんどですが、これも絶対とは言えません。ですから、当然、ボスモンスターにもギルドの定義があります。それをお見せしようと思ひまして、今日用意してきました」

「え？見せられるものなんですか？」

「はい」

ケイトはずっと右手を身体の後ろに隠していたが、それをすつと自分の胸の前に持ってくる。

彼女の親指と人差し指の間にあったのは、トウモロコシの粒くらいの大きさの、真っ赤なガーネットのような石だった。

レオンは顔を近づけてそれを見た。ただの宝石のようだが、よく見ると、中でゆっくりと水流のようなものが起きている。石ではなくて、枠の中に液体を閉じこめているのだろうか。

「これは魔石です」

全く心当たりのない単語だ。

それを表情から読みとったのか、ケイトは補足する。

「ルーンとも言いますが、魔石を加工したものがルーンですので、これは正式には魔石です。ただ、世間一般にはルーンという言葉が定着しています。レオンさんも、ルーンという言葉なら聞き覚えがあるのではないですか？」

「いえ・・・全然」

田舎者丸出しだが、本当に聞き覚えがないのだから仕方ない。

その返答には表情を変えず、ケイトは補足を続ける。

「魔石はその名の通り、魔力を秘めた石です。これを職人の方が加工する事で、ルーンとなります。ルーンは魔力に特定の働きかけをする物で、魔法の武器やアイテムに使われるのが主な用途ですが、それらには使えないような弱い魔力のものも多いです。そういった物は、一般的な装飾品としても使われています。見ての通り、見た目が綺麗ですし、魔力が弱いとはいっても、ちょっとした魔除けくらいにはなりますので、富裕層の方々の間では人気がある物なんです」

「という事は・・・もしかして、これも高価な物ですか？」

レオンの質問に、ケイトは軽く頷く。

「これは最小クラスの物ですけど、それでも、ルーンになったらそこそこの値がつくものです。というかですね、実はこれ、ビギナーズ・アイのボスモンスターがドロップする物なんです」

ドロップという言葉にも聞き覚えがない。落とすという事だろうか。だが、この前遭遇したモンスターは、ルーンどころか何も痕跡を残さなかった。煙のように消えてしまったのだ。そういう事態はギルドへの報告義務があるという事だったので、当然ケイトにも伝えてある。

彼女は魔石片手に話を続けた。

「通常のモンスターはまれに何か残していく場合もありますが、それはそのモンスター固有の素材である場合が全てです。例えば、獣

に酷似していれば、牙や爪。植物に似ていれば、茎や種等です。ですが、ボスモンスターのみ、倒すと必ず魔石を落としていきます。つまり、魔石を持って帰れば、そのダンジョンをクリアしたと認められます。魔石の形状や大きさは、ダンジョンによってほぼ決まっていますから、魔石さえ見せていただければどのダンジョンをクリアしたのが分かります。さらに、魔石の流通は基本的にギルドが引き受けています。ですから、換金という意味でも、魔石を得たらギルドに来て下さい。それがレオンさんの資金になりますし、またダンジョンクリアというステータスにもなります」

「それ・・・もし拾い忘れて出てきたら、どうなりますか？」

ケイトはにっこり微笑んだ。

「やり直しになります。ですから、絶対に忘れないで下さい」

努力が全て水の泡。資金もそうだが、ダンジョンクリアも認められない。結構重要な事だが、うっかり忘れてしまいそうな気がして、レオンは正直不安だった。

ケイトはラッセルに目配せする。彼女の話はここで終わりのようだ。

いつの間にか、ラッセルは背負い袋を抱えている。袋の容量の割には、中に入っている物は少な目ようだ。外からは、何が入っているのかよく分からないが、端から松明が突き出しているのだけは分かった。

彼はこちらに歩いてくると、それをレオンに差し出す。片手で持ち上げられるくらいだから、結構軽い物のようだ。

「とりあえず、食糧は最小限だよ。2日分。あとはまあ、いろいろ入ってるから、後で確認しておいて。在庫は確保してあるから、店まで来てくれたらいつでも補充出来る。だけど、たぶん足りない物とか、これがあったら便利って物もあると思うから、気づいたら僕に言ってね。なるべく早く早く用意するから」

レオンは袋を受け取った。

ラッセルはそれっきり何も言わなかった。この程度の説明なら、

事前に話してくれば済む事だが、実は今日彼がここにいるのは、彼がそう申し出たからだ。どうしても直前に直接渡したいと言ったのだ。その事実だけで、彼の気持ちが伝わってくる気がした。

3人の顔を見てから、やっぱりレオンは言わないではいられなかった。

「あの、本当にありがとうございます」

イザベラが淡々とした口調で言う。

「仕事だ。というか、もしかして1人か？」

「はい」

「それなら焦らない事だ。隠しても仕方がないから言っておくけど、ビギナーズ・アイは、4人パーティならば初心者でも、入ったその日にクリア出来る。だが、それが3人になると2日かかるようになる。2人だと1週間。1人だと2週間以上かけるつもりでいなさい。入って出てを繰り返して、徐々に慣れるようにしなさい。そうしないと、下手すると一生出て来られなくなる。その代わり、1人でクリア出来たら、4人でクリアした奴の数十倍は価値がある経験が来る」

優しさと厳しさ、両方とも伝わってくる。

「・・・はい。これからお世話になります」

そこで、イザベラは笑ったようだった。

「レオンは本当に変わった子だな。本当に冒険者か？噂になっていたよ」

その噂の発信源に、心当たりがないわけではなかった。

「・・・ベティが何か言っていましたか？」

だが、彼女はあっさり否定した。

「いや、うちの子達だ。一番上の子がアレンのところで剣を習ってる」

「あ、そうなんですか・・・」

まさに奇遇である。

「下手な真似をするな。レオンが帰ってこなくなったら、理由を子

供達に説明する羽目になる。そんな事は御免だ」

「・・・はい」

まだ付き合いが短いとはいえ、ユースアイの人達とも他人ではないのだ。

ケイトとラッセルの顔を見ると、2人とも微笑んでいた。多少ケイトの表情が不自然だったけれど、それは経験の差だろうか。彼女が案内した見習い冒険者のうち、どれくらいの人が帰ってこなかったのだろうか。それを聞いてみたくなったが、すぐに思い直す。今の自分が聞いてもどうにも出来ない事だし、何の為にもならない。

3人とも、もう何も言わなかった。

聞くべき事は聞いたのだ。

これはただの通過点。だから、見送りなんていらぬ。見送りなんてされたら、もうお別れみたいだ。ベティではないが、それくらいならクリア出来た時にお祝いして欲しい。

レオンは笑顔になって、その場で挨拶した。出来るだけ頼もしく見えるように。

「それじゃあ、行ってきます」
踏み出す。

それが、半月程かかってようやく実現した、レオンの冒険者としてのスタートとなった。

初心者の残照

入り口から覗いてみると、階段の先の部屋から灯りが差ししているのが見える。扉などはないようだ。距離があり過ぎて、ここからでは部屋の様子は分からない。

この階段に罠があったりしないだろうか。

いきなり罠というのも容赦のない話だが、絶対ないとは言えない気がする。そもそも、どの程度用心すればいいものなのか、加減が分からない。ダンジョンとは、何の為にあるのかも、誰が造ったのかも分からないものなのだ。ただ経験則として、罠が仕掛けられている事が多いというだけの事である。侵入者を撃退する意志は見えるのだが、何故撃退したいのかは分からない。これが仮に、元々誰かのお屋敷だったとか、誰かが住んでた洞窟だったとか、そういう来歴でもあれば、罠がありそうな場所に見当がつくのだが。

それでも、冒険者達はここを進むのだ。

彼らは怖じ気付いたりしない。どんなダンジョンでも、どんなモンスターでも、きつと冒険者が倒してくれる。そういう希望を一身に背負う存在なのだから。

自分もそういう人間になってみたい。それは結局レオンにとって、自分を知りたいという事に他ならない。前世が分からない自分は、どんな人間なのか自分でもよく分からない。空虚というか、足元がよく見えない。他の人にはある来歴が自分にはない。だが、もし冒険者になれたら、人の希望を背負えるだけの人間になれたという事なのだろうか。

それもよく分からない。

ただ、それでも挑戦してみたいと思ったのだ。自分を見られるチャンスがあるなら、見てみたいと思った。自分を確かめてみたいと

思った。

そして、もし見られるとしたら、それはダンジョンの中だと思ったのである。

魂の試練場。

導きの妖精。

レオンは小さく頷いた。

進もう。

ダンジョンに足を踏み入れる。石材の固さを確かめるような、そんな慎重過ぎる足取りだったが、これでいい。自分1人なのだから、自分らしい方法でいい。

一步一步慎重に進む。

下り階段は思ったよりも明るい。上からの太陽の光と、下からの室内の灯り。階段には何の光源もないのだが、その両者の光だけでも十分な程明るかった。もしかしたら、この通路に使われている石材が、光をよく反射しているのかもしれない。

結局、最初の部屋にたどり着くまでに10分以上はかかった。安全を買ったと思えば、安いものかもしれない。

聞いていた通り、最初の部屋には導きの泉がある。もちろん見るのは初めてだが、間違えようがない。中心に白亜の石で出来た泉と台座。その台座の上には、実寸大よりも少し大きいくらいのカーバシクルの像。普通の妖精とほとんど同じだが、やはり言われた通り、翼のようなものが背中から2枚生えている。その翼を中途半端に開いた状態で、まるで寐られたかのように行儀良く座っている。翼のせいなのか、どこか優美に見える。

当然だが、その瞳も白い。全身真っ白の石像が、こちらをじっと見つめている。

どこかで見た事がある。なんとなくそう感じたレオンだったが、すぐに思い出した。

そして、驚いた。

初めてモンスターと戦ったあの日。その後、ホレスの演奏を聞き

ていた時、一瞬だけ見えたあの光景。白毛に紅眼のカーバンクルがこちらをじっと見ていた。その光景と今の光景がそっくりなのだ。違いといえば、妖精の瞳の色と、翼の有無くらいのもの。

妖精もそうだが、背景には一点の違いもない。

まさにこの場所。少なくとも、ここそつくりの場所が、あの時見た光景の場所。

それを確かめずにはいられなかったレオンは、部屋の入り口で、じっと像の方を見つめたままになってしまった。今にもその石像がひび割れて、中から紅眼のカーバンクルが出てくるのではないか。そんな気さえた。

しばらくして、ようやく我に返る。

こんな事をしてる場合じゃない。部屋の様子を確認すらしていなかったのだ。モンスターがいたら怪我どころでは済まなかったかもしれない。

自分は一体何をしていたのか。

気を取り直して、部屋を観察する。

ケイトが言っていたように、相当な広さがある部屋だ。ニコルのガレージより広い。中央に泉があるものの、10人くらいは問題なく寝られるだろう。壁も床も天井も、どうやら石レンガのようだ。白に少し黄色が混じったような、見た事もない石材である。各壁の中央辺りには、松明に似た物が取り付けられていて、煌々と部屋を照らしている。

ふと、先日のモンスターの事を思い出した。そして、すぐに腰を屈めて、床に触れてみる。

結構しっかりしているようだし、仮にここから何か出てきても、音がするのすぐ分かるだろう。

壁にも軽く触れてみた。床と同じような感触。天井は高すぎて手が届かない。

水の流れる音が泉の方から響いている。

この部屋は上から見たらほぼ正方形の構造になっているが、入り

口から見て、左と右の壁のそれぞれ中央辺りに木製のドアがある。正面の壁には何もない。

進むなら、左か右か。そういう事らしい。

とりあえず、レオンは中央の泉に向かった。水が流れる音がしているのに、泉の中の水が増えたり減ったりする様子がない。どんな構造になっているのか見ておこうと思ったのだ。

縁に立って覗き込むが、ただ白いだけ。穴はおろか、突起や凹みのようなものもない。

水の流れる音がするだけ。

中央の像や泉の縁に触れたり、軽く叩いて音を聞いてみたりしたが、何も分らない。

手がかりはない。

レオンは左の扉に向かった。なるべく足音を立てないようにする。そっとドアに耳を当てる。何も聞こえない。

今度は右のドアの前まで行き、また耳を当ててみた。もちろん、音は立てないようにする。

音が聞こえた。

糸車が廻るような、カラカラという音。まさか本当に糸車があるとは思えないが、音はそっくりだった。

迷わず、レオンはまた反対の扉に向かう。

こういう時どちらのドアを選ぶべきなのか。そういう類の話を全く聞かなかったわけではないのだが、その答えは十人十色と言ってもよかった。そして、そのいずれの答えも、思わず頷けるようなものだったのだ。だから逆に、あまり参考にはならなかった。余計混乱したと言ってもいい。

だから、今の選択はレオンの勘である。

音がしない方が安全という根拠はない。だけど、何か異変があった時、聴覚を頼りに出来る。

異変を察知出来たからといって、対処出来るとは限らないのだが、左の扉の前でもう一度耳を当てて音がしない事を確かめてから、

少しだけ開けてみた。

その隙間から向こう側を覗き見る。

扉の先には通路が続いているようだった。ドアは1人が通れる程度の大きさのものが、通路の幅は3人並んで歩ける程広い。向こう側にも灯りがあるらしく、通路の様子もよく分かる。一応、背負い袋の中には松明もあるが、使わないで済むならそれに越した事はない。

通路は20メートル程先のところで右に折れているようだ。左側の壁にはその曲がり角の辺りに、右側は通路の中程の位置にドアが1つずつ。

何かが動く気配はない。

まるで深夜に部屋を抜け出る時みたいに、忍び足で通路に出て、静かにドアを閉めた。

静寂。

何も物音はしないが、もちろん安全が保障されているわけではない。

間違った選択をすれば、それはすぐに自分の身に跳ね返ってくるのだ。

思わず、唾を飲み込む。

ダンジョン攻略の為には、ボスモンスターを倒す事が条件。そして、ボスは大抵最深部にいると言われている。ここビギナーズ・アイは2階層ダンジョンで、ここは地下1階。つまり、下り階段を見つけたら、ボスがいる階層にたどり着く事になる。だが、階段がどこにあるのかはほぼランダム。決まった法則はないとの事だった。

とりあえず、しらみつぶしに確認していくしかない。

レオンはまず、すぐ近くの右のドアを調べる事にした。少しずつ、空白を埋めていくように進んでいきたい。不用意に進んで挟み撃ちにでもされたら、仲間がいない自分には対処出来ない。

畏がないか注意しながら、そっと扉を引く。

向こうには灯りが無いようだ。かなり暗い。

それでも、こちらからの光が差し込んで、近くだけはうつすらと確認出来る。

何かと目が合った。

暗闇に浮かぶ青い髑髏。

その眼窩がじつとこちらを見ている。

動く様子はない。

他人の部屋に間違えて入った時みたいに、たっぷり間を空けてから、レオンはゆっくりとドアを閉めた。

考える。

今のは何だろう。

モンスターだろうか。それにしては、こちらを襲ってくる気配はなかった。どちらにしても、不気味なのは間違いなかったのだが。

それでも、悪い状況の方を想定しておくべきだろうと考える。つまり、モンスターだと思っておくべきだ。さっきは襲ってこなかったが、次もそうとは限らない。

戦って倒しておくべきだろうか。だが、さっきのが一体だけとは限らないのだ。暗くてよく見えなかったから、もっと大量にいる場合もある。そうなったら、自分1人の手には負えないだろう。

しばらくその場で頭を悩ませていたレオンだったが、そこで、ニコルのガジェットの使用を思い出した。

右腕に巻き付けていた方を、くるくると解いていく。現在の長さは1メートル程。

両端の円錐状の器具を持って、その扉と導きの泉の中間辺りまで行く。そこでレオンは、床から1メートル程の高さの壁面に、円錐の平面部分を押し当てた。ニコルに教えられたように、傘の部分にある突起部分を操作する。しばらくしてから手を離すと、円錐状の器具は接着されたように壁から離れなくなった。

もう一方の端は反対側の壁面に取り付ける。通路の幅は3メートル以上あるが、端の器具内に予備部分が収容されているのだ。簡単な操作で、紐という糸の長さを調整出来るようになっていく。

程なくして、通路の高さ1メートルの辺りに1本の見えにくい糸が張られた格好になる。これ以上ないくらい、原始的で簡易なトラップ。

ニコルの発明にしては穏やか過ぎるが、端の器具が手の込んだ代物で、何度でも取り外し出来るし、取り付いている間は滅多な事では外れない。空気の圧力を利用しているとの事だが、レオンにはよく分からない。本人の目標としては、モンスターが引っかかって糸が切れた時に、その器具が爆発するようにしたかったそうだが、それだと小型化出来なかったらしい。そこで、もっと切れにくい丈夫な糸を使う事にして、簡易トラップという事にして落ち着いたようだ。結構高級な糸らしく、人が乗っても切れない程丈夫な物らしい。ちなみに、この糸は昔鍛冶場からくすねてきた物らしい。後でリディアに伝えておくべきだろうか、少し悩んでいるところである。いずれにしても、こうして罠を張っておく事にした。自分が引つかからないようにしないといけないが、こちらまで逃げてくれば足止めくらいにはなる。そうすれば、落ち着いて迎撃出来るはずだ。その後、背負い袋から松明を取り出した。通路に取り付けられている松明から火を貰おうとしたが、その時初めて全然熱を持っていない事に気付いた。どうやら魔法の灯りのようだ。仕方なく、発火用の石と紙切れを取り出して、それで火をつける。

松明は左手で持った。

先程のドアの前に立ち、音をたてないように小さく息を吐く。

覚悟を決める。

先手必勝。

ドアを少しだけ開いてから、思い切り蹴破る。

さっきと全く同じ位置に青い髑髏。

確認すると同時に、ダガーを右手で飛ばす。

完璧な軌道。

ダガーはあっさりと髑髏の眉間辺りに突き刺さり、それだけにとどまらず、その周辺をバラバラに碎いた。

だが、それだけではなかった。

残った部分は、まるで振り子のように宙をぶらぶらと揺れている。正確に言えば、振り子そのものだったわけだが。

元々、違和感はあったのだ。こちらと目が合ったはずなのに、身動きひとつしない。追いかけてこないのはまだしも、まったく動かないのは、意志あるものとしてはおかしい。

だが、まさか、こんな悪戯みたいな物があるとは思わなかった。

レオンは松明の灯りを近づけてみる。

髑髏の頭頂部。そこから目立たないくらい細い糸が、天井に伸びている。紛れもなく、ぶら下がっているだけだった。

「・・・なんだ」

ほっとしたような、騙されて少し悔しいような、複雑な気持ち。

あまり気持ちがいい悪戯ではないが、噛みついてくるわけではない。

だが、自分が思わず声を出していたのに気付いて、思ったより緊張していた事が分かった。モンスターと戦うという事に、それほど心理的な負担があったのか。

やはり、先日的一件事があったからだろうか。

最初の戦闘が敗北だったというのは、どうやらマイナスな部分が多いようだ。負けた経験だけで勝った経験がないから、どうしてもいいイメージを持つのが難しい。

悪戯ひとつに、馬鹿みたいに怯えなくてはならない。

そんな自分が弱く感じられて、そして情けない。

少し落ち込む。

だから、レオンは気付かなかった。

確かめなかったのだ。

そこが何の為の部屋なのか。

しばらくして、ダガーの分だけ増えた重さに耐えられなくなったのか、糸が切れて髑髏が床に落下する。乾いた破碎音と、金属音。

それから一瞬遅れて、カチッという音が部屋の奥から聞こえた。

レオンが視線をそちらに向けたのと、弦を弾く音がしたのはほぼ

同時だった。

その音を聞いた事があったのは不幸中の幸いだった。クロスボウがボルトを発射する音。クロスボウとは弓の一種だが、自分の力で弦を引くわけではなく、板バネの力を利用する。ニコルが趣味で作っている装置の中にそれを改造したものがあって、発射する音を聞いた事もあった。

だから、咄嗟に気付いた。

罨だ。

半歩身を引く程度しか動けなかった。

一瞬前まで自分の右半身があった空間を、視認出来ない程の速度の何かが射抜く。

背後の壁で乾いた音が響く。

壁の陰に避難してから、後ろを振り返る。

折れたボルトが床に落ちていた。

自分の身体を射抜いていたかもしれない、凶器。

跳ね上がった鼓動を抑えながら、頭の中を整理する。要は、あの髑髏を吊っていた糸がスイッチだったのだろう。冒険者が髑髏を攻撃するなり取り外したりすれば、その分そちら側が軽くなる。すると、反対側の重りか何かが下に落ちて、罨を起動させる仕組みだったのだ。今回は幸運にもダガーが刺さったまま残ったから、すぐには起動しなかったのだ。

もつとしつかり天井を見ていればよかった。せつかくの幸運をふいにするところだったのだ。

自分は何故見なかったのか。

落ち込んでいたからだ。

何を馬鹿な事をしていたのだろうか。

未熟。

その一言に尽きる。

だが、不思議とレオンはそれで気が晴れた。開き直ったと言ってもいい。

自分が未熟なのは百も承知だ。だから、危険な思いをするし、惨めにもなる。

だけど、そもそも何のリスクもなく冒険者になれるわけがない。もしそんな冒険者がいたら、頼りない事この上ない。

それを自分は、何を勘違いしていたのだろうか。今日すぐにダンジョンをクリア出来ると思っていたのだろうか。

自分は何を落ち込んでいたのだろう。これからこんな経験ばかりだというのに。

小さく息を吐く。今度は音を抑えたりはしなかった。来るなら来い。むしろ、来て欲しい。そう思えるくらいでないといけない。

まず生き残れるようにならないと。

状況を把握する。罾は発動したが、それで安全を確保したわけではない。じっくり室内を観察しなければ。投げた短剣も向こうの床に残ったままだ。

松明の灯りを差しのべながら、すぐ横のドアの奥をそっと覗き見る。

あまり広くない部屋。用途は分からないが、木製の棚が奥の壁に2つ。そこにあったクロスボウからボルトが発射されたようだ。

天井には予想通り、糸を通せる木製のリングが何力所か取り付けられている。

床には粉々になった髑髏。すぐ脇に短剣。

そして、ここから見て右奥の方には、これみよがしに小さな木箱が置いてある。

もしかしたら、何か役に立つ物かもしれない。そういう考えが、頭の片隅にはあったが、今の自分にはそんな余裕はない。

レオンは問答無用で、その木箱めがけてダガーを投擲した。

問題なく突き刺さったが、普通の木材に刺さった時のような硬質な音ではなかった。カリカリに焼いたパンをフォークで刺した時のような、パリッとした音。

それは紫の煙を上げたかと思うと、あっという間に姿を消した。何かのモンスターだったらしい。どんなモンスターだったのかはさっぱり分からなかったが。

意外にやれるじゃないか。

そんな思いがわき上がりそうになったが、すぐに飲み込む。これから先しばらく、もしかしたらずっとかもしれないが、とにかく今は必要ないものだ。

部屋に入って、ダガーを2本とも回収した。今はそうでもないが、何度も投げたら刺さりにくくなっていくに違いない。次からは砥石を用意した方がいいかもしれないと思った。

部屋には役立ちそうな物はなかった。だが、クロスボウはニコルが喜ぶかもしれない。そんなに重い物でもなかったので、持って帰る事にした。自分が通路に張っていた罠も、忘れずに回収しておく。

それから先も、とにかく扉をひとつひとつ確かめていく。中には鍵がかかった扉もあったが、開けられないような複雑な鍵はなかった。罠もいくつもあったが、気付かずにひっかかったものはない。

というのも、明らかに不自然な物ものばかりだったからである。最初の部屋の罫縷のように、なんとなく気になる物や無視しにくい物があつたら、なるべく飛び道具を当ててみる事にした。そして、その後すぐに、壁の陰に隠れる。難易度の低いダンジョンだからなのか、それで困るような罠はなかった。

モンスターも少ない。途中でモモンガみたいなのが3匹飛んで来るには来たが、ほとんど嫌がらせレベルの能力しかなかった。というのも、どうやら目があまりよくないらしい。こちらの顔に飛びかかってきたら怖いが、ほとんどそういう事はなく、ただこちらの周りを飛び回っているだけの有様だった。

それでもやはり、そう簡単にはいかなかった。

レオンが今身を屈めて覗き見ているのは、もしかしたらこのダンジョンで一番広い部屋かもしれない。40メートル四方はある大広間。何も物がない部屋なのだが、それは物に限った話である。

黒い鳥型のモンスター。何か意味があるのか、あの時のサソリと同じく一つ目である。大きさはそれほどでもないが、小動物なら十分に狩っていく程はある。その鳥が高い天井付近に3匹、休む事なく旋回している。

そして、下を守っているのは、カタカタと音をたてながら歩いている人の骸骨だった。右手に剣、左手に盾という標準的な装備だが、鎧はない。その骸骨が4体。

1人だと手に余る数である。だが、骸骨の動きは遅いから、駆け抜けていけば、攻撃されずに向こう側に見える扉までたどり着けるかもしれない。狭い部屋だったら無謀な話だが、これだけ広い部屋だから可能性はある。それでも、あくまで可能性だ。骸骨の動きがあれで全力とは限らないし、扉に鍵がかかっているかもしれない。それに、上にいる鳥型のモンスターをやり過ぎるのは難しいだろう。やり過ぎるのが無理なら、おびき寄せるのがいいだろうか。

レオンが今いるのは、その広間に続く扉の前である。ドアを少しだけ開けて覗き見ているのだが、こちらの通路ならば、それほど広くはないから、ニコル特製の簡易罠を使う事も出来る。足払いくらいにはなってくれるかもしれない。だがそれも、倒すとなると難しい。

こちらは諦めて、引き返すべきだろうか。

ここまで分かれ道のようなものはなかったから、引き返すなら最初の部屋まで戻る事になる。

それも仕方ないか。

そう思った時だった。

薪が破裂したような音。

すぐ近くで起きた突然の爆音にレオンの心臓は飛び跳ねたが、衝撃は身体にもあった。

ドアをこちらに向かって蹴破る何かがいたのだ。

咄嗟にドアから離れながらも、レオンの頭の中は思いの外冷静だった。

事態を把握しようと試みる。

骸骨の足音はしなかった。

という事は鳥の方か。向こうからは見えないうようにしていたつもりだが、もしかしたら、匂いか何かで分かったのかもしれない。

その予測を裏付けるように、開かれたドアの向こうから、鳥が3匹とも、一斉に襲いかかってきた。

鳴き声はない。そもそも口がない。

レオンは咄嗟にダガーを投げつけてから、身を屈めた。

それが1匹に命中。後の2匹は翼をはためかせながら、こちらの頭の上を飛び抜けていく。

まだ左手には松明を持っている。それがふと頭に過ぎった。動物ならともかく、モンスターに役に立つだろうか。

鳥は低くなった天井にぶつかりながら旋回している。止まっているも同然だった。

すぐにダガーを抜き、2投目。

問題なく命中。

床に崩れ落ちるモンスターを尻目に、残る1匹の動きを確認する。まだ旋回中。3投目も十分間に合う。

だが、そこで気付いた。もう1本は左側にぶら下げているのだ。もちろん手が届かないわけではないが、時間がかかる。そこまでの余裕があるかどうか、レオンは一瞬迷ってしまった。

結果、投擲のタイミングを失う。

モンスターは、既にこちらに滑空してきていた。

咄嗟に左手を掲げる。松明よりも、盾を掲げたつもりだった。だが、モンスターは火を見て驚いたようだった。滑空の勢いが衰える。今度は見逃さなかった。

モンスターと盾が接触したと同時に、レオンの右手が腰から抜いたショートソードが、3匹目を仕留めた。

消滅していくモンスターを確認してから、レオンは振り返った。やはりというべきか、骸骨の方もこちらに気付いたようだった。

ゆっくりとこちらに近づいて来ている。あまり速くは動けないのか、まだ開かれたドアの向こう側だった。

レオンは迷った。進むか、退くか。今は骸骨しかない。だから、広間を通り抜けられるかもしれない。

悩む事数秒。

レオンは広間に背を向けた。

そのまま走り出す。

ショートソードを腰に差し、2匹目が落下した辺りに落ちていたダガーを回収する。

それを腰に下げながら、床に手を突き、再び反転した。

駆け抜ける。

1匹目を仕留めたダガーを拾いながら、広間に飛び込んだ。ここも屋内には違いないのだが、まるで屋外に出たかのような開放感があった。

骸骨の動きは遅い。

その間を抜けるようにしながら、レオンは奥に見えていた扉を目指す。戦わないで済むなら、それに越した事はない。

十数秒程で近くまでたどり着く。

だが、すぐに駆け寄るわけにはいかない。もし罠があるとしたら、広間のどこかよりも、扉の近くだろう。他には何の特徴もない部屋なのである。今までのパターンからすれば、一番目立つ位置に仕掛けているに違いない。

走って速くなった呼吸を整える。

背後の骸骨達とはまだ距離がある。慌てなくても大丈夫なはずだ。近づいてきたら音で分かるはずだし、ここが開かなかったとしても、また駆け抜けて向こうに戻ればいい。

レオンは慎重に扉に近づく。一步一步、床の感触を確かめるように歩いた。

程なくして扉にたどり着く。

金属製の扉だった。遠くからは分からなかったが、装飾に隠され

るようにして鍵穴があるのが見える。

開けようとしてみるが、やはり鍵がかかっていた。どれくらい時間がかかるのか、外から判別するのは難しい。それに、背後からモンスターが迫っている状況で、自分が解錠に集中出来るかは難しいところだった。頭と手に相当な神経を使うのだ。後ろの方まで気にしていられない。

やはり戻ろう。

レオンは振り返る。

だが、そこで気付いた。

こちらに迫っている骸骨が2体しかない。あとの2体はどこに行ったのか。

その2体の姿を見つけた時、レオンは驚いたというよりも、何故か感心してしまった。

骸骨モンスターは半分だけ、向こうの扉の前に陣取っているのである。

戦略とかそういう物とは無縁なのだろうと思いこんでいた。そもそも、この骸骨達は動きが鈍いので、意志のようなものがあるとも思えなかった。だが、それはただの先入観だったようだ。少なくとも、敵の退路を断つ事を思い付くくらいの知能はあるらしい。

2体ずつに分かれているというのも、なんともそつないところだった。扉の前に1体だけだったら、そちらを奇襲して突破出来たかもしれない。だけど、2体ずつだったらそれも出来ない。その方が逃げられる可能性も減るし、こちらに向かってくる方も2体いるから、数の上で優位なのは変わらない。

まさに冷静沈着。

閉じこめられたのは確かだった。

出たければ倒せという事か。

レオンは松明を床に置いた。元々この広間は、十分な魔法の灯りがある。背負い袋も下ろす。それほど重くはないが、身体が軽いに越した事はない。

左手と右手。両方に短剣を1本ずつ持つ。ちゃんと回収していい良かったと、心からそう思った。

近づいてくる2体の骸骨は、つかず離れずといった距離を保っている。

遠距離なら攻撃し放題。とりあえずダガーを投擲しようとしたレオンだが、どこを狙おうか迷う。人型の骸骨だが、もちろん心臓も脳もない。どうやって動いているのか見当もつかない。

しばらく思案した結果、とりあえず頭を狙ってみる事にする。的として一番大きい。この距離なら、外す事もない。

呼吸を整えて、右腕を一閃。

真っ直ぐに頭蓋骨めがけて飛んでいったダガーだが、驚く事に、それは阻まれた。

骸骨の左腕が、まるで計算されたかのような正確な動きで、その軌跡を阻んだのである。

今までとは段違いの機敏な動きに、レオンの脳裏には先日の子型モンスターの光景が一瞬フラッシュバックした。

だが、すぐに振り払う。冷静になれと言っている自分が、どこかにいるような気がした。

思ったより手強いかもしれないというのはマイナスだが、守ろうとしたという事は、頭部への攻撃が有効と考えられる。それが判明したのはプラスだ。

左手のダガーを腰に戻してから、弓を手取る。あまり上手ではないが、こういう時に使わなければ意味がない。

矢を取ってから、構えて弦を引く。

十分弓がしなってから、手を離した。

矢の残像だけが残る。

速度は十分だが、頭蓋骨には命中しなかった。距離が近過ぎるのもあるかもしれないが、自分の腕が足りないのが原因だろう。はっきり言って、あの小さい的に当てる自信はない。

レオンは距離を取りながら、新しい矢を用意する。

次は身体を狙う事にした。隙間の多い身体だが、的としては大きい。

2本目は胸の辺りに命中。

少し頷いてから、次々と矢を取って射る。

3本目、4本目と命中したが、5本目はあさつての方向へと外れた。

あと半分。焦る気持ちを抑えつつ、また距離を取る。

6本目も命中。だが、あまり効いている様子はない。

7本目。

放った瞬間、いい感触がなかった。力が少し抜けてしまったような、どこか失敗したような気がしたのだ。だが、それが逆に良かったらしい。

その矢は偶然にも、頭蓋骨の眼窩の辺りを射抜いていた。

骸骨は紫の煙を上げながら消滅した。

思わず声をあげそうになったくらい嬉しかったが、そんな場合ではない。まだもう近くにもう1体。それ以外に2体もいるのだ。

矢はあと3本。

8本目。

少し力を抜いてみたが、やはりそう上手い話はなかった。外れたのを見て、内心かなり落胆したが、なんとか気を取り直す。

9本目。胸に命中。だが、モンスターの様子に変化はない。

ラストの10本目。

精一杯の願いを込めてはみたものの、やはり当たってはくれなかった。

半分溜息のような息を吐いてから、弓を背負い直す。1体倒せただけでも儲けものだと思うしかないだろう。

ショートソードを抜く。

前回のサソリの時とは違い、今度は鎧もある。それに相手も1体だ。向こうの方が、武器も盾も立派な物だが、それくらいは妥協するしかない。

レオンは駆け出す。骸骨の周りを回るようにしながら、隙を窺う。レオンは騎士でも戦士でもない。正面から切り込むつもりはない。骸骨の動きは遅いまま、こちらの動きについてこれていない。

背後を取ってから、思いつき剣を振り下ろす。

だが、それは甘かった。

骸骨は向こう側を向いたまま、腕だけ動かして、盾であっさりとそれを受け止めたのである。視界もさることながら、人間だとあり得ない関節の動きだった。

その動きに目を疑う。

隙だらけだと、モンスターにも分かったのだろうか。

やはり後ろ向きのまま、右脇腹めがけて剣を振るってくる。

その動きに、レオンは気付けなかった。

鎧越しの衝撃だが、裂けるような痛みがした。

レオンの身体を、骸骨は右腕一本で綺麗に吹き飛ばした。

床の上を数回転がってから、レオンは左手をついて起きあがる。

痛みで呼吸が乱れる程だった。

骸骨の持つ剣は立派な物だが、さすがに丈夫な鎧だけあって致命傷ではない。それでも、骨が折れていないのは幸運だっただけだろう。だが、もちろん無傷というわけではないし、若干右手の握力が弱い気がした。

それでも、剣は手放していない。

骸骨は振り返ってこちらに近づいてくる。

前後どちらでも見えるようだし、後ろ向きでも、剣も盾も問題なく使えるのだから、振り返る必要などないだろう。もしかして、それを隠しておくためだけにわざわざ向きを変えていたのだろうか。だとしたら、なんとも小憎らしい話だ。

なんとなく、そこで悟った。

このモンスターはかなりの剣の腕がある。訓練所のアレンと少し似ている剣かもしれない。少なくとも、自分よりもずっと上手なのは間違いない。

勝てない。

正攻法では。

レオンは距離をとりながら、右腕に巻いていたニコルのガジェットを解く。そして、それを今度は右手の平に巻いた。その糸の先端の器具をショートソードの柄に接着させる。これで、仮に剣を手放したとしても、床に落ちる事はない。

ショートソードをぶら下げたまま、両手にダガーを握る。二刀流は自分にはまだ難しいが、今は贅沢を言っている場合ではない。

手首を曲げて右手の感じを確かめてみる。怪我の影響はさほどない。だが、剣を下けているから、とにかく重い。投擲出来ない事はないが、狙い通りの位置には飛ばないだろう。だが、それでもやるしかない。

勝つ為に必要なのは、手数。

骸骨の方を見やる。悠々と歩いているように見えた。

これで駄目ならもう後はない。

一呼吸する。

レオンはモンスターに向かって走り出しながら、同時に右手で投擲を行った。

狙いは頭部。投げる前は心配したものの、上手く飛んでいる。

骸骨は盾をかざして防ぐ。

この時には、レオンはもう接敵していた。

既に、右手にはショートソードを握っている。いつでも握れるようにする為の処置だ。

それを頭蓋骨めがけて振り下ろす。

モンスターの盾はこれも的確に受ける。

剣と盾が接触する前に、レオンはあっさりショートソードを手放した。この攻撃はフェイントだ。

既に左手の短剣を繰り出している。

実はこれもフェイントだった。そもそも、自分はまだ左手を上手く使えないのだ。

骸骨がそれを迎え撃つように、右手の剣を振り下ろすのが見える。ここがタイミングだった。

左手のダガーを離しながら、その剣に盾を合わせる。さらに、その手放し方が問題だった。

その短剣が敵の頭蓋骨めがけて飛ぶように手放す。

ここが正念場。というか、ほとんど賭だった。

骸骨はそれにも機敏に対処した。

ショートソードからは既に力が抜けている。それくらいは、その剣を受けた盾から伝わってくるだろう。ならば、ダガーの方を対処するべきなのだ。それが刺さるかどうかは別にして、そちらの方が危険なのは間違いないのだから。

まさにギリギリの位置で、盾の端でその短剣を弾いた。

内心、レオンは舌を巻いた。

なんという対応力だろうか。見た目は骸骨でも、腕も頭脳も馬鹿に出来ない。

だけど、それでよかった。

きっと出来ると見込んでいたのだから。

骸骨が短剣を弾いた一瞬後。

力を失ったはずのレオンのショートソードが、再び命を取り戻したかのように一閃し、モンスターの頭蓋骨を捉えた。

モンスターでも、もしかしたら驚いたかもしれない。

レオンは煙を上げ始めたモンスターを見ながら、そんな事を考えた。

だが、それも一瞬の事。

骸骨は敗北を認めた騎士のように、潔くその姿を消した。

右手にはショートソードがしっかりと握られている。

最後の攻撃の姿勢のまま、じっとその剣を見つめていたレオンだったが、しばらくして大きく息を吐いてから、ゆっくりと体勢を戻していく。

相手の盾を攻略する為には、2方向から同時に攻撃するしかない。

だが、向こうにも腕が2本ある。敵の攻撃を防ぎながら、さらに両手で攻撃するのは、普通なら不可能な事だ。

だから、あんなややこしい方法をとったのである。一度右手がフエイントだと思わせれば、特に、一度柄から手を離すのが見えたら、さすがに油断してくれると思ったのだ。そうすれば、頼りない左手の攻撃を受けてくれる。その瞬間なら、相手の剣は自分の盾が、相手の盾は左手から飛んだ短剣に対処中であり、自分の右手が空いている。だが、そこで腰から剣を抜いている時間はないのが悩みどころで、正直、一瞬でまた手放した剣を握れるかは賭だった。

結局のところ、運の勝利。

あまり喜べない。

だけど、喜びも悲しみも、命あればこそというじゃないか。

右の脇腹はまだ痛む。重傷という程ではないが、イザベラ医師の言う通り、これ以上戦えば重傷を負うのは確実だろう。

そろそろ潮時だろう。

ふと、入ってきた方の扉を見やる。

まだ、門番の骸骨が2体陣取っている。意地でも逃がす気はないようだ。片方だけでも近づいてくるかもしれないと思ったが、その辺りは徹底している。少なくとも、向こうは食糧がなくても生きていける。我慢比べならば向こうが有利という事なのだろう。

短剣を回収してから、レオンは反対の扉へ向かう。近くには、背負い袋と松明があるが、松明はいい加減消え始めていた。

装飾が施された、金属製の扉。

向こうが駄目なら、こちらを開けるしかない。

背負い袋から、解錠ツールを取り出す。

針金を差し込んで程なくすると、簡単にはいかない事が分かる。高級品の鍵に違いない。あまり嬉しくはないが、さっきの骸骨に比べたら何でもない。

意識を頭と手と耳に集中する。

そこで気付いた。

扉の向こうから、ほんの少しだが水の流れる音がする。
今日聞いた音だ。

入り口で聞いた音。だけど、今は出口を示す音。
根拠はない。

だけど、確かに信じたくなるものなんだ。

先輩冒険者達の気持ちに一步近づいた気がする。

だが、それを確認するのはここを開けてからだ。

レオンの意識が、鍵穴の中へと深く浸透していった。

微細反応

「ほら。やっぱり爆弾があった方がよかったでしょ？」

大きな瞳をこちらに向けながらそう言ったのは、幼い容姿が特徴の、黒っぽいショートヘアの人物。今日は紺色の上下に濃い紫のジャケットという、ニコルにしては大人っぽい格好だが、それでも全く大人に見えない。子供が親の服を仕立て直して着ているような印象だった。もしかしたら、本当にそうなのかもしれない。

ニコルはガレージの床の上に座り込んで、見慣れぬ金属製の器具を片手に、ダンジョン土産のクロスボウを解体しているところだった。かなり手慣れている様子で、視線はこちらに向いているが、手は問題なく動いている。

その頭の上では、カーバンクルのクロが、じっとその解体作業を見守っていた。

ガレージ内唯一のイスに座らされているレオンは、控えめに答える。

「あつたらあつたで、怖かったと思うけど・・・松明片手だったし」
火気厳禁の代物を持っていたら、きっと松明なんて使えなかっただろう。

そこでニコルは呆れたような表情になる。

「レオンは度胸があるのかないのか、よく分からないよね。モンスターと戦うのは平気なのに、火薬を使うのは怖いのか？普通は、そんな生きるか死ぬかみたいな経験をしたら、じゃあ爆弾のひとつでも備えておこうってなると思うけど」

「そ、そう？」

「もし最後の部屋で持ってたなら、そんな一か八かみたいな賭をしなくても済んだわけでしょ？」

「・・・済んだかもね」

確かにそんな兵器を持ち込んでいたら、それを放り投げるだけで済んだかもしれない。

ニコルは手元に視線を戻しながら言った。

「やっぱり、威力があるやつを持っておいた方がいいと思うなあ。今のレオンに一番足りないのは、決定力というか継戦能力っていうか、結局、ダメージの総量だよね。昨日の鳥とか骸骨みたいに一発で倒せるような雑魚ならいいけど、ボスはもっとタフなわけだから戦っているうちに息切れするのが目に見えてるよ。それに、ボスだけならともかく、取り巻きがいるかもしれないわけだし、そんなのまでいたらもっとダメージを出さないといけない。火薬でも何でも、使える物は使った方がいいと思うなあ」

とても理路整然としている。本物の冒険者みたいだと思ったが、よく考えてみれば、ニコルはスニークの記憶を受け継いでいるのだ。もしかしたら、その前世の経験に基づいた話なのかもしれない。

だが、それを持ち歩く事を考えると、どうしても乗り気になれなかった。特に、灯りが必要な場所では松明を使う事になる。松明と火薬と一緒に持ち歩くなんて、考えただけでも恐ろしい。

そんなレオンの心境を読みとったのか、ニコルは解体作業の片手間といった感じで口を開く。

「そもそも、松明なんて使わなくてもよかったのに」

「え？」

真顔で聞き返したレオンを、ニコルは顔を上げてじっと見つめた。クロスボウを解体中だった手が止まっている。その為なのか、頭の上に張り付いているクロも、いつの間にか視線を上げてこちらを見ている。

ライトブラウンと紫の双眸。4つの瞳に注視されて、レオンは少したじろぐ。

しばらくして、ふとニコルは後ろを振り返った。

実は、今日はガレージにもう1人いるのである。

「ラッセル。レオンに道具の説明しなかったの？」

ニコルの質問を受けて、ラッセルは困ったような表情を浮かべる。彼は、ガレージの入り口に積み上げられた木箱の中身を確認しているようだ。

「してないけど・・・見たら分かるような物しか入れてないよ」

実際その通りだったが、ニコルはその回答が不満だったらしい。

「もしかして、つまらない原始的な物しか入れてなかったの？だめだなあ、ラッセルは。今は便利な物がいくらでもあるんだから、多少高価でもそういう物を入れておかないと。そうしないとラッセルだって儲からないよ。古くて安い物よりも、新しくて高い物を使って貰った方が、お互いの為になるに決まってるんだし」

「そう言われても・・・僕はギルドの注文通りに入れただけだから」
「ギルドに進言したらいいじゃない。もっといい物を買って欲しいって」

「いや・・・ケイトさんが困るだけだと思うよ。道具屋とギルドの板挟みになって」

「そういう仕事だから仕方ない・・・けど、うん。そうだね。ラッセルの言う通りかも。ケイトさんは真面目だから、きっと言っても聞いてくれないね。こういう時には頭が固いけど、まあ仕方ないよ」
「僕はそこまでは言っていないけど・・・」

ますます困った顔になったラッセルだったが、ニコルはもう興味がなくなっただのか、再び解体物の方へと視線を戻す。ニコルと以心伝心なのか、クロの視線も下を向いた。

ラッセルもすぐに自分の仕事に戻る。彼の前にある木箱は自分で持ってきた物で、どうやらニコルが注文していた物らしい。その中身が間違っていないか確認しているようだ。

急に静けさが訪れたガレージ内で、レオンは少し気まづくなった。自分も鍵開けの練習を始めてもいいのだが、同じ場所に3人もいるのに、何も会話がないというのは寂しくないだろうか。

昨日、レオンはダンジョンに初めて入り、そして、なんとか軽傷

だけで出て来られた。出た時はもう黄昏時だったが、診療所のイザベラ医師は何も言わずに診療してくれた。そして、ただ一言、明日は休養しなさいとだけ言われて、診療所を追い出された。

そういうわけで、いつもは訓練終わりの夕方に来る事が多いこのガレージを、初めて午前中に訪問した。訓練所のアレンとも話をしたいところだが、まだこの時間は仕事中だから、邪魔をしても悪いと思ったのだ。

すると、珍しい事に先客がいたのだ。ラッセルも仕事でここに来ていたわけだが、レオンも手伝おうとしたらやんわりと断られた。今日は休養日だという事を彼は既に知っていた。誰から聞いたのかは尋ねなかったが、だいたい予想はつく。

いずれにしても、珍しいシチュエーションには違いない。ガレージに3人以上集まる事は滅多にないはずだ。何かニコルに変化がないか、レオンは少し期待した。

だが、結果はこの通りである。

ニコルはマイペースそのもの。嬉しそうでもないし、嫌がっている様子もない。気を遣うわけでもなければ、誰かを邪険に扱うわけでもない。拍子抜けする程、普段通りだった。

だが、それが逆にレオンは不思議だった。ニコルは凄く落ち着いている。これならば、町の人とも普通にやっていけるのではないだろうか。少なくともレオンにとっては、ニコルは十分普通の人間だ。おかしいとか怖いとか、そういう印象はほとんどない。

それなのに、ニコルは外に出ようとしない。その理由が、レオンにはさっぱり分からない。町の人と距離を取らなければいけない理由なんて、一体どこにあるというのだろうか。

そんな事を思い耽っていたレオンの耳の近くで、突然声が響いた。「レオン、生きてる？」

はっと我に返ると、やっぱりというか、案の定ニコルの顔がすぐ近くにあった。さすがに慣れてきたのか、少し仰け反るくらいで、あまり驚かなかった。

「あ、ごめん。ちょっと考え事してて・・・」

その言葉に、ニコルは困ったように頬を掻く。

「考え事するのはいいんだけど・・・僕の気配、全然気付いてないよね。というか、僕が目の前にいる事の方に慣れてるし。それって、ますます鈍くなってるって事じゃない？」

鈍くなっているかどうかはともかくとしても、危機感が薄れていると言われても文句は言えない。

「・・・そうだね。ごめん」

「本当に大丈夫かなあ。ぼんやりしてるレオンの為に、これから毎回、ガレージに罠を仕掛けておいてあげようか？」

その提案自体はいいかもしいれないと思ったが、ニコルの作る罠といえ、間違いなく爆発系である。

「・・・命の保証がある罠なら」

ニコルは腕を組んで真面目な顔になる。そして、一度大きく頷いてから、こう断言した。

「命の保証がある罠なんて、罠じゃないね」

物凄く重みのある言葉だった。昨日借りたガジェットでさえ、例えば馬車が通るような道に仕掛けておけば、大惨事になりかねない代物だ。しかも、あれで妥協品なのである。本来なら起爆装置になるはずだったわけだから、もし完成していたら、致命的な罠になっていただろう。

そんなものを仕掛けられたらたまらない。命がいくつあっても足りない。

「・・・ごめん。やっぱり遠慮するね」

レオンの言葉に再び重々しく頷くニコル。頭上のクロもそれに伴って頷いたように見える。だが、その動作に何の意味があるのかは謎だった。

そこでニコルは腕を解いて、普段通りの表情で聞いた。

「それより、結局レオンはどうするの？」

何が結局なのか分からず、レオンは聞き返した。

「どうするって、何を？」

「だから、爆弾。というか・・・ああ、そっか。ちょっと待ってね」
ニコルは振り返った。

「ラッセル！」

まだ仕事中のラッセルだが、それでも手を止めてこちらを向く。

「何？」

「レオンの持ち物、ちょっとくらい融通利かないの？」

ラッセルは少し考えてから答える。

「元々、本人の希望にはなるべく応えるように言われてるんだ。だけど、あくまで予算内でだから、ニコルが言うような高価な物は無理だよ」

残念がっているかと思ったが、再びこちらを向いたニコルの顔には笑みが浮かんでいた。子供に似つかわしくない邪な笑みに一瞬驚くが、よく考えたらニコルはもう16歳のだから、全く不自然な事ではなかった。

いずれにしても、嫌な予感がしたのは確かだ。

「レオン」

「な、何？」

「今の話聞いたよね？」

よっぽど耳が遠くない限り、聞き逃すわけがない。

「聞いたけど」

「つまり、レオンが希望すれば、大抵の物は用意して貰えるんだよ」

「安い物ならね」

すかさず釘を刺したのはラッセルである。

「・・・ラッセルさんはああ言ってるけど」

レオンの言葉に頷いたニコルは、笑みをたたえたままこう言った。
「簡単な事だよ。買えないなら、自分で作ればいいよね」

しばらく思考に空白が出来たレオンは、首を捻ってから聞いた。

「・・・どういう意味？」

「大丈夫だよ。爆弾なんて簡単に出来るから」

あまりに自然な笑顔で言ったので、つられて頷きそうになった。だけど、すんでのところで気付く。

何か今、ニコルは妙な事を言わなかっただろうか。

「・・・今何て言った？」

「だから、大丈夫だって」

「その後」

「簡単に作れるから」

「・・・その間」

そこでニコルは苦笑した。

「そんなに爆弾作るの嫌かなあ」

啞然として固まるレオン。好きとか嫌いとか、それ以前の問題として、この子供にしか見えない人間が何を考えているのかよく分らなかった。

爆弾を作る。

そんな危険物を作らせて何をさせようというのか。というか、自分を何にするつもりなのか。

そこで、仕事が済んだのか、ラッセルが近寄ってくる。

「まあ、知識として、火薬の事を知っておくのはいいんじゃないかな」

彼の言葉を聞いて、レオンはやっとニコルの言葉の意味が分かった。

「あ・・・もしかして、ニコルが言ってたのはそういう意味？」

ニコルはすました表情で首を傾げる。

「結局のところ、そう言えない事もないけどね。だけど、レオンは冒険者志望なんだから、知識がどうこうって言ったところで、用途としては武器として使うのがほとんどだと思うよ。爆弾を作るっていう表現で正しいと思うけどなあ」

正しいのかもしれないが、そんな説明をされたら素直に頷きにくい。

ラッセルがこちらを見て、丁寧に補足してくれた。

「分かると思うけど、ニコルは凄く頭がいいんだ。だから、何でも自分で勉強して、自分で作れるようになってる。これだけ多くの物を作れるのも、細かいところから自分で作ってるからなんだよ。その方が安く済むし、使わなくなった物を分解して再利用したりも出来る。レオンも火薬の知識があれば自分で調合出来るようになるから、少ない予算でやりくり出来るし、ダンジョンの中の物を利用して来るようになるかもしれない」

「それに、火薬詰めたまま渡したら怖くて使えないんでしょ？ だったら自分で詰めて貰うしかないし、ある程度知識があれば、何が安全か危険か分かって貰えると思うからね。まあ、全部覚えるのは無理でも、その火薬に対する偏見がなくなるくらいまでなら大丈夫でしょ」

後を継いだニコルの説明で、ようやくレオンの頭でも事情が飲み込めた。

だけど、自分でそんな知識が理解出来るだろうか。あまり頭がいわけではないし、正直、火薬とか爆弾とかいった物は、物騒で手に負えない物というイメージしかない。猛獣とか暴れ馬とかと、だいたい似たような物だ。

そんな心境を汲み取ってくれたらしく、ラッセルはこう勧めてくれた。

「火薬に限った話じゃなくて、もっと広い知識として教わったらどうかな？ モンスターの中には酸や毒を使ってくるモンスターもいるし、植物や鉱石なんかを見分けられるようになったら、どこへ行っても役に立つと思うよ」

なるほど。それは納得出来ると思っていたら、そこでニコルがからかうように言った。

「ラッセルは口が上手いよね。さすが商売人」

若干照れたようにして、ラッセルが謙遜する。

「いや、僕はそんな・・・」

「だけど、女心の方はまだまだなんだよね？」

何かを誤魔化すように咳払いするラッセルだが、レオンはよく分からなかった。

「女心？ラッセルさんは誰か・・・」

「あ！僕はそろそろ失礼するね。じゃあ、また」

早口にそう言ったラッセルは瞬時に反転する。背筋がぴんととしていて、何かの式典の時みたいだった。

その数秒後には、ガレージから姿を消していた。いつもの彼からは考えられないような機敏な動き。人が変わったというか、まるで別の生き物みたいに見える。

呆然としたレオンだったが、ニコルの方は特に変化はなく、いつもの表情だった。むしろ、いつもより無表情だったかもしれない。余程興味がないのだろうか。

しばらくしてから、ニコルはガレージ奥の本棚の中を搜索し始める。頭上のクロは、いつの間にか眠りこけていた。

レオンは何を聞こうか考えていたが、その結論が出るよりも早く、ニコルの方から質問してくる。

「えっと、とりあえず、いろいろ勉強するって事でいいよね？」

ラッセルの事はもうどうでもいいのか、その前の話題に戻っていた。

「あ、うん。お願いしてもいい？」

「それはいいんだよ。僕としても、レオンの火薬嫌いが直らないと仕事にならないから。それはいいんだけど・・・」

珍しく、ニコルの歯切れが悪い。

「どうかした？」

ニコルは軽く頷く。

「ラッセルは大きく言ったけど・・・僕は火薬とか装置とか、そういうのには詳しいけど、他はあんまり自信ないなあ。全然勉強してないわけじゃないけど、他はもっと詳しい人があると思うよ」

「そうなの？」

「うん。毒とかだったら普通に医者の方が詳しいと思うし、鉱石は

鍛冶師だよね。ジェフさんを知ってると思うけど、あそこは自分で精錬もしてるからかなり詳しいと思うよ。まあ、あの一家は男が全然喋らないから、聞きたかったらリディアに頼むしかないけど」

「へえ……」

「植物は……フィオナさんかシャーロットかなあ」

どちらも聞き覚えのない名前だった。

「フィオナさん……？シャーロットって？」

ニコルはきよとした顔でこちらを見る。

「レオンは会った事ないの？」

「ないと思うけど……」

少なくとも、名前を聞いた記憶はない。

不思議そうな顔をしていたニコルだったが、やがて納得したように小さく頷く。

「あ、そうか。レオンはアスリートだったっけ」

今更な発言だが、外見を見てジーニアスだと思い込まれる事はある事だった。きっと、その時の印象がどこに残っていたのだろう。

本捜しを再開しながら、ニコルは説明した。

「フィオナさんは伝承者の先輩なんだよ。だけど、アスリートだと縁がないかもね」

「ああ、なるほど……」

どうやら伝説のジーニアスの記憶を受け継いでいるようだ。アスリートの自分が会っても、あまり意味がないという事だろう。

「シャーロットは魔法関係の道具屋をしてるんだ。ラッセルの店の隣なんだけど、入った事ないの？」

「あ、そうか。実は、僕はまだラッセルさんのお店に行った事がなくて……」

レオンは苦笑いしながら説明する。ラッセルは町の中で見かける事が多いから、用事があっても、店まで行かなくて済んでしまっていたのだ。よく考えると、あまりいいお客とは言えない。

ニコルはこちらを向いて少し微笑む。それが少し、レオンには意外だった。愛想笑いに見えるが、あまりそういう事はしない人物なのだ。

「まあ、まだレオンが行くような店じゃないと思うよ。シャーロットの店の商品はルーンを使った物も多いから、もうちょつとお金が稼げるようになってから行った方がいいね」

口調は普通だった。少し釈然としなかったが、レオンも普通の質問をする。

「そのフィオナさんとシャーロットさん、植物に詳しいの？」

「魔法を使う時に植物が必要だったりするんだよ。それと、魔法のアイテムの材料とかにも。だから、詳しいんじゃないかなあ。狩人のホレスも詳しいとは思うけど、知識の量ではジーニアスの方が断然多いと思うよ。狩人は現地の事には詳しいけど、ジーニアスはどこに行ってもやっていけるように、世界中の知識を学ぶからね。だいたい、ホレスはあんまり本なんか読まないと思うし」

確かに、ホレスは本どころか、あまり文明的なものに興味がなさそうだった。

本棚から数冊本を取り出しながら、ニコルは言葉を続ける。

「まだ会った事ないなら、会ってみたいと思うな。植物の勉強に付き合ってくれるかは分からないけど」

少し気になったので、レオンは聞いた。

「その2人って、どんな人？」

ニコルはすぐに答えず、大きな本1冊の上に割と薄い本を2冊積み上げる。体格の小さいニコルには重そうだったので、レオンは近寄ってその本を受け取った。

そこでもうやく、ニコルは答える。

「フィオナさんはね、たぶんこの町で一番頭がいい人だよ」

「え・・・ニコルよりも？」

迷う事なく、ニコルは頷く。器用にしがみついたままのクロが少し揺れる。

「シャーロットはちよつと変わり者というか・・・強いて言うなら、僕に似てるよね」

最後の言葉は苦笑混じりだった。レオンには、それが何故かなのかは分らないが。

「でも、2人ともいい人なのは間違いないよ。まあ、悪い人なんていないけどね」

「あ、うん。そうだね」

確かに、この町の人はいいい人ばかりだ。そう思って頷いたレオンに、ニコルはまた少し微笑んだ。またあの愛想笑いのような微笑み。今日はよく見られるが、やっぱり少し違和感がある。

そんな疑念をよそに、ニコルはレオンが抱えた本をポンと叩く。

「とりあえず、これを貸すから、時間がある時に読んでみて。あ、上2冊ね。大きいのは辞書だから」

「うん・・・ありがとう」

「お礼はいいけど、うーん・・・結局、すぐには無理だね」
レオンは首を捻る。

「何が？」

「いや、だって、すぐには火薬の事覚えられないと思うよ。だけど、またそのうちダンジョンに行くんでしょ？ やっぱり、何か威力がある武器がいるんじゃない？」

「あ、うん。それなら大丈夫」

ニコルは瞳を一度瞬く。

「何か当てがあるの？」

「先輩に相談してみる」

「アレん？ それともホレス？」

「両方」

ニコルは苦笑いする。

「どちらにしても、すぐには無理だと思うけどなあ」

仮に何かアドバイスされたとしても、すぐに身につくわけではない。

レオンは頷いた。

「うん。でも大丈夫」

「何で？」

「すぐには無理だって分かってるから」

一瞬ニコルの動きが止まった。瞳が大きくなる。

驚いているという事に気付くのに少し時間が必要だった。もしかしたら、驚いた顔を見たのは初めてかもしれない。

ニコルは呟くように言う。

「・・・たまにレオンは、意味不明な事言うよね」
そんな事を言われたのは、実は初めてではない。

「そ、そう？」

ニコルは笑った。今度はいつもの笑み。

「じゃあ、一応僕からアドバイスしておくよ」

「あ、うん」

「伝承者になる為の条件って知ってる？」

「え？」

知っているが、それが何だと言うのか。

頭上の妖精を撫でながら、ニコルは言った。愛おしむような表情だ。

「たまには、このお飾りの妖精達に働いて貰うといいんじゃないかな」

その言葉が聞こえているのかいないのか。

漆黒のカーバンクルは、今も夢の中にいるようだった。

暖色の小休止

冬の影はもうない。

それに気付いたのは、今が初めてだったのかもしれない。少なくとも、はっきりと意識したのは今が最初。だけど、身体の方はしっかりと季節の風を覚えている。もしかしたら、乾いた冬の風が去った事にずっと前から気付いていたかもしれない。

この間の雨。あれが変わり目だったのだろうか。

まだ日は高い。

春の陽気は本当に心地よい。レオンの故郷のような極寒の地はもちろんだが、どんな土地でもきつとそれは同じだろう。今のような暖かくて穏やかな午後は、何をするにも最適だし、何だって出来る。そんな可能性に後押しされた、身体が弾むような開放感がこの季節にはある。

アレンがいる訓練所の前にたどり着くと、いつものように子供達の歓声が聞こえてくる。それを聞くまでもなく、アレンがまだ仕事の中なのは分かっている。

一度酒場に戻って昼食をとり、ニコルに借りた本を読み始めたレオンだったが、これを半日中続ける自信はなかったし、一日中身体を動かさないというのが、思ったよりも苦痛だった。それならば何か手伝いでもした方がいいと思い、こうして早めに出てきたのだ。とりあえず挨拶だけはしておこうと、小屋の横を抜けて訓練場の方へ行こうとしたレオンだったが、意外な事に、小屋の中から話声がした。

立ち止まって、耳を澄ませてみる。

女性2人の話し声。聞き覚えのある声だった。

少し迷ったものの、レオンは一声かけていく事にする。恐らく彼

女達も仕事中だが、それなら手伝っていけばいい。

来た道を引き返して小屋の入り口に戻ろうとしたレオンだが、そこにたどり着く前に、中から人が出てくる。

女性ではなく、男性だった。とてつもなく背が高い。

「あ、どうも・・・アレンさん、仕事中心じゃなかったんですか？」

近づきながら声をかけたレオンを、アレンは特に驚きもせず見下ろす。彼が立って話をする場合、見下ろさないで済む場合はほとんどないだろう。

彼は簡易防具こそつけているものの、武器は持っていない。どちらかというと、仕事終わりのような格好だった。

「レオン。遅かったな」

感情のはっきりしない声だが、きっと皮肉ではないはずだ。いつものアレンの口調である。それでも、一応レオンは頭を下げた。

「すみませんでした。今日は休養するように言われていたので」

「それは聞いた。今日訓練しようとしたら、二度と無理が出来ないように、もっと重傷を負わせてやれとな」

「・・・ちなみに、それは誰から聞きました？」

「皆から聞いたが・・・」

既に広範囲に伝わってしまったようだ。その指令の発信元を特定するのは難しそうだった。もちろん、容疑者はそれほど多くないのだが。

それはともかくとして、レオンはアレンが出てきた小屋の方を見る。彼女達の話し声はまだ聞こえてくる。

「中にいるの、リディアさんとデイジーさんですよ？ 仕事中心ですか？」

アレンもそちらをちらりとだけ見た。

「訓練用の武具を点検しているところだ。もう終わる。彼女達に何か用事か？」

「あ、いえ・・・」

用事がない事もないが、ここに来た目的はアレンと話す為である。

だが、話し声を聞きつけたのか、中からその2人が出てきてしまった。リディアはいつかの白いシャツと黒いベストに、淡いブルーのズボン。だが、今日は胸の辺りに、髪と同じ色のブローチをつけている。枝に小鳥がとまっているような形。瞳とも近い色だからなのか、よく似合っている。デイジーの方は薄い茜色のワンピースだが、白いブラウスを肩にかけていた。そして、リディアのブローチと同じ色の髪留めをつけている。形は何かの花をモチーフにしているようだ。

「お身体は大丈夫ですか？レオンさん」

デイジーが笑顔で聞く。あまり心配しているように見えないが、深刻な顔をされるよりもよっぽどいい。大怪我をしたならまだしも、軽傷で済んだのだから。

それにしても本当に知れ渡っているんだなと苦笑いしつつ、レオンは頷く。

「ええ、まあ・・・すいません、お仕事なのに」

「いいんですよ。もう終わりましたから」

「リディアさんも、お仕事ご苦労様です」

彼女は軽く頷いただけだった。

何故かそこで、会話が途切れる。

無表情のアレンとリディア。微笑んだままのデイジー。それはいいのだが、誰も動こうとはしないし、口を開こうともしない。

いい加減耐えきれなくなったレオンが、仕方なく口を開いた。

「・・・あの、皆さん。僕はもういいですから、お仕事に戻って貰っていいですよ」

アレンが即答した。

「だから、こうして待っているんだが」

「・・・何をですか？」

真顔で聞き返したレオンに、彼は少しだけ表情を動かす。

「レオンは俺にアドバイスを貰いに来たんだろう？話を聞かない事にはアドバイス出来ない。だから、話し出すのを待っている」

しっかりとこちらの目的を見抜いていたようだ。さすがの洞察だと思ったが、もしかしたら、そこまで情報流出していたのかもしれない。

そのアレンの言葉に、デイジーが続いた。

「私も、しっかり聞いて祖父に伝えなければいけませんから。私が伝えれば、レオンさんが祖父のところまで出向く手間が省けます」

口ではそう言ったものの、彼女の濃い瞳には拭いきれない輝きがあった。あまり考えたくはないが、きっと戦闘系の話全般に興味があるのだろう。

下手に突っ込むのも嫌なので、黙ってリディアの方を見る。

その視線に気付いたリディアは、少し考えてからこう言った。

「・・・武器と鎧の具合を聞いておきたいから」

どうやら全員に話す必要があるようだ。

レオンは溜息を飲み込む。あまり格好いい話ではないから、出来るだけ聞かせたくない。少なくとも、喧伝してまわるような話ではないだろう。自分が未熟だと説明してるようなものなのだから。

だが、ここで抵抗しても無駄なのは明らかだった。ダンジョンから帰ったその日に、既に大方の事をベティに白状させられている。だから、もう皆に知れ渡ったも同然だ。自分がいくら沈黙を決め込んだところで、彼女に聞けば全て話すだろう。

「・・・あまり面白い話ではないですからね」

せめて、それだけは言っておいてから、レオンは話す覚悟を決めた。

だが、さすがに立ったまま聞かせるのは悪いので、小屋の中を借りる事にする。屋内には、大きなテーブルが2つとイスもいくつかある。そこに、男女向かい合うように座った。レオンの隣にアレン。彼の前にはリディア。自分の正面はデイジーである。アレンに聞いて貰う為にここに来たわけだから、この配置はおかしいような気がしたが、デイジーは聞き上手でもあるので、話易い事は確かだった。他の2人はあまり相槌を打ったりしないのだ。少なくとも、一番興

味津々に聞いているのは、間違いなくデイジーだった。

いざ話すとなると、どうやって話したらいいのか迷うところだった。実際、レオンはどちらかというと話下手な方だと自覚している。だが、ベティは遠慮なく質問してきたし、ニコルの時はラッセルが、今はデイジーが話を上手く誘導してくれるので、それほど困る事はなかった。

順序立てて、起きた事、遭遇したモンスターの事を説明していく。やはり一番の核心部分は、最後の広間での戦闘の事だった。

「運がよかったな」

話を聞き終えて一番最初の言葉が、アレンのその一言だった。

「ええ、まあ・・・自分でも、よくそんな真似が出来たと思います」
やや小さくなりながら言ったレオンだが、それがまさに本心だった。他の手を思いつかなかったとはいえ、今考えてみると、そんな賭を躊躇なく出来た自分が不思議だった。もう一度同じ事をやれと言われたら、絶対躊躇うだろう。そんな真似が出来たのも、戦闘によって興奮状態だったせいかもしれない。

「だが、そんな事が言えるのも命あってこそだ。諦めなかったのは誇っている」

こちらを向かずに、独り言のようにアレンは言った。表情はいつも通りだが、そんな話し方をするアレンを初めて見た。

そこに、優しさを感じた。或いは、心配したという言葉聞いた気がした。

リディアとデイジーも、そんなアレンをじっと見つめる。

しばらくの沈黙の後、再び口を開いたアレンは、もう元の声に戻っていた。

「武器は有効に使えている。もっとも、まだ武器に使われている感じだが」

「使われている、ですか？」

アレンは頷いた。

「どんな人間でも、装備が同じならだいたい同じような戦い方をす

る。自分が武器を使っているつもりでも、実際には武器に戦術を縛られている事が多い。真の意味で武器を使いこなすには、一人前よりもさらに一回り上の実力がいる」

デイジーがそこで補足してくれる。

「それは、レオンさんが使っているダガーを例えると分かり易いですね」

「え、これですか？」

今日も下げてきている短剣を、レオンは示した。

彼女は頷いてから説明を続ける。

「その武器を持たされたら、どんな初心者でも利き手で握って斬る事は出来ます。剣とは元々、そういう風にデザインされた物ですから。ですけど、もちろん他の使い方もあります。それは投擲用に重さを調整された物ですから、投げるのももちろんですが、軽い物です。補助武器としても使えます。慣れてくれば、武器としてだけではなく、防具としても使えますよ」

「防具ですか？」

盾とを考えても、これほど面積の寂しい盾はないだろう。

デイジーは微笑んでから、また頷いた。

「今は無理だと思えます。ですけど、剣とは刃がついただけの棒とも言えますから、そう捉えた戦い方もあるという事です。手に馴染めば馴染む程、理解すればする程、剣は斬る物という固定観念から解放されていきます。アレンさんが言う、武器に使われている状態というのは、まだその固定概念に縛られている状態の事だと思います」

彼女がアレンの方を向くと、その視線に気付いたのか、彼はゆっくりと頷いた。

概念としては分かってても、具体的に形にするのは難しい。だが、それはつまり、レオンがまだ武器に使われている証拠なのだろう。

「訓練するしかないだろうな」

脈絡もなくアレンが言う。

「とりあえず投擲は上手く出来ているようだが、それを左手で出来るようにする事。弓は、ホレスに接射を教わった方がいい」

「接射？」

「至近距離で弓を射る方法です」

デイジীর補足が入る。

「あと、剣か・・・それは俺が教えるが、どちらかというと、俺は敵だと思った方がいい」

「はい？」

いきなり妙な事を言われて、レオンは戸惑う。今から敵だと思っ
のはさすがに無理があるし、思いたくもない。

だが、そんなレオンを余所に、アレンはデイジীর方を向く。

「俺の剣を教えても、狩人のスタイルには合わないだろう。いつか
時間がある時でいいから、フレデリックさんに都合をつけて貰えな
いか？ ソードマスターなら、参考になるアドバイスが出来るかもし
れない」

デイジীরはにっこり微笑む。

「ええ、もちろん」

むしろ話したくて仕方ないのだろう。そして、自分も祖父からの
話を聞きたいに違いない。もしかしたら、自分の戦闘スタイルの参
考にしたいのかもしれない。

何か暗殺者とかを目指しているのだろうか。そんな想像が少しだ
け頭を過ぎったが、さすがにそれはないはずだ。だが、既に十分な
腕があるような気がするのもまた確かだった。

アレンはこちらを向いた。ここに座ってからは初めてかもしれな
い。

「レオン。その骸骨モンスターだが、俺に似ていると思ったのだろ
う？」

「あ、はい。一応・・・」

よく考えたら失礼な話である。だが、悪い意味で言ったわけでは
ない。剣の腕が相当なものだという意味である。

アレンの表情も、真剣そのものだった。

「つまり、そいつは戦士の戦い方をしていた。それなら、俺をそいつに見立てたらいい。俺が狩人の剣を教えるのは無理だが、戦士の剣を相手にする方法を教える事は出来る。だから、明日からはそのつもりで来い。もちろん剣の基本は教えるが、それをどう使うかは自分で考えろ。他にも、フレデリックさんやガレットさんやホレスもいる。彼らからもアドバイスを貰え。だが結局のところ、剣を振るのはレオンだ。それを忘れるな」

彼の言葉を、レオンは頭の中で繰り返す。結局、どういう意味なのか一言で説明するのは難しいが、要するに、戦闘スタイルというのはただの技術ではないという事だろうか。だから、人からそっくりそのまま教わっても意味がない。自分で咀嚼して使うしかないのだ。

レオンが頷くのを見て、アレンは話は済んだとばかりに前を向いてしまった。その正面にはリディアがいるわけだが、彼女は一言も喋らずに話を聞いているだけである。

「祖父の方は任せておいて下さい。私が上手く話しておきます」

デイジーの言葉に、レオンはそちらを向いて頭を下げた。

「お願いします」

そこで彼女は、隣にいるリディアに話しかける。

「リディアは？何か話したい事はないですか？」

その言葉にこちらをじっと見つめるリディア。最近やっと分かってきた事だが、彼女は考え事をする時に、じっと目を見つめてくる癖があるようだった。というよりも、自分の視線がどこを向いているか分からなくなる程考えているらしい。集中力が尋常ではないのだ。だが、それに気付いたお陰で、見つめられてもあまり緊張しなくなったレオンである。

しばらくしてから、リディアは唐突に口を開いた。

「武器の手入れの方法を覚えた方がいいと思う」

それを聞いて、レオンは思いだした。

「あ・・・そう。確かに、ダンジョンにいる時もそう思ったんです。特に短剣とかは、投げてばかりいるから、砥石か何かを持ち込んだ方がいいかなって」

リディアは小さく頷いた。

「さつきダガーを見た時に私もそう思った。まだ短いダンジョンだからいいけど、数日かかるようなダンジョンもあるから、手入れの仕方くらい知っておいた方がいいと思う。というより、レオンは手入れの仕方知らないの？」

最後は少し責めるような口調だった。自分が手を加えた武器だから、愛着があるのだろう。レオンも武器の手入れ方法を全く知らないわけではないのだが、どうやら今の手入れでは、リディアは不満なようだ。

「正しい手入れの方法を教えて貰えないですか？僕のやり方は、なんていうか・・・たぶん、邪道だと思うので」

狩人をしている父親に教わった方法だが、きっと我流なのだろう。再びリディアは頷く。無愛想なようだが、話してみると結構素直で親切な人なのだ。

そこでまた、レオンは思い出した。

「あ、そうだ。リディアさん」

「何？」

「リディアさんって鉱石の事に詳しいですよね？」

少し瞳を見開いたリディアだったが、すぐに答える。

「詳しいって程でもないと思うけど、仕事で使うから、普通の人よりは詳しいと思う」

「もし時間があつたら・・・いえ、何か鉱石に関する本とか、そういう本を貸して貰う事って出来ないますか？」

教えて欲しいと言いかけたが、よく考えなくても、リディアが忙しいのは明白だ。毎日仕事をしているのだから。

また彼女の遠慮のない視線が固定される。ある意味分かり易い。考え中というサインみたいに思えてくる。

「別にいいけど、どうして？」

「えっと・・・そういえばそうですね。特に目的があるわけじゃないんですけど、知っておいたら後々役に立つんじゃないかって」

「それなら、後でいいと思うけど」

そう言われると、確かにそうだった。今は他にもっと覚える事がある。

「・・・ですよね。じゃあ、もう少し後になったらお願いするかもしれない」

あっさり会話が終わってしまつて、変な沈黙が出来てしまった。それを察してか、デイジーが会話に割り込んできた。というか、アレンもリディアも、沈黙が苦ではないのだろう。

「そういう知識があれば、ダンジョンでも役に立つかもしれませんね。ダンジョンによっては、珍しい鉱石が採取出来る場所もあるそうですから」

「へえ・・・」

そんな話は初めて聞いた。だけど、そういう物を資金に出来るから、冒険者はやっていけるのかもしれない。

「レオンさんも、もし見つけたらリディアの為に持って帰ってあげて下さいね。リディアは珍しい鉱石なら、何でも喜びますから」

「ちよつと、デイジー・・・」

困つたような表情で止めるリディアに、デイジーは悪戯っぽい笑みを見せる。いつものお淑やかな表情とは違う一面だが、実はレオンは慣れている。ダガーの投擲を教えて貰う時、彼女は子供みtainな笑みを浮かべる事が多いのだ。その表情と、今の笑みはとてもよく似ている。

以前から感じていた事だが、リディアとデイジー、そしてベティもだが、この3人は仲がいいようだ。もっとも、ベティは誰に対しても親しげに話すし、彼女を相手にしたら、どんな相手でもいずれ根負けして受け入れてしまうだろう。

だけど、リディアやデイジーはそういう押しが強いタイプではな

い。どちらかというと、相手と距離をとる事が多いような、割と控えめなタイプである。だから、余計に2人の仲の良さが分かる。他の人には見せないような一面を、彼女達はお互いに見せ合っている。今も、2人の距離は近い。物理的にも、精神的にも、お互いのテリトリーを共有出来る程の親密さなのだ。

そういう仲のいい人を見ると、ついついレオンも嬉しくなってしまう。

「デイジーさんとリディアさん、凄く仲がいいですね。もう長いお付き合いなんですか？」

2人は一瞬視線を交わす。その動作にも、慣れた感じがよく出ていた。

笑顔で答えたのはデイジーだった。

「ええ。同じ年ですから。もう17年になります」
結婚して17年みたいな言い方だった。レオンは少し笑ってしまった。

「そういえば、髪留めとブローチ、同じ色ですよ。わざわざ揃いにしたんですか？」

何気なく言ったのだが、デイジーもリディアも驚いたようだった。そして、それはアレンも同じだったようだ。

「・・・本当だな。俺は全然気付かなかった」

「え、そうでした？ 僕は最初に気付きましたけど」

その言葉にデイジーが反応する。

「前も、リディアが珍しくスカートを穿いてたら言われたって・・・
レオンさんは、変なところを見てますね」

「変なところって・・・」

それは大袈裟だと思ったが、リディアが同意する。

「男の人は普通気付かないと思う」

確かに、アレンはそうだった。

「あれ・・・もしかして、僕、本当に変ですか？」

不意にレオンは動揺した。これはもしかして、自分が女っぽいと

いう事だろうか。男らしさが十分とは言えないが、さすがにそこまではないと思っていたのだが。

そんな様子を見て可哀想だと思ったのか、デイジーが助け船を出してくれる。

「それくらいなら変ではないと思います。女性なら一目見ただけで同じ人が作った物だと分かりますから」

「え、そうなんですか？」

確かに作りが似ているような気はしたが、同じ人が作ったとまでは断定出来ない。

「製法が一緒なのはもちろんですけど、デザインの趣味が同じですから。男性はあまりそういう事を信じませんが、女性は大事にしますよ。これを別々の人が作ったと言われたら、ほとんどの女性が疑うと思います」

「へえ・・・」

そういうものののだろうか。女性の勘と目の付け所に、レオンは少し感心した。

そこでまた、デイジーが悪戯っぽく笑う。彼女は左手で髪留めに触れながら言った。

「実はこれ、リディアの手作りなんですよ」

さすがにレオンは驚いた。デイジーの髪留めを見て、リディアのブローチを見る。そして最後に、リディアの顔を見た。気のせいかな少し恥ずかしがっているようだった。

どう反応していいか分からなかったが、とりあえず正直な感想を口にした。

「・・・凄いですね。売り物だと思ってました」

売り物は売り物でも、きつと高級品だと思っていた。デザインはそれほど複雑ではないが、精巧な作りで、手作り感が全くない。女性ならいざ知らず、男性のレオンなら、店に陳列してあったとしても不思議に思わないだろう。

デイジーは隣のリディアを見た。

「昔から得意なんです。今では、きっと町の誰よりも上手です」

「・・・プロだから」

力強く頷いてからリディアが言う。どうやら、プロという言葉に拘りがあるようだ。

「この髪留めも、6年前の誕生日に贈ってくれた物なんですよ。今よりもっと上手になっていくはずですよ。でも、私にとっては、上手でも下手でも、とても大事な物です。リディアが本物のデイジーの花を見ながら作ってくれた物ですから」

「え？その花がデイジーって言うんですか？」

全然知らなかった。花の名前には疎いレオンである。

デイジーが淑やかに微笑む。

「やっぱり男性ですね。この辺りでは有名な花ですよ」

知らなかったのはいただけないが、男性扱いされたような気がして、無性に嬉しかった。

仲良しの2人は、また慣れた様子で視線を交わす。デイジーはもちろんだが、あまり表情が豊かとは言えないリディアも、少し柔らかない表情になっている気がした。

その光景を見て、なんとなくよかったなと思った。少なくとも、いい休日だったと思えた。たまにはこういう日があってもいい。

よく考えてみたら、この町に来てからは初めての休日だった気がする。毎日毎日訓練して、勉強してばかりいた。雨が降った日も、とにかくじっとしているのが嫌で、酒場を手伝ったりしていたのだ。だけど、今日は怪我のせいで訓練出来なかった。晴れているから、手伝う程の仕事もない。

正直、身体が疼いて仕方なかったのかもしれない。どこか心が落ち着かない一日。

それでも、今初めて、ほっと出来たような気がする。

また明日から頑張れる。

正面の少女の頭をなんとなく見やる。

そこには、花びらの多い小さな花が、その名を持つ少女のように

慎ましく佇んでいた。

隙間風の摂理

狩人と一言で言っても、その生活は様々であるらしい。

レオンの父親も狩人だった。少なくとも、村の人は皆そう認識していたし、自分でもそう主張していた。だから、それを幼い頃から見てきたレオンも、きつとそうなんだと思っていた。

だけど、最近になって、その認識が揺らぎつつある。

隣で弓を引いている男。

あまり逞しい身体とは言えない。さらに、彼の着ている服が、もう少して布切れと化すその一步手前といった有様なので、どうしても見窄らしく見える。長めのダークブラウンの髪も、手入れ云々以前の問題で、恐らく無造作に伸ばしているだけに違いない。

それでも、やはりただ者ではない。一見細身に見える身体だが、若木のようにしなやかで、内には相当な力が秘められている。弓をいっばいに引いている今も、彼の身体は微動だにしない。まるで彫刻かの如く、遠くの一点を見つめたまま静止している。通常なら、弦を引く手には大きな負荷がかかるはずだが、彼の右手はまるで楽器を弾いているかのように静かに佇んでいる。

その瞳は、右目だけが新芽のような緑色。

一瞬その目を細めるや否や、芸術作品のように美しく留まっていた彼の時が弾けた。

驚く程、音が小さい。

それなのに、消えてしまったと思える程の、目にも留まらぬ矢の速度。

林の方に飛んでいったはずだが、レオンの目ではその軌跡を追う事は出来なかった。

わずかに遅れて、林から鳥が数羽飛び立っていくのが見える。

ここからその地点まで400メートル。もしかしたら500メートルはあるかもしれない。

何度見ても凄い。名人というか、もう超人だと思うしかない。

その凄腕の射手の方に視線を戻すと、彼は流麗な動きで弓を下ろしていた。これも何度も見ているが、まるでその動きだけ練習していたかのように、全く同じ所作である。同じ時を繰り返しているのかと疑ってしまう程だった。

彼は首を少しだけ捻った。

緑の右目だけが、こちらを見据える。

「分かったか？」

これも何度目かの質問だった。いい加減申し訳なくなるから、出来るなら分かったと言いたところだった。

しかし、分からないものは仕方ない。

「・・・いえ、さっぱり。というか、今思ったんですけど」

控えめな声で前置きすると、男は少しだけ頷いたように見える。

「林に向けて矢を射ってますけど、大丈夫なんでしょうか。動物に当たるかもしれないし、誰かいないとも限りませんし」

最初はそもそも届くと思っていなかった。届くなんてあり得ない距離なのだ。

彼の返事は簡潔である。

「岩に当てている。問題ない」

「・・・見えるんですか？ここから林の中が」

「ああ」

どうやら本物の超人だったらしい。視力が尋常ではない。

そこで、明るい少女の声が、目の前の男を挟んだ向こう側から聞こえてきた。

「レオンもさ、いい加減突っ込んでもいいと思うな。見ただけで分かるかーってはつきり言わないと、ホレスは平気でこれを一日中続けると思うよ」

男の陰になっているから姿は見えないが、もちろん誰の声かは分

かる。

それはそうと、言い方はともかく、彼女の言う事も一理あった。

「・・・すみません。やっぱり見たただけだと無理みたいです」

怖ず怖ずと告げると、ホレスは視線を遠くにやる。

「そうか・・・悪いな。人に教えた経験がほとんどないから、あまり教え上手じゃない」

「いえいえ！僕の方こそ、なんていうか、飲み込みが悪くて・・・」
恐縮するレオンに、ベティが笑いながら言った。

「そこでもっと押さないと。下手でもいいから努力しろーとか言ってみたら？」

「・・・そこまで図々しくはなれないです」

「ホレスと会話しようと思ったら、とにかく押さないとダメだよー。レオンもホレスも全然押しがないから、言葉は交わしてるけど、本当の意味で会話になってないし。全然摩擦が起きてないんだよねー。もっとお互いの事を分かり合う為に、本音で会話しないと」

レオンとホレスは、顔を見合わせた。

しばらくしてから2人はベティの方を見て、同時に言葉を発する。

「本音で話してますけど」

「本音でしか話せない」

男性陣の視線を浴びながら、彼女は苦笑いした。

「じゃあ、嘘でも・・・いや、とにかく、ああ、もういいかー。私が通訳するから、とにかく頑張ってー」

投げやりに言いながら、彼女は寝心地良さそうな草原に背を預ける。

訳が分からない男2人は、また視線を交わした。さっぱり分らないという事を、互いに確かめ合う程度の意味しかなかった。

駆け抜けていく春風が緊張を解す。

「・・・そろそろ休憩しよう」

ホレスがそう口にする、ベティが瞬時に跳ね起きる。彼女のポニーテールが、本当の馬の尻尾みたいに跳ね上がった。

「昼飯だ！」

「昼飯はやめろ」

「お昼ご飯だ！」

一瞬の会話。決まり文句みたいなやりとりに、レオンは呆気にとられる。案外、本当に昼食前の決まり文句なのかもしれない。

それはそうとして、そこで昼食となった。

3人がいるのは、ユースアイ南西部の平原。のどかな草原が広がっていて、南北両側に、それぞれ違った高さの山々を望む事が出来る風光明媚な場所である。さらに西には、先ほどホレスが矢を放った林があり、そこから時折鳥や小動物が顔を見せる。ピクニックにもってこいの場所である。

汲んでおいた水で手を洗ってから、大きなバスケットを囲うようにして座った。バスケットの大きさは尋常ではなく、旅行鞆の代わりに使えるような程である。

ベティがにこにこしながら、その蓋を開ける。今日の彼女は、淡いオレンジのワンピースに白いエプロン。ある意味この景色に一番似合っている。

「今日はサンドイッチ！私の手作りだよー」

その言葉通り、中にはサンドイッチがぎっしり詰まっていた。意外にも野菜が多いようで、見た目も鮮やかだ。

「凄いですね・・・」

「美味しそうでしょー？」

「え？あ、はい」

レオンの眩きは、出来映えよりもむしろ、その量に対するものだった。これはいったい何人分だろうか。3人どころか、6人いても間に合いそうなくらいある。これだけ作ろうとしたのもさすがだが、実際に作るのは相当大変だったはずだ。

もちろん、美味しそうなのも間違いない。

ふと気付くと、ホレスが右手を顔と胸の前で忙しく動かしている。何かの作法というか、神様に祈りを捧げているようだ。

気になってそれを見つめていたレオンだったが、その動きもあったという間に終わった。

「じゃあ、いただきますーす」

「いただきます」

少女の声に続いて、男2人の声が平原に伝わっていく。

一口食べてみて、レオンは驚いた。

ベティお手製のサンドイッチは、いつもレオンが酒場で食べているこってりした料理とは違って、かなりあっさりした味だったのである。

思わず、食べかけのサンドイッチを見つめる。

「何か、変な物入ってた？」

その声がかかなり近くから聞こえたので、レオンは慌てた。

いつの間にか、ベティの顔がすぐ近くにある。彼女はレオンの顔と、レオンの左手にある食べかけのサンドイッチを交互に見つめていた。

「いえ、そういうわけじゃ・・・」

「そう？何か慌ててない？」

「慌ててるのは・・・というか、ベティさん、わざとやってませんか？」

必要以上にお互いの距離が近いような気がした。

案の定、その言葉を聞いたベティの表情に笑みが浮かぶ。予想通り悪戯だったようだ。

「レオンも少しは耐性出来たねー。私の努力の賜物だね」

彼女は可笑しそうに言う。確かに彼女のお陰はお陰かもしれないが、きつと努力とは少し違うものだろう。

「・・・喜んでいいんですかね」

「ダメダメ。もっと精進しないと」

「・・・つまり、まだ僕で遊ぶ気満々ですか」

「うわー・・・レオン、鋭くなったね。じゃあ、ご褒美に、サンドイッチ食べさせてあげる」

彼女はこちらを見て微笑んだまま、無造作にバスケットの中に左手を突っ込む。

咄嗟に右手を出して阻止しようとしたレオンだったが、その前に彼女の右手がレオンの胸ぐらを掴んだ。

失敗したと思ったが、もう遅かった。

身体にかかる浮力。

見事なくらい鮮やかに、右腕一本で押し倒される。

柔らかい草原のクッション。

お陰でそれほど痛くはなかったレオンだったが、もちろんいい状況ではない。

彼女の左手が飛んでくる前に、両手を顔の横に挙げる。左手には食べかけのサンドイッチ。

だけど、彼女は止まらなかった。

次の瞬間には、レオンの口の中がサンドイッチで埋め尽くされていた。量が多い。胸ぐらを掴まれたままだったので、呼吸するのが辛い。

サンドイッチをねじ込んだ左手を戻しながら、ベティは少しだけ首を傾げた。

「こっちはまだまだだねー。位置から考えても、私の左手に間に合うわけないんだから、せめて右手に注意しないとダメだよ。というか、逆に私を押し倒すくらいじゃないと。そうしないと、もしバスケットの中に武器が仕込んであったら、仮に右手に対処出来たとしても、その後、武器を持った左手に襲われるんだから」

その言葉は聞こえていたものの、レオンはサンドイッチを飲み下すのに精一杯だった。

返事がないのにも構わず、ベティの考察は続く。

「最後の左手には間に合ってたけど、あれだって、もう押し倒された後のわけだから、あの体勢で攻撃を防御するのは難しいでしょ？ やっぱりね、戦いは先手必勝。今で言えば、私の右手が届いた時点で、というか、レオンが私の左手に気を取られた時点で、もう勝

負は決まっていたんだよ。まず冷静に私の右手を弾く事。出来れば逆にこちらを押し倒す事。それを一瞬で判断して実行しないと」

ようやく、レオンはサンドイッチを飲み込んだ。

「・・・せめて、左手を掴んでおくんでした」

最後にサンドイッチをねじ込んできた手の事である。

普段から彼女のこの手の奇襲はあるのだが、女性を相手に本気で戦えないと訴えたところ、両手を顔の横に見せて降参の意志を伝えれば、そこで戦闘終了というルールが定められた。

だが、今回はそのルールが破られた事になる。レオンの言葉は、その事に対する不満を込めたものだった。

ベティは口元を少し緩める。

「サンドイッチを食べさせてあげるって言ったでしょ？最後のはただのご褒美。どっちにしたって、怪我するわけじゃないんだし」

怪我はしないかもしれないが、危うく窒息しそうにはなった。

レオンは小さく息を吐く。よくある事だからとはいえ、いい加減慣れてきた自分が怖い。

「さってと・・・どうしよっかなー」

やたら楽しそうなベティの声が上から響く。

レオンは背筋が冷たくなった。いつもの彼女なら、先程のような感想を述べて終わりなのだ。それなのに、今日は身体を退ける気配がない。それどころか、まだ何かを企んでいるような表情だった。

身の危険を感じた。

すぐに状況の把握に努める。地面に押し倒された状態だが、彼女の右手が胸ぐらを、右足が腹の辺りを押さえているだけだ。完全に組み敷かれているというわけではない。自分の両手は自由だし、体重もこちらの方があろう。しかし、彼女は腕が立つし、それに何より、下手に暴れると、彼女が怪我をしないか心配だった。

交渉しよう。レオンは密かにそう決心した。

「あの・・・ベティさん？もう退いて貰ってもいいですよ」

ベティは笑顔になった。だけど、何かを覆い隠しているのがみえ

みえの笑顔だった。完全には隠せない程、隠そうとしている物が強大なのか。

「私が勝ったわけだし、レオンをどうしようと、私の自由でしょ？」
冗談だとしても、彼女の今の表情を見れば、全然笑えない。

「いえ、そんなルールはないと思いますけど・・・」

「勝負の世界では常識だと思うなー」

「常識って・・・」

「ここからレオンが逆転したら、私を自由にしていって事になるわけだし。だったら、公平な条件だと思わない？」

あまり思えなかったレオンだが、口に出すとまずいような気がしたので、無理矢理別の話題に移った。

「とりあえず、昼食をいただきますませんか？ほら、せっかくベティさんが作ってくれたわけですから」

その瞬間、胸ぐらを掴んでいるベティの右手に力がこもったような気がした。咄嗟にレオンの身体が緊張したが、幸いと言うべきか、攻撃はなかった。

草原の爽やかさがかき消される程、重苦しい沈黙。

何故こんな事になったのかと思っていると、変化が突然訪れた。ベティが急に笑みを引っ込めたのだ。

レオンは目を疑った。

無表情。いや、明らかに落ち込んでいる。

いつも明るい彼女がこんな表情を見せたのは、もちろん初めてだった。

「・・・美味しくないなら、無理して食べなくてもいいよ」

トーンの低い声に、今度は耳を疑った。

「はい？」

びっくりの連続で、こんな間の抜けた返事を返すのがやっとだった。

状況がさっぱり分からない。

「サンドイッチ。どこが口に合わなかった？」

また訳の分からない質問だった。

だけど、いつになく深刻な彼女の顔と声だった。もしかしたら、これが泣きそうな顔なのかもしれないと、一瞬だけ思った。

「えっと・・・ちょっと待って下さい」

そう断ってから、レオンは左手に残っていたサンドイッチを口に放り込んだ。倒れたままだったが、それほどの量ではないので、喉に詰まる事はない。一瞬、ベティの瞳が大きくなったような気がしたが、それには構わず、とにかく口の中に感覚を集中した。

野菜の食感も残っているし、パンも固くない。味は最初感じたように素朴だが、少し胡椒が利いているようだ。だけど、野菜やハムの味を邪魔する程ではない。

凄く無難にまとまっている。感動するような味ではないかもしれないが、そもそもサンドイッチで人を感動させるのは難しいのではないか。逆に、どこか欠点を見つけると言われても見あたらないから、そういう意味では出来がいいと言える。

それに、ベティが作ってくれた料理なのだから、普通のサンドイッチよりも美味しく感じる。例え有名な料理人だとしても、赤の他人が作った物と、知り合いが作ってくれた物では、やはり味わいが違う。

結局、レオンの口から出たのは次の一言だった。

「・・・これ、口に合わない人がいるんじゃないか？」

もし欠点を指摘出来る人がいるなら、それはきつと、サンドイッチ自体に何か恨みがある人ではないだろうか。偏った目で粗探しでもしないと、欠点と思えるような箇所はない。そうとしか思えなかった。

だけど、ベティはその答えを聞くなり、すつと目を細めた。

レオンの顔から血の気が引く。

「・・・今から正直に言えば、命だけは保証してあげるけど？」

彼女の目は完全に据わっている。この状況で笑える人がいたら、きつとその人は、前世が相当な猛者だったか、或いは、今現在相当

な猛者であるか、そのいずれかだろう。

両手を顔の横に持ってくる。今の彼女がこのルールを覚えているかは分らないが。

「しょ、正直に言ってますけど・・・」

「へえ・・・未練はないって事でいいの？」

ベティが握った左手を持ち上げる。

「な、何で信じて貰えないんでしょうか・・・」

声が尻すぼみに小さくなる。

彼女は微笑んだ。だが、目は笑っていなかった。

「レオン。冥土の土産に教えておいてあげる。女の子はね、手料理を作ったら、絶対最初の一口は見逃さない。見てないふりをしていても、こっそり見る。その時の反応の為に作っていると言っても過言じゃないんだから」

最初の一口。自分がどんな反応をしたか、必死に思い出そうとする。

それ自体は難しくなかった。

だけど、何故ベティが不満なのか、それがよく分からない。

「さあ、どう？正直に言う気になった？」

結論が出るよりも早い、最終宣告。

もうなりふり構っていられなかった。

「わ、分かりました！正直に言います！」

彼女は頷いた。拳は握ったままだったが。

なんだか不条理な気もしたが、とにかく誠意を尽くして話すしかない。

「一口食べてみて、とにかく最初に思ったのは、意外にヘルシーなんだなって事です。ほら、いつも酒場で食べてる料理って、こってりした物が多いじゃないですか。だから、新鮮だったというか、どちらかというと、村ではこういう物ばかり食べてたので、懐かしかったというか・・・あと、ベティさんが作ってたって聞いてたので、味付けが素朴だったのが意外だったというか、とにかく、全然、そ

の、美味しくないとか、口に合わなかったとかじゃなくて、ただ、予想と違ったから驚いたただけなんです！味とかそういう意味では、むしろ美味しかったですよ！」

最後を強調すべく必死にアピールした。

だがそこで、ようやく助けが来た。

「ベティ」

ホレスの一声。いつもの彼の声だった。

それなのに、その声には驚く程効果があった。

一瞬ベティの表情が乱れたかと思うと、彼女は慌てたようにレオンの上から飛び退いた。

解放された事に安堵するよりも、彼女の反応が気になって、じつとそちらを見つめてしまう。

彼女は気まずそうに視線を逸らして、元の位置に座り直した。俯いたままで、こちらの顔を見ようとしめない。心なしか、少し元気がないように見える。

いつもの彼女とは正反対と言っても良かった。

呆気にとられたままのレオンの耳に、ホレスの声が届く。

「早く食べろ。昼食が夕食になりかねない」

「え、あ、はい・・・」

その言葉に、レオンは反射的に身体を起こして座り直す。

誰も、何も言わない。

ベティとホレスを交互に見るのだが、ベティは俯いたままだし、ホレスは林の方を見ているだけだった。

さすがに気になったので、レオンは怖ず怖ずと尋ねた。

「・・・ベティさん、大丈夫ですか？」

彼女がこちらを向く。まるで人形みたいな表情。さすがに少し気圧された。

「・・・ごめんね」

やっと届くようなか細い声だった。本当に彼女の声だろうかと思っ

次に口を開いた彼女の声は、いくらか音量が回復していた。だが、視線がさまよっている。いつもの彼女とはまるで別人だった。

「ごめん。私、ちょっと、その・・・ああいうのはだめなんだ。その、レオンが嘘を吐いてるって思ったから」

「え？・・・あ、いえ、分かって貰えればいいんですけど」

よく分からないものの、ベティのあまりの深刻さにそう返事したレオンだったが、彼女は首を横に振った。

そこでホレスが唐突に口を挟む。

「俺はバターで死にかけた事がある」

端的過ぎて分かりにくい説明だった。普通に考えても、バターと死が結びつく事なんてあるだろうか。

その後をベティが引き継いだ。

「昔からね、今日みたいに、ホレスに差し入れするのはよくある事なんだ。ホレスは昔から、何でも美味しい美味しいって食べてくれるから、つい嬉しくて、いろいろ作って持って行ってたんだよ。だけど・・・だから、気づかなかったんだ」

それっきり黙ってしまう。

だけど今度ははっきり分かった。無表情が崩れそうになっている。今度こそ、本当に彼女は泣きそうだった。

レオンは何も言えなかった。いつも明るい彼女だし、以前お祖父さんの話を聞いた時も、彼女はここまでの表情をしなかった。

余程辛い事なのだろう。

重い沈黙を破ったのはホレスだった。

「どうやら、俺は牛乳とかバターとか、そういう物が食べられない身体らしい。ただそれだけの事だ。ベティが悪いわけじゃない。俺が自分の身体の事に気付かなかった。自分の身体に異常があったのに、それを気にも留めなかった。自業自得だ」

まだ話の細部は掴めないが、あまり聞きたい話とも思えない。ベティにこんな表情をさせてまで聞きたい話はない。

「いえ、もういいです。僕は全然・・・もう何も気にしてませんし、

それに、嘘を吐いたりもしません。これでいいですよね？」

その言葉を否定したのは、他ならぬベティだった。

「ううん・・・やっぱり、聞いておいた方がいいと思う」

彼女は真っ直ぐにこちらを見つめた。いつになく真剣な表情だった。

それを受け止めるレオンも、背筋が自然と伸びる。

「私も詳しくはないけどね、食べ物が原因で人が死ぬ事があるんだ。イザベラさんが調べてくれたんだけど、最初は身体が痒くなるとか、少し気持ち悪くなるとか、そんな程度でも、次に食べたら呼吸が止まったりする事もあるんだって。ホレスがそうなんだよ。最初は少し発疹が出ただけだった。だけど、その次は・・・」

ベティは言葉を濁したが、それが何よりの説明になっている。

つまり、彼女が持っていた料理で、ホレスが死にかけてしまった。彼女の料理に使ったバターが、彼の命を奪うところだったのだ。

「最初の時も、その時も、ホレスは私の料理を、美味しいって言うてくれたんだ」

「美味しかったからな」

ホレスが即答した。彼にしては早い回答だった。

彼の方を少しだけ見て、ベティは視線をこちらに戻した。

「だけど、正直に言ってくれたら、もしかしたら気付けたんじゃないかって、今でも思うんだ。だから、レオンも、料理くらいとか思わないで、何でも正直に言ってね。軽い嘘だって思わないで欲しい。なんていうか、レオンとホレスは似てるから、2人とも優しいから、だから余計に心配なんだよ。私に気を遣ったせいで、突然いなくなるんじゃないかって・・・ごめん。縁起でもないね。だけど、そんなつまらない嘘は吐かないで欲しい」

この表情を見ているだけでも、その一件が彼女の心にどれだけの影を落としているのかが分かる。モンスターに襲われた時よりも、祖父が亡くなった時よりも、彼女には辛い事だった。それは、彼女自身や祖父の命が、ホレスの命よりも軽いという事では決してない。

ただ、自分のせいで身近な人が消えてしまう。その恐怖が計り知れない程大きいものだったという事なのだ。

彼女の過剰とも言える行動は、自分が嘘を吐いたと思って、どうしても見過ごせなかったのだろう。もしかしたら怒っていたのかもしれない。

「こう言うとベティは怒るんだが」

ホレスがそう話を切り出した。

「俺は、あの時死にかけてよかったと思っている」

そんな事を言ったら、さすがに怒るだろう。だが、ベティの方を見ると、彼女は少し口元を緩めて肩をすくめただけだった。どうやら、もう怒りきった後らしい。

「レオン。狩人になる条件を知っているか？」

知らないし、考えた事もない。レオンの父親は、きっと自分で名乗っていただけだった。

首を横に振ってみせると、ホレスはリアクションせず話を続けた。

「自然の一部になる事だ。人間は肉体が滅んでも、来世でまた新しい肉体として生まれ変わる。自然も同じだ。一日を繰り返し、季節を繰り返す。土から植物が生まれ、それを動物が食べ、動物が死ぬと土に還る。その輪の中に入るのが狩人だ。自然の営みを見て、自然を理解して、その中で暮らす。そして、その一部になる。俺もずっとそうして生きてきた。だが、レオン・・・そのうちこう思うようになるんだ。俺が生きていても死んでいても、結局同じ事だとな」

生きていても死んでいても同じ。レオンには難しい言葉だった。「俺がこうして生きていても、或いは死んで土になっても、自然にとっては同じ事だ。俺はその一部でしかない。ただ、土なのかそれ以外なのか、せいぜい場所が違うだけだ。一日に例えるなら、昼なのか夜なのか、太陽がどこにいるのか、そんな程度の意味だ。自然から見れば、俺が生きているか否かというのは、その程度の違いしかない。俺はずっとそう信じていたし、それでいいと思っている

た。俺の命に、俺が生きている事に価値はない。この身体にも、全く未練はない。だから、あの時、最初に身体に発疹があった時も、何とも思わなかった。何かおかしい、病気かもしれないとは思った。だが、それだけだ。放っておけば死ぬかもしれないと、ほんの少しだが考えた。だが、重要な事とは思えなかった。どうせ同じ事なんだからな。だが・・・」

彼の右目だけが、彼の大事な家族を一瞬捉えた。

「あの日、俺は人生で一番苦しい時を過ごした。息をするのが難しい程だ。これで死ぬかもしれないと思った。それでいいとも思った。だが、声が聞こえた。ベティが俺の手を握りながら、ひたすら俺の名前を呼ぶのが聞こえた。後で聞いた話だが、丸一日以上、ずっとだ。ベティは泣いていたな。そんな声を聞いたのは初めてだった。その声を聞きながら、俺は考えた。何故彼女は泣いているのか。俺が生きていても死んでいても、同じ事だ。そもそも、生きている者は皆死ぬ運命だ。また来世になれば生まれ変わる。だというのに、彼女は何を泣いているのか。分からなかった。だが、レオン。俺は考えているうちに気付いた。もしかしたら、自然は輪を描いているわけではないのかもしれないとな」

自然が輪を描いているわけではない。

ホレスは視線を遠くにやる。

「何かはつきりとした答えを得たわけじゃない。ただ漠然と、もしかしたら、俺は間違っていたのではないかと考えただけだ。自然の一部になった気でいたが、よく考えれば、自然そのものとは違う。俺が自然の一部だと思っているにも関わらず、その中心からは自分を外している。それが矛盾のような気がした。何か俺は見落としている。そして、もしそうなら、俺は何をしているんだと思った。ベティを泣かせたまま、どこへ行く気なのか。不思議なもので、そう思った次の瞬間には、俺の意識が戻っていた。その時、確かに俺は確信した。輪の構造よりも、もっと世界を忠実に示す構造があると。その一端に触れたから、俺は帰ってきた。その一端が、彼女を泣か

せた。そしてレオン、弓を引く時もそうだ」

「え・・・弓ですか？」

ベティの声がそこに割り込んだ。もう、いつもの彼女の声だった。「その前と後だと、ホレスの弓の腕、全然違うんだよ。前は名人くらいだったけど、今は超人くらいあるし」

どちらにしても、レオンにしたら凄過ぎる腕前に違いない。

しかしそこで、連想するものがあつた。短い時間で、急に腕前が上がる。こういう話を以前聞いた事がある。

こちらの表情から読みとったのか、ホレスがその疑念に答える。

「いや、俺は伝説の記憶に触れたわけではない」

「違いますか？ 伝承者にアドバイスされた人の中には、そういう人もいるって聞きましたけど」

最初にフレデリック邸を訪ねた時、デイジーが言っていた事だ。

「俺は伝承者にアドバイスされた事がないから、はつきり違うとは断言出来ない。だが、俺は違うと思っている。実際、俺はそういった記憶を見た覚えがない。ただ、死にかけていた時はとにかく朦朧としていたから、覚えていないだけかもしれないが」

そんな状態だったのに難しい事を考えていられるというのは、やはりそういう生活を送ってきたからだろうか。ずっと自然の中で育ってきたのだ。よく考えてみれば、牛乳やバターが駄目だという事にその事故の時まで気付かなかったのは、それまで口にした事がなかったからではないだろうか。いったい彼はどんな生活をしていたのだろうか。

少なくとも、レオンの父親とは違う。父は間違いなく片手間にやっていた。それが良い悪いという話ではきつとない。村は人手が少なかったから、兼業が基本なのだ。

だが、ホレスはまさに生粋の狩人なのだろう。もしかしたら、ずっと1人で暮らしていたのかもしれない。

ホレスはこちらを見ながら話を続ける。

「弓はただ決められた姿勢で引けばいい物ではない。いや・・・決

められた姿勢を教わるというのも、恐らく悪くはない。だが、それだと精度に限界があるし、動きながら射るのは難しい。だから、レオン。弓を射る時には、弓と矢と目標だけに注意しては駄目だ。風や空気はもちろん、もっと広い意味で、空間の繋がりのようなものを意識しろ。自分の力が弓や矢にどう伝わっていくのか、そしてそれが他の物にどう伝わるのか、まずはそれを理解しろ。少なくとも、それが出来なければ狩人の弓とは言えない。直射でも曲射でもそれは同じだ。狩人にとって、それが基本でもあり、真髄でもある」彼の言葉を反芻してみる。空間の繋がり。力の伝わり方。それが真髄。

これ以上分かりにくい話があるだろうか。

「・・・難しいですね」

思わずそう漏らしてしまう程、難しい概念だった。口で言われてもさっぱり分からない。それに、仮に理解出来たとしても、実践出来る気がしなかった。

難しい顔をしているレオンを見て、ベティが微笑みながら言った。「とりあえず、先にお昼済ませた方がいいよ。お腹減ったら、頭も働かないし」

「・・・そうですね」

ベティの方を向くと、彼女はもう食べ始めている。いつもの笑顔に戻っているようで、レオンは安心した。

彼女特製のサンドイッチを頬張る。あっさりしていると思ったが、バターやマーガリンを使っていないという事だろう。だが、パサパサ感はない。何か工夫があるようだ。

「これ、全然パサパサしてないですよ。何か秘訣があるんですか？」

彼女は水筒に口をつけてから、ゆっくりと頷いた。

「もちろん。でも、秘訣って程じゃないよね。乳製品を使わなくても、意外となんとかなるもんだよ」

「へえ・・・」

そうは言っても、代用品を使えば、普通はそれだけ質が落ちる気がする。だが、この特製サンドイッチには全くそれが感じられない。ここまで工夫してくれるのは、やはりそれだけの愛情があるからに違いない。

「うちはお母さんが調理場に入り浸ってるから、その影響で私も料理好きなんだよね。だから、こういう試行錯誤は割と好きだし、結構得意だし。というか、私って、よく考えたら、家事はそこそ得意だなー。うんうん。いつでも嫁に行けるねー」

実際には、彼女はガレット酒場の一人娘なわけだから、嫁に行かれると大変かもしれない。だけど、そこに口を出す程、まだ自分は親しくないだろう。

そんな事を考えていたレオンだったが、そこで思わぬ奇襲がやってきた。

「というわけで、よろしくね、レオン。出来る嫁を貰って、幸せ者だねー」

結果、激しくむせた。

ベティはその背中を叩いてくれた。顔は笑っていたが。

「そんなに喜ばなくてもいいのにー」

「・・・喜んでません。驚いただけです」

「正直だなー、レオンは。うん、でも、今回はそれで許してあげようかな」

彼女は笑顔でそう言った。許すも何もないのだが、嘘を吐かないで欲しいと言った手前、正直に言ったレオンに敬意を表してくれたのだろうか。

小さく息を吐いてから、またサンドイッチに手を伸ばしたレオンに、思いついたようにベティが口を開く。

「そう言えば、お詫びしないとね」

手を止めた。どう考えても、彼女からのお詫びなんていい響きとは言えない。

「お詫びなんていいです。何も被害を被ってませんから」

予防線を張るように言った言葉。

ベティは少しだけ首を傾げる。

「・・・やっぱり、似てるよね」

「はい？」

「ホレスもねー、ずっとそう言うんだよ。お詫びなんてされたら困るって。ごめんって謝っても受け取ってくれないんだ」

そこで、その本人から声が飛んだ。

「ベティは何も悪くない」

そちらをちらりと見たベティだったが、やがてまた首を傾げた。

「・・・私の周り、どうしてもこういう男が集まってくるのかな」

それはきつと、誰にも答えられない問いだった。

だけど、レオンはひとつだけ分かったような気がした。それは、ホレスがベティからのお詫びを受け取らない理由。以前、モンスタ―から助けてくれたお礼も拒否していた。

なんとなくだが、レオンにはホレスの気持ちが分かる。もしかしたら、ベティの言う通り、2人が似たもの同士だからかもしれない。だけど、もっと根本的なもののように思える。

それがつまり、ベティとホレスの微妙な関係の要因。

これも難しい。

だけど、弓の真髓程ではない。

働き過ぎた為か、頭が変な熱を帯びてきた。

その脳に増援を送るべく、レオンは自然味豊かな特製サンドイッチを頬張った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6452y/>

夢色彩のカーバングル

2011年12月13日21時52分発行